

一般国道
10号線

椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第4集

徳永川ノ上遺跡Ⅰ

福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡の調査

1995

福岡県教育委員会

徳永川ノ上遺跡 I

福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡の調査

序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和62（1987）年から一般国道10号線椎田道路の建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。発掘調査は、平成2年度に終了し、平成4年12月25日に椎田道路が全線開通しました。

この報告書は、昭和63年度から平成2年度に発掘調査をした京都郡豊津町大字徳永所在の徳永川ノ上遺跡群についての第1冊目のものであります。徳永川ノ上遺跡は、ブレ縄文・縄文・弥生・古墳・中世の各時代の複合遺跡であります。今回の報告が弥生時代以前を対象とし、第2冊目が弥生終末から古墳初期の墳墓群、第3冊目が古墳時代以後を収録することになります。この第1冊目の報告の特色は、縄文時代の落とし穴状遺構群もさることながら、南側に隣接する弥生前期の環濠集落である神手遺跡と一連の住居跡や貯蔵穴群であります。報告書として十分に条件を満たしているものではありませんが、豊前地域の初期農耕集落の研究や文化財保護思想普及などに広く活用していただければ幸甚に存じます。

発掘調査及び整理報告にあたって、御協力いただいた方々に深甚の謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

例 言

- 1 この報告書は、昭和63年度から平成2年度まで、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道10号線推田道路建設予定地のうちの第4地点についての埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2 本書は、福岡県京都郡豊津町に所在する徳永遺跡群の「徳永川ノ上遺跡」に関する報告書で、主に弥生時代以前の生活遺構を扱った「一般国道10号線推田道路関係埋蔵文化財調査報告」第4集「徳永川ノ上遺跡Ⅰ」にあたる。なお、今後、主に弥生時代終末から古墳時代初頭の墳墓群を扱う「徳永川ノ上遺跡Ⅱ」、古墳時代から中・近世の生活遺構、墓制を扱う「徳永川ノ上遺跡Ⅲ」を引き続き刊行していく予定である。
- 3 本書の執筆分担は次のとおりで、各文末に担当を明記している。
 - I 柳田康雄
 - II 柳田康雄、緒方泉
 - III 緒方泉
- 4 遺構の実測図は柳田、副島邦弘、緒方の各調査担当者と天石夏実、大西智知、鷺見昌尚、辻川哲朗、土屋知子、西村健司、広瀬時習、森佳奈子、笠由美子、若林邦彦、荒巻朋子、犬塚カヲル、植山智保子、川野礼子、木下秀子、竹本美由紀、樋口多美子、溝辺慶子、三井恭子の各氏が、遺物の整理、図面の作成には、担当者の他に岩瀬正信、豊福弥生、平田春美、原かよ子、棚町陽子、久富美智子、藤原さとみの各氏が従事した。
- 5 掲載写真のうち、遺構は担当者が撮影したが、遺物は九州歴史資料館学芸第一課石丸洋参事補佐と北岡伸一の各氏があたった。また気球写真は空中写真企画画に委託した。
- 6 本書の編集は緒方が担当した。

本文目次

I はじめに

1 調査の経過と調査の組織	1
2 位置と環境	6

II 遺構と遺物

1 A地区の調査記録	9
(1) 遺 構	9
① 落とし穴	9
② 井 戸	13
③ 貯蔵穴	13
④ 大型竪穴	19
⑤ 不整形竪穴	22
⑥ ビット群	23
⑦ 溝状遺構	24
(2) 遺 物	24
① 土 器	24
② 石製品	31
2 B地区の調査記録	34
(1) 遺 構	34
① 落とし穴	34
② 貯蔵穴	36
③ 土壌墓	46
④ 土 塚	47
⑤ 竪穴住居	47
(2) 遺 物	50
① 土 器	50
② 石製品	87

3	C地区の調査記録	
(1)	遺構	94
①	落とし穴	94
②	井戸	104
③	貯蔵穴	107
④	竪穴	111
⑤	土塼	111
⑥	竪穴住居	114
(2)	遺物	116
①	土器	116
②	石製品	121
4	D地区の調査記録	
(1)	遺構	123
①	落とし穴	123
②	竪穴住居	133
(2)	遺物	140
①	土器	140
②	石製品	142
5	E地区の調査記録	
(1)	遺構	143
①	落とし穴	143
②	井戸	150
③	竪穴住居	150
(2)	遺物	154
①	土器	154
②	土製品	155
Ⅱ	おわりに	161

図 版 目 次

A地区の調査

- 図版 1 1) 萩川と徳永川ノ上遺跡A地区 (南上空から)
2) A地区全景
- 図版 2 1) A地区全景 (東上空から)
2) 1号落とし穴
- 図版 3 1) 2号落とし穴
2) 4号落とし穴
- 図版 4 1) 5号落とし穴
2) A地区井戸
- 図版 5 1) 1号貯蔵穴
2) 2号貯蔵穴
- 図版 6 1) 3号貯蔵穴
2) 4号貯蔵穴
- 図版 7 1) 5号貯蔵穴
2) 6号貯蔵穴
- 図版 8 1) 9号貯蔵穴
2) 10号貯蔵穴
- 図版 9 1) 11号貯蔵穴
2) 12号貯蔵穴
- 図版10 1) 14号貯蔵穴
2) 15号貯蔵穴
- 図版11 1) 1号大型堅穴
2) 3号大型堅穴
- 図版12 1) 3号・4号溝 (西から)
2) 10号溝 (南から)
- 図版13 1) 4号落とし穴・9号貯蔵穴群とピット群
2) ピット19の土器
- 図版14 1) ピット15・16の土器
2) ピット17の土器

図版15 A地区出土土器

図版16 A地区出土石器

B地区の調査

図版17 1) 祇川とB地区全景 (調査前、南から)

2) 祇川とB地区全景 (調査後、南から)

図版18 1) B地区全景 (東から)

2) B地区1号竪穴住居と貯蔵穴群 (真上から)

図版19 1) 1号落とし穴

2) 4号落とし穴

図版20 1) 6号落とし穴

2) 1号落とし穴

図版21 1) 8号落とし穴

2) 1号貯蔵穴

図版22 1) 2号貯蔵穴

2) 3号貯蔵穴

図版23 1) 4号貯蔵穴

2) 6号貯蔵穴

図版24 1) 7号貯蔵穴

2) 8号貯蔵穴

図版25 1) 9・10号貯蔵穴

2) 12号貯蔵穴

図版26 1) 11号貯蔵穴土器出土状況

2) 11号貯蔵穴

図版27 1) 18号・19号貯蔵穴

2) 20号貯蔵穴

図版28 1) 21号貯蔵穴

2) 22号貯蔵穴

図版29 1) 24号貯蔵穴

2) 25号貯蔵穴

図版30 1) 27号貯蔵穴

2) 28号貯蔵穴

- 図版31 1) 1号土墳墓
2) 1号土墳墓石器出土状況
- 図版32 1) 1号竪穴住居
2) 2号竪穴住居
- 図版33 1) 3号竪穴住居
2) 4号竪穴住居

C地区調査

- 図版34 1) 萩川とC地区全景(調査前、南から)
2) 萩川とC地区全景(調査五、南から)
- 図版35 1) 萩川とC・D・E地区全景(南から)
2) 竪穴住居群と落とし穴群(真上から)
- 図版36 1) 1号・2号落とし穴
2) 5号落とし穴
- 図版37 1) 9号落とし穴
2) 11号落とし穴
- 図版38 1) 12号落とし穴
2) 13号落とし穴
- 図版39 1) 14号落とし穴
2) 15号落とし穴
- 図版40 1) 16号落とし穴
2) 18号落とし穴
- 図版41 1) 19号落とし穴
2) 21号落とし穴
- 図版42 1) 29号落とし穴
2) 1号井戸
- 図版43 1) 2号井戸
2) 3号井戸
- 図版44 1) 4号井戸
2) 6号井戸
- 図版45 1) 8号井戸
2) 2号竪穴

- 図版46 1) 2号貯蔵穴
2) 3号貯蔵穴
- 図版47 1) 1号竪穴住居土器出土状況
2) 1号竪穴住居(土器取り上げ後)
- 図版48 1) 1号竪穴住居土器出土状況(A)
2) 1号竪穴住居土器出土状況(B)
- 図版49 1) 2号竪穴住居
2) 3号竪穴住居

D地区の調査

- 図版50 1) 萩川とD地区全景(調査前、南から)
2) D地区全景(調査後、南から)
- 図版51 1) 竪穴住居群(南西から)
2) 竪穴住居群(真上から)
- 図版52 1) 1号落とし穴
2) 2号落とし穴
- 図版53 1) 3号落とし穴
2) 4号落とし穴
- 図版54 1) 5号落とし穴
2) 7号落とし穴
- 図版55 1) 8号落とし穴
2) 10号落とし穴
- 図版56 1) 9号落とし穴(ピット内礫石除去前)
2) 9号落とし穴(ピット内礫石除去後)
- 図版57 1) 11号落とし穴(礫石除去前)
2) 11号落とし穴(礫石除去後)
- 図版58 1) 12号落とし穴
2) 13号落とし穴
- 図版59 1) 14号落とし穴
2) 15号落とし穴
- 図版60 1) 17号落とし穴
2) 3号竪穴住居

- 図版61 1) 1号竪穴住居
2) 1号竪穴住居屋内土壌
- 図版62 1) 2号竪穴住居と割竹木棺(遠景)
2) 2号竪穴住居と割竹木棺(近景)
- 図版63 1) 3号竪穴住居(真上から)
2) 3号竪穴住居(南から)
- 図版64 1) 4号竪穴住居
2) 4号竪穴住居屋内土壌
- 図版65 1) 6号竪穴住居(真上から)
2) 6号竪穴住居(西から)
- 図版66 1) 6号竪穴住居(東から)
2) 6号竪穴住居屋内土壌
- 図版67 1) 7号竪穴住居(東から)
2) 8号竪穴住居(西から)
- 図版68 1) 8号竪穴住居(北から)
2) 8号竪穴住居屋内土壌

E地区の調査

- 図版69 1) 穢川とE地区全景(調査前、北から)
2) 徳永川ノ上遺跡全景(調査後、北から)
- 図版70 1) E地区全景(南から)
2) E地区全景(真上から)
- 図版71 1) 1号落とし穴
2) 1号落とし穴土層断面
- 図版72 1) 3号落とし穴
2) 4号落とし穴
- 図版73 1) 5号落とし穴土層断面
2) 6号落とし穴
- 図版74 1) 7号落とし穴
2) 8号落とし穴
- 図版75 1) 9号落とし穴
2) 10号落とし穴

図版76	1) 1号井戸 2) 2号井戸
図版77	1) 1号竪穴住居 2) 4号竪穴住居
図版78	1) 4号竪穴住居出土状況(遠景) 2) 4号竪穴住居土器出土状況(近景)
図版79	各地区出土土器1
図版80	各地区出土土器2
図版81	各地区出土土器3
図版82	各地区出土土器4
図版83	各地区出土土製品と炭化米
図版84	各地区出土石器1
図版85	各地区出土石器2
図版86	各地区出土石器3
図版87	各地区出土石器4
図版88	各地区出土石器5
図版89	各地区出土石器6
図版90	発掘調査に参加したみなさん

表 目 次

第1表	国道10号線椎田道路発掘調査地点一覧表
-----	---------------------

付 図 目 次

付図1	徳永川ノ上遺跡発掘区地形図(1/2000)
付図2	徳永川ノ上遺跡遺構配置図(1/200)

挿 図 目 次

第1図	一般国道10号線椎田道路路線図 (1/400000)	2
第2図	徳永川ノ上遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50000)	7

A地区の調査

第3図	徳永川ノ上遺跡A地区遺構配置図 (1/200)	10
第4図	落とし穴実測図① (1/30)	11
第5図	落とし穴実測図② (1/30)	12
第6図	井戸実測図 (1/30)	13
第7図	貯蔵穴実測図① (1/40)	14
第8図	貯蔵穴実測図② (1/40)	15
第9図	貯蔵穴実測図③ (1/40)	17
第10図	貯蔵穴実測図④ (1/40)	18
第11図	貯蔵穴土層断面図 (1/30)	20
第12図	1号～2号大型竪穴実測図 (1/60)	21
第13図	大型竪穴・溝土層断面図 (1/60)	22～23
第14図	不整形竪穴実測図① (1/40)	24
第15図	不整形竪穴実測図② (1/40)	25
第16図	落とし穴・貯蔵出土土器実測図 (1/4)	25
第17図	貯蔵穴・不整形土塼等出土土器実測図 (1/4)	26
第18図	1号竪穴出土土器実測図 (1/4)	28
第19図	竪穴・溝・ピット出土土器実測図 (1/4)	29
第20図	ピット出土土器実測図 (1/4)	30
第21図	A地区出土土器実測図 (1/2)	32

B地区の調査

第22図	1号～4号、6号落とし穴実測図 (1/30)	33
第23図	7号～8号落とし穴実測図 (1/30)	35
第24図	1号～4号貯蔵穴実測図 (1/40)	37
第25図	6号～10号貯蔵穴実測図 (1/40)	39
第26図	11号～14号、18号貯蔵穴実測図 (1/40)	40

第27図	17号、19号～21号貯蔵穴実測図 (1/40)	41
第28図	22号～25号貯蔵穴実測図 (1/40)	43
第29図	5号、26号～28号貯蔵穴実測図 (1/40)	45
第30図	1号土墳墓実測図 (1/20)	46
第31図	1号、5号土墳実測図 (1/40)	48
第32図	1号竪穴住居実測図 (1/60)	49
第33図	2号竪穴住居実測図 (1/60)	50
第34図	3号竪穴住居実測図 (1/60)	51
第35図	4号竪穴住居実測図 (1/60)	51
第36図	1号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	52
第37図	2号～3号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	54
第38図	5号～7号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	57
第39図	8号～10号、14号、18号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	59
第40図	11号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	61
第41図	19号～20号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	64
第42図	21号～22号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	66
第43図	23号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	69
第44図	24号～25号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	71
第45図	26号、28号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	73
第46図	27号貯蔵穴出土土器実測図① (1/4)	75
第47図	27号貯蔵穴出土土器実測図② (1/4)	76
第48図	27号貯蔵穴出土土器実測図③ (1/4)	78
第49図	27号貯蔵穴出土土器実測図④ (1/4)	80
第50図	27号貯蔵穴、1号・5号土墳、ピット7・40・216出土土器実測図 (1/4)	82
第51図	ピット40・166・206・209・216～217出土土器実測図 (1/4)	84
第52図	ピット85、位置不明出土土器実測図 (1/4)	86
第53図	3号竪穴住居出土土器実測図 (1/4)	87
第54図	B地区出土土器実測図① (1/2)	88
第55図	B地区出土土器実測図② (1/2)	89
第56図	B地区出土土器実測図③ (1/2)	91
C地区の調査		
第57図	1号～5号落とし穴実測図 (1/30)	95

第58図	6号～9号、11号落とし穴実測図 (1/30)	96
第59図	10号、12号落とし穴実測図 (1/30)	98
第60図	13号～14号落とし穴実測図 (1/30)	100
第61図	15号～16号落とし穴実測図 (1/30)	101
第62図	17号、20号落とし穴実測図 (1/30)	102
第63図	18号～19号、21号落とし穴実測図 (1/30)	103
第64図	1号～4号井戸実測図 (1/40)	105
第65図	5号～6号井戸実測図 (1/40)	106
第66図	7号～8号井戸実測図 (1/40)	107
第67図	1号～4号貯蔵穴実測図 (1/40)	108
第68図	1号竪穴実測図 (1/40)	109
第69図	2号～3号竪穴実測図 (1/40)	110
第70図	1号～2号、5号土壌実測図 (1/40)	112
第71図	3号～4号土壌実測図 (1/40)	113
第72図	1号竪穴住居実測図 (1/60)	114
第73図	2号竪穴住居実測図 (1/60)	115
第74図	3号竪穴住居実測図 (1/60)	116
第75図	4号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	117
第76図	1号竪穴住居出土土器実測図① (1/4)	119
第77図	1号竪穴住居出土土器実測図② (1/4)	120
第78図	2号・3号竪穴住居出土土器実測図 (1/4)	121

D地区の調査

第79図	1号～2号落とし穴実測図 (1/30)	124
第80図	3号落とし穴実測図 (1/30)	125
第81図	4号～5号落とし穴実測図 (1/30)	126
第82図	6号～9号落とし穴実測図 (1/30)	127
第83図	10号～12号落とし穴実測図 (1/30)	129
第84図	13号～14号落とし穴実測図 (1/30)	131
第85図	15号～16号落とし穴実測図 (1/30)	132
第86図	17号落とし穴実測図 (1/30)	133
第87図	1号竪穴住居実測図 (1/60)	134
第88図	2号竪穴住居実測図 (1/60)	134

第89図	3号竪穴住居実測図 (1/60)	135
第90図	4号竪穴住居実測図 (1/60)	136
第91図	5号～6号竪穴住居実測図 (1/60)	137
第92図	7号竪穴住居実測図 (1/60)	138
第93図	8号竪穴住居実測図 (1/60)	139
第94図	D地区竪穴住居出土土器実測図 (1/4)	141

E地区の調査

第95図	1号～2号落とし穴実測図 (1/30)	144
第96図	3号～4号落とし穴実測図 (1/30)	145
第97図	5号～6号落とし穴実測図 (1/30)	146
第98図	7号～8号落とし穴実測図 (1/30)	148
第99図	9号～10号落とし穴実測図 (1/30)	149
第100図	1号～2号井戸実測図 (1/40)	151
第101図	1号竪穴住居実測図 (1/60)	152
第102図	2号竪穴住居実測図 (1/60)	152
第103図	3号竪穴住居実測図 (1/60)	153
第104図	4号竪穴住居実測図 (1/60)	154
第105図	5号竪穴住居実測図 (1/60)	154
第106図	E地区竪穴住居出土土器実測図 (1/4)	155
第107図	徳永川ノ上遺跡各地区出土土製品実測図 (1/2)	156
第108図	徳永川ノ上遺跡各地区出土石器実測図① (1/2)	157
第109図	徳永川ノ上遺跡各地区出土石器実測図② (1/2)	158
第110図	徳永川ノ上遺跡各地区出土石器実測図③ (1/2)	159
第111図	徳永川ノ上遺跡各地区出土石器実測図④ (1/2)	160
第112図	神手遺跡3号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	163
第113図	徳永川ノ上遺跡出土縄文土器実測図 (1/3)	164

I はじめに

1 調査の経過と調査の組織

一般国道10号線のバイパスとなる椎田道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査に至る経過については、『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集「辻垣ヲサマル遺跡」（1993年）を参照されたい。

徳永川ノ上遺跡群の発掘調査は、昭和63年6月から平成2年10月までの間で、建設工事の工期や用地買収に合わせて北九州国道工事事務所と協議し、適宜実施した。

徳永川ノ上遺跡は、用地買収が完全に終了しないままに、工事の工程上買収済の地区から発掘調査を開始しなければならなかった。したがって、椎田道路第4地点の中央部（B地点）の古墳群が集中する地区から発掘調査が始まった。

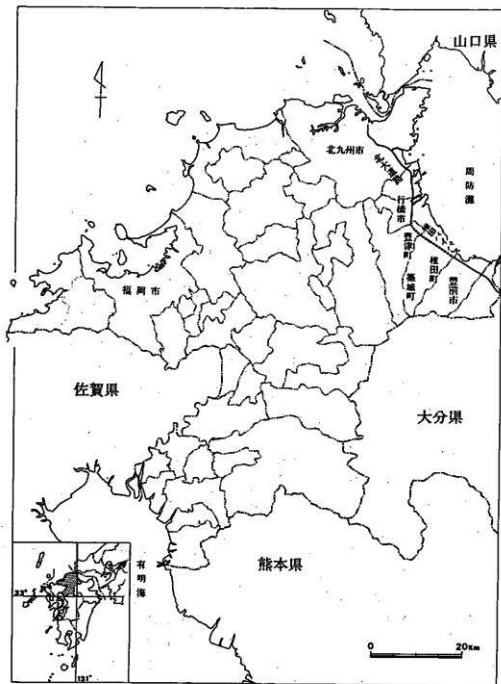
B地点は、昭和63年6月22日から発掘調査を開始し、最上層である古墳群と中世遺構の下に弥生終末の墳墓群、さらに下層に弥生期の集落遺構群、縄文期の土坑（落とし穴状）群が存在したために、平成2年度の調査終了近くまで断続的に調査を続行したことになる。古墳群は横穴式石室墳で、小型古墳群であり石室の破壊が著しかったが、中世に再利用された以外のものに副葬品の残存状態の良いものがあり、終末期古墳群の一形態を知ることができる。

11月1日から、古墳群周辺の弥生期の貯蔵穴、ピット、溝なども掘り始めるが、古墳群の実測なども続行する。

平成元年からは、C地区の古墳群の下層の弥生終末の墳墓群も掘り始め、古墳の墳丘の下に墳丘墓らしき墳丘と周溝の残存が確認されるようになる。4月になるとC地区の3群の土坑墓群から、鏡片・玉類・鉄器類が出土し始め、試掘で確認されていた石棺墓群を含む墳墓群の内容が予想以上の重要遺跡であることが認識できるようになってきた。なお、19号墓の龍虎（盤龍）鏡は、復原すると完形になるものであった。土坑墓から鏡が4面分も出土し、荒された石棺墓に鉄器のみが残っているのは、鏡が目立つために持ち去られたためであろうから、鏡の保有数がさらに多いことを暗示している。

5月になると、大型石蓋土坑墓の棺外副葬品として、弥生時代最大の鉄製釣針5本も出土し、大半の墳墓に鉄器を副葬し、赤色顔料の量もこれまでで最大量となってきた。

6月には、方形の周溝の1つから、多数の玉類と櫛に伴って鉄鋤先と完形仿製鏡1面が出土し、方形周溝が4世紀末から5世紀初頭の方墳であることも判明し、周溝内の祭祀形態の1つを発見することができた。



第1図 10号熊本道路路線図(1/400,000)

表1 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財一覧表

平成7年3月

箇所名	地点	遺跡名	遺跡の概要	(当初面積) 調査面積・㎡	調査完了 年月	
一般国道10号 椎田道路 (5工区)	1	辻垣	環濠集落 旧河遺	(33,400) 34,500	S62. S63	
	2	徳永A 居屋敷	竊横穴 跡墓	(980) 1,050	H1. 3	
	3	徳永B 鋤先	古土近 世墓	墳 地	5,700	H2. 10
	4	徳永C 川ノ上	墳丘墓 群 弥生・古墳	(11,250) 12,500	うち7,500㎡ H1. 4済 H2. 10完	
椎田遺跡(5工区)合計				(51,330) 53,750	100%完	
一般国道10号 椎田道路 (10工区)	5	山添	推定地	1,000	H1. 11	
	6	石丸A	推定地	(3,000) 0		
		石丸B	縄文集落	3,500	S63. 12	
	7	中村A	散布地	7,700	うち6,000㎡ S63. 12済 H1. 6完	
	8-A	中村B	推定地	(3,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ	
	8-B	中村B	推定地	(6,800) 150	完了	
	9-A	黒峰尾	古墳群	(14,780) 0	試掘結果 遺跡ナシ	
	9-B	黒峰尾	古墳群	(5,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ	
	10	選仏寺	推定地	(1,050) 0	試掘結果 遺跡ナシ	
	11	東舟入	推定地	(600) 0	試掘結果 遺跡ナシ	
	12	広山	推定地	(9,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ	
	椎田道路(10工区)合計				(55,430) 12,350	100%完

また、6月には、墳丘が現存するE地区の墳丘墓群の調査も始めるが、未買収地区も多いので排土作業などに手間取ることが多い。

7月にD地区の発掘調査を始め、最初に中世の溝遺構を掘り始めるが、弥生終末の住居跡・墓地、縄文の土壌群も検出される。

8月に第4地点南端のA地区の調査が始められるようになり、建設工事の工程的に急を用いるので、D・E地区を中断してA地区を先行することになった。

9月になるとA地区の発掘が峠を越したことからE地区を再開し、新たに買収済の地区の表土剥ぎも平行して実施する。21日にA地区が完了し、D地区も再開した。

10月には、D地区内にある高圧電線用鉄塔をC地区東側に移転するために、C地区拡張区として発掘調査をすることになった。遺構は、弥生終末の住居跡などで、墳墓群が確認できなかった。21・22日は現地説明会を実施したところ、両日で2,000人近い見学者があり、大盛会であった。

11月になるとC地区拡張区が終了して埋戻すと同時に、C地区全体も最終チェックにはいり、墳墓群の赤色顔料の取上げも行なう。12月には、C地区の石棺墓の石材抜取りと最終実測を行うと同時に、E地区の墳丘と墳墓群の蓋石の写真撮影や実測を行ない、蓋石の開棺を始めたところ、2号墳丘1号棺から鏡片・玉・鉄器が出土し始める。

平成2年1月には、4号墳丘墓でもまず荒された棺から鉄器類が出土し始め、23日になると4号棺から鏡の一部を確認し、後日に行花文の完形鏡であることがわかり、鏡・勾玉・素環頭刀子が共伴する盟主の棺であることが判明した。

3月29日にC地区を調査完了し、井戸や落とし穴など深くで危険な穴をユンボにより埋戻して平成元年度の事業を終了する。

平成2年4～5月は、E地区墳丘墓の残りとして、墳丘墓下の住居跡や、北側の中世遺構や地下式横穴の調査を続行し、北端の谷部の未買収地区を残して、5月11日に調査完了する。

第4地点北端部の未買収地区であった谷部の発掘調査は、平成2年10月1日から10月20日で完了する。

徳永川ノ上遺跡の整理報告は、平成5年度から始まり、平成6年度に3分冊のうちの第1冊目を刊行するものである。

調査の組織と関係者は、下記のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	昭和63年度	平成元年度	平成2年度
所 長	高橋 松 男	高橋 松 男	森 久
副所長(技術)	竹中 幸 生	久谷 秀 明	久谷 秀 明

建設専門官	古賀秀登	田中陸憲	田中陸憲
建設監督官	中川博勝	中川博勝	田中常美
	桃坂繁	桃坂繁	児玉孝夫
工務課長	衛藤恒利	衛藤恒利	溝上利毅
工務係長	諏訪憲二	諏訪憲二	
	久良木裕	久良木裕	松崎安則
	田中敏則	田中敏則	田中敏則
	池田稔浩	井上敏彦	井上敏彦

福岡県教育委員会

総括	昭和63年度	平成元年度	平成2年度
教育長	竹井宏	御手洗康	御手洗康
教育次長	大鶴英雄	湖上雄幸	濱地甫伯
指導第2部長	大平岩男	月森清三郎	月森清三郎
文化課長	業石勲	六本木聖久	六本木聖久
課長補佐	平聖峰	平聖峰	安野義勝
技術補佐	宮小路賀宏	宮小路賀宏	石松好雄
参事補佐	柳田康雄	柳田康雄	柳田康雄
			副島邦弘
庶務			
管理係長	池原脩二	池原脩二	池原脩二
事務主査	和田健作	和田健作	沢田俊夫
調査	(昭和63年～平成2年度)		
参事補佐兼調査班総括	柳田康雄	柳田康雄	
参事補佐・技術主査	副島邦弘	副島邦弘	
技師	緒方泉	緒方泉	飛野博文
	小川泰樹	小川泰樹	

なお、調査補助員として、天石夏実、大西智和、鷺見高昌、高橋二郎、辻川哲朗、土屋知子、広瀬時習、西村健司、笠由美子が調査に参加した。

報告書作成については、平成6年度の本書が参事兼文化財保護室長の柳田康雄と筑豊教育事務所生涯学習課文化班の主任技師緒方泉が担当し、図面の整理等で、関久江、土山真弓美、小国みどり、古賀八重子、近藤京子、坂本恵津子、高島妙子、寺町恭代、安永啓子、山崎緑が参加した。

2 位置と環境

徳永川ノ上遺跡は、福岡県京都郡豊津町大字徳永に所在する徳永遺跡群の一部で、小字名が南側から川ノ上・果願寺に所属する。徳永川ノ上遺跡は、工事の工程上などから地区分けして調査したが、南側のA・B地区が川ノ上、北側のC～E地区が果願寺に位置し、副葬品の豊富な弥生終末の墳墓群が果願寺に属することになるが、遺跡名としては総称して徳永川ノ上遺跡とした。推田道路の建設省工事分のこの第4地点は、日本道路公団工事分の第1地点に接続している。その第1地点が神手遺跡(註1)で、道路幅の発掘調査地区が小字の川ノ上の南端地区にあたる。

徳永川ノ上遺跡は、長峽川・今川・蔵川の3本の河川によって形成された京都平野の南東側で、蔵川右岸の標高24mから30.2mの河岸段丘上に立地している。対岸にあたる蔵川左岸は、標高差が8mもある水田地帯で、その水田地帯の中央にある微高地で豊前国府跡が確認されている。本報告が弥生時代以前の報告であることから、周辺遺跡の紹介も時代を限定したい。

京都平野の弥生遺跡は、前期の苅田町葛川遺跡(註2)、行橋市下稗田遺跡(註3)、前田山遺跡(註4)、長井遺跡(註5)、辻垣遺跡(註6)がよく知られている。これらの遺跡のうち、長井遺跡と辻垣遺跡が前期前半、他の遺跡が前期後半で、神手遺跡と一体の徳永川ノ上遺跡が前期後半から中期に位置づけられる。

弥生中期になると、徳永川ノ上遺跡だけでなく京都平野全体に遺跡が希薄になる。

徳永川ノ上遺跡が再度集落として復活するのは弥生終末で、京都平野全体に活気がもどって来る。しかし、これまで調査された前田山遺跡、下稗田遺跡などでは墓地が中心で、弥生終末の集落と墓地群との関連の研究はこれからであった。この点で徳永川ノ上遺跡は、弥生終末の集落の廃絶後、直ちに墳墓が構築されており、集落と墓地との関連の一面が知れる。

また、弥生終末から古墳出現期については、「徳永川ノ上遺跡Ⅱ」で取扱うことにする。

(柳田)

註1 福岡県教育委員会「神手遺跡」『推田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』6 1992

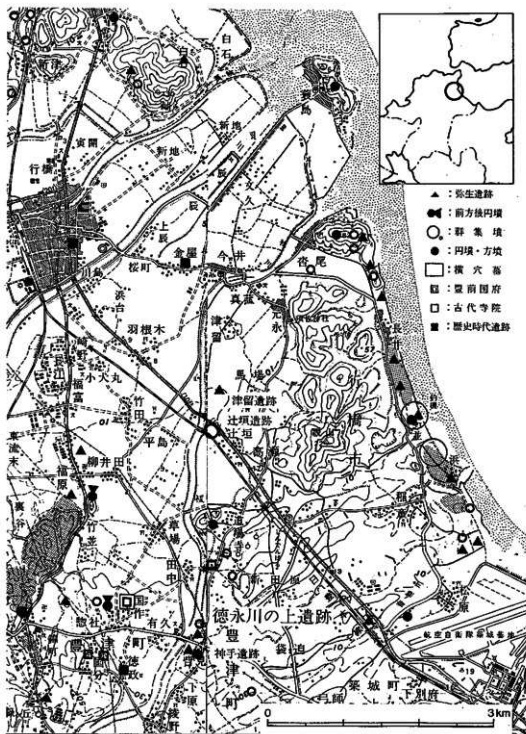
註2 「葛川遺跡」『苅田町文化財調査報告書』3 1984

註3 福岡県行橋市教育委員会「下稗田遺跡」『行橋市文化財調査報告書』17 1980

註4 「前田山遺跡」『行橋市文化財調査報告書』19 1987

註5 定村寅二・小田富士雄「福岡県長井遺跡の弥生土器」『九州考古学』25・26 1965

註6 福岡県教育委員会「辻垣ツサマル遺跡」『辻垣畠田・長通遺跡』『一般国道10号線推田道路関係埋蔵文化財調査報告』1・2 1993・1994



第2図 徳永川ノ上遺跡と周辺の遺跡分布図(1/50,000)



徳永川ノ上遺跡表土剥ぎとり作業



B地区発掘作業風景

II 遺構と遺物

1 A地区

A地区は第4地点の徳永川ノ上遺跡としては南端にあり、東西に通じる道路を隔てて南接する神手遺跡と一連の遺構群である。遺構としては、縄文期の落とし穴群、縄文-弥生期の井戸、弥生前・中期の貯蔵穴群、弥生の堅穴・ピット、弥生後期以後の溝などが検出された。地区全体が後世に50cm前後削平されていると思われる。

(1) 遺構

① 落とし穴

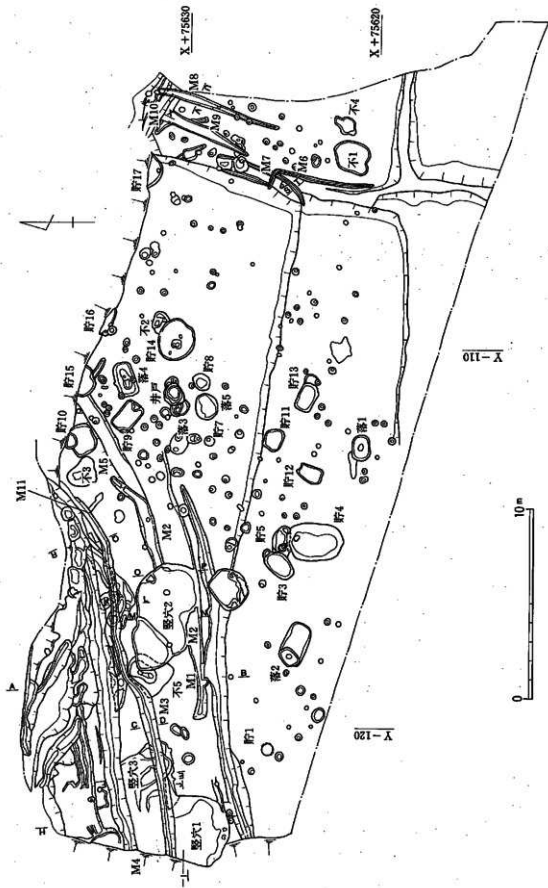
落とし穴は、調査区の中央付近で南西から北東方向に点在しているが、地形的には東側の丘陵平坦部から、北西部の傾斜面に移る傾斜変換面近くに意図して設置されているらしい。したがって、丘陵平坦面が1m前後削平されたとしても、傾斜面に近いほど削平度合が少なく、50cm前後であるものと考えられる。

1号落とし穴(図版2-2、第4図1) A地区南端の中央付近にあるもので、平面形が隅丸長方形を呈し、中心の楕円形ピット周辺に塊石が配されている。大きさは、長径1.32m、短径92cm、深さ35cm、ピット径33×26cm、ピット深さ46cmである。埋土は、暗褐色粘質土であるが、壁面近くや底面に地山の褐色系粘質土が混入し、ピット内に有機質と思われる灰黄褐色粘土が堆積していた。これは舟底状土壌と重複しているが、これより古い。ピット内の埋土と塊石から、ピットには、木棒が立っていたと思われる。

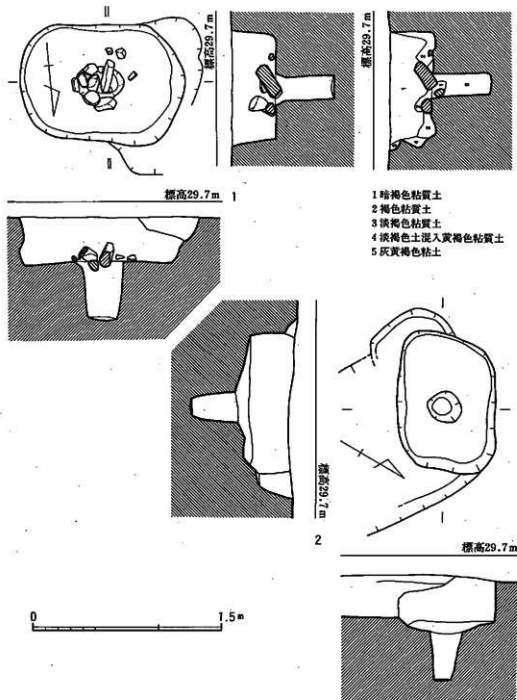
2号落とし穴(図版3-1、第4図2) 調査区南端の西側にあり、2号貯蔵穴と重複しているが、貯蔵穴より古い。形態は、平面形が隅丸長方形で、底面中心に円形ピットをもち、土壌壁面がわずかに袋状を呈する。大きさは、長径1.09m、短径78cm、深さ33cm、ピット径28cm、ピット深さ38cmである。

3号落とし穴(第5図3) 地区の北側の中央付近にあり、井戸と重複して、これより古い。形態は、平面形が楕円形と思われ、中央に楕円形ピットと塊石2個がある。大きさは、径1.02m、深さ59cm、ピット径25cm、ピット深さ37cmの大きさ。土壌壁面は、袋状を呈するところがある。

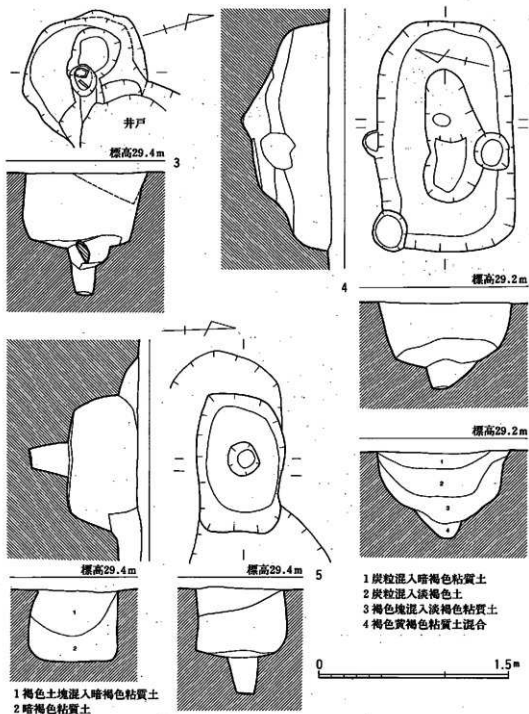
4号落とし穴(図版3-2、第5図4) 地区の北端中央部の弥生後期末のP19の下にあり、これより古い。平面形は隅丸長方形で、底面中央が舟底状を呈し、いわゆる落とし穴と形態を異



第3图 德永川/上道桥A地区总图配置图(1/200)



第4図 A地区落とし穴実測図①(1/30)



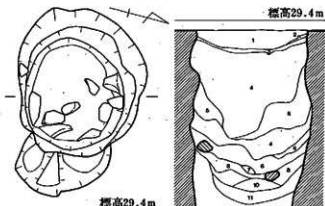
第5圖 A地区落とし穴実測図②(1/30)

にしているが一応落とし穴に含めて報告する。大きさは、長径1.82m、短径1.09m、深さ50cm、ピット径58×40cm、ピット深さ20cmの規模である。周辺のピット群より古い。

5号落とし穴 (図版4-1、第5回5) 調査区の中央付近にあり、7号貯蔵穴と重複し、これより古い。形態は、隅丸長方形を呈し、底面中央に円形ピットをもつ。大きさは、長径1.1m、短径70cm、深さ54cm、ピット径27cm、ピット深さ34cmである。壁面は袋状を呈し、埋土上層に褐色塊混入暗褐色粘質土、下層に暗褐色粘質土があった。

② 井戸 (図版4-2、第6回)

調査区北側の中央付近にあり、3号落とし穴の一部を破壊して掘られている。形態は、平面形がほぼ円形で、壁面の一部が崩壊しているが、原形に近いものと思われる。大きさは、現状で上面径1.15×0.93m、深さ1.8mの規模で、底面径が75×65cmとなっている。埋土は、最下層に灰色粘土混入褐色土、中・上層に炭化物混入の褐色系粘質土が堆積している。時期の判明する出土品がなく時代を判定できないが、落とし穴より新しいことは確実で、貯蔵穴より古い可能性が高い。底面近くの塊石は、地山のもの。

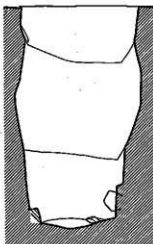


③ 貯蔵穴

落とし穴と同様に調査区中央付近に群をなし17基を検出したが、中にはいわゆる貯蔵穴として疑わしいものもあり、土壌としなければならないものも含めて報告している。

1号貯蔵穴 (図版5-1、第7回)

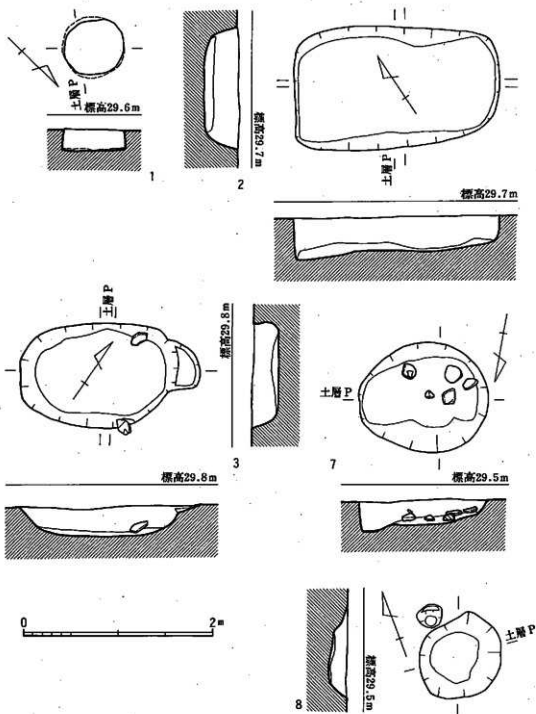
1) 調査区南西端で検出された、小型円形の典型的袋状堅穴。床面径65cmの正円形に近く、壁面が著しく直線的に内傾している。現状の深さは23cmと浅くなっているが、削平度も少ないと思われるので、本来から1m以



- 1 炭・焼土・褐色・黒褐色混合土
- 2 褐色土
- 3 茶褐色粘質土
- 4 炭混入褐色粘質土
- 5 褐色粘質土
- 6 炭混入淡褐色粘質土
- 7 淡褐色粘質土
- 8 淡褐色・褐色粘質土混合
- 9 炭混入・褐色粘質土混合
- 10 淡褐色混入褐色塊
- 11 淡褐色・褐色混合
- 12 灰色粘土混入褐色土



第6回 A地区井戸実測図(1/30)



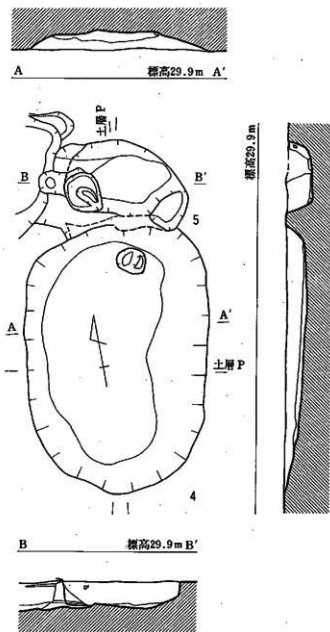
第7图 A地区貯蔵穴実測図①(1/40)

内の深さの小型堅穴と思われる。埋土の大半が褐色の地山ブロックが混入しているので、急激に埋没したか、人意的に埋められたものと思われる。

2号貯蔵穴（図版5-2、第7図2）調査区の南西側で、2号落とし穴を一部破壊して掘られた長方形堅穴であり、貯蔵穴とはできないかもしれない。規模は、長径2.15m、短径1.3m、深さ43cmの大きさであり、形態として墓塚に近く、埋土も一気に埋め戻さされている（第11図2）。

3号貯蔵穴（図版6-1、第7図3）3号貯蔵穴は、2号貯蔵穴の北東側にあり、5号貯蔵穴と重複してこれより新しい。3号は長楕円形で、床面が舟底状を呈し、これも貯蔵穴とはできないもので堅穴とすべきかもしれない。規模は、長径1.65m、短径1.1m、深さ38cmである。埋土は、レンズ状に堆積しているので人意的に埋められたものではないらしい。磨製石斧細片と土器が出土し、弥生前期末の時期である。

4号貯蔵穴（図版6-2、第8図4）4号貯蔵穴は、3号貯蔵穴の東側にあり、北側に



第8図 A地区貯蔵穴実測図②(1/40)

重複している5号貯蔵穴より新しい。遺構は、長楕円形で床面が舟底状の大型堅穴で、貯蔵穴ではないらしい。規模は、長径2.35m、短径1.95m、最大深さ22cmの大きさで、北側底面に径30×25cm、深さ5cmの小穴がある。埋土中から、褐色珪質岩のコア又はスクレイパー1個、打製石鏃、凹石、礫石と弥生前期末の土器片が出土した。

5号貯蔵穴(図版7-1、第8回5) 5号貯蔵穴は、3・4号に一部を破壊された不整形の堅穴で、貯蔵穴とはいえないもの。大きさも略で径1.5×1m、深さ30cmの規模で、底面も舟底状を呈している。埋土中からは、打製石鏃と弥生前期末の土器細片が出土しているの、3・4号と時期に大差がない。

6号貯蔵穴(図版7-2、第9回6) 6号は丘陵の傾斜変換線の位置にあり、1号溝によって北側上部を破壊されている。形態は、平面形が隅九方形に近いが、床面が一定でなく南側壁面近くに不規則な段がつく。規模は、長径2.2m、短径1.8m、深さ30cmの大きさである。埋土中から弥生前期末の土器片が出土している。

7号貯蔵穴(第7・11回7) 7号貯蔵穴は、調査区の中央付近にある楕円形堅穴で、床面が一定しないので貯蔵穴とはできない。規模は、長径1.35m、短径1.15m、深さ33cmの大きさで、埋土中に塊石と土器細片が混入していた。

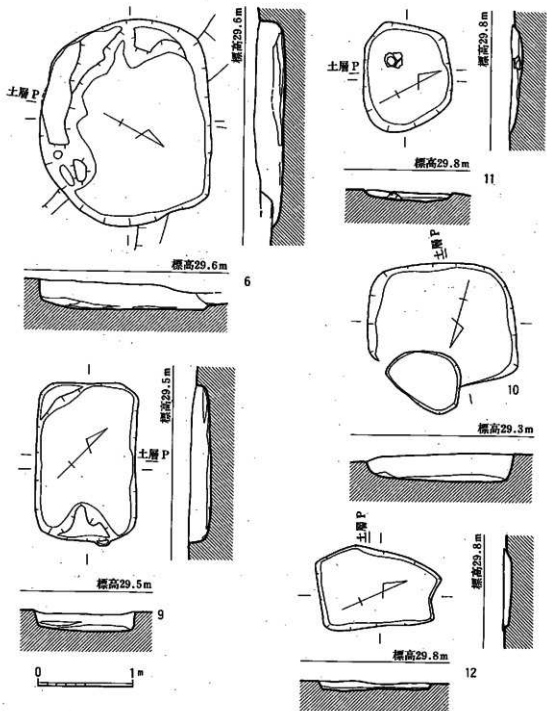
8号貯蔵穴(第9・11回8) 7号貯蔵穴の北東側にある小型略円形堅穴。床面も一定しないので貯蔵穴ではなく、規模は95×85cm、深さ17cmの大きさ。埋土中からは、打製石鏃片と弥生前期末土器細片が出土している。埋土中に炭化物が混入している。

9号貯蔵穴(図版8-1、第9・11回9) 9号貯蔵穴は、調査区北側の傾斜変換線近くにある長方形堅穴。規模は、長辺1.65m、短辺1.06m、深さ22cmの大きさで、短辺と角の一方に段を有するところから貯蔵穴ではないらしい。埋土は、地山の褐色塊が下層に混入しているので急激に埋没したものらしいが、時期の判明する出土品がないが、他の堅穴と同じく弥生前期末であろう。

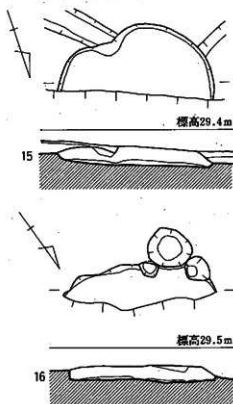
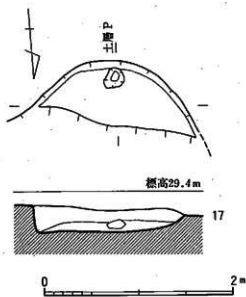
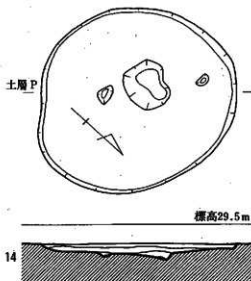
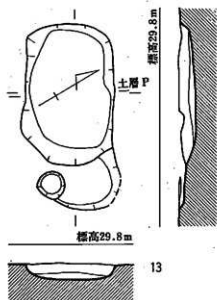
10号貯蔵穴(図版8-2、第9・11回10) 10号貯蔵穴は、調査区北端の傾斜面にあり、一部他の穴と重複しているが新旧関係が不明。形態は、隅九方形をしているところから貯蔵穴としてよいが浅いものである。規模は、径1.55×1.33m、深さ30cmの大きさである。埋土は順次堆積したらしいが、炭化物や地山の褐色ブロックもあることから、袋状壁面が崩壊して割合急に埋没したものと思われる。埋土中から、弥生前期末の土器片が出土している。

11号貯蔵穴(図版9-1、第9・11回11) 11号は調査区の中央付近にあり、平面形も不定形の小型であるところから貯蔵穴ではないらしい。規模は、長径1.15m、短径94cm、深さ12cmで、床面が舟底状を呈している。埋土中に炭化物と焼土が混入し、土器片も若干出土したが時期が特定できない。

12号貯蔵穴(図版9-2、第9・11回12) 12号も調査区の中央付近にある不定形堅穴で、貯蔵穴



第9図 貯蔵穴実測図③(1/40)



第10圖 貯藏穴実測圖④(1/40)

ではない。平面形は角張って、床面が平坦であるが浅い。規模は、長径1.8m、短径90cm、深さ10cm前後の大きさである。埋土中には、焼土と炭化物、さらに弥生前期末の土器細片があった。

13号貯蔵穴(第10・11図13) 13号も調査区の中央付近にあるが、平面形が隅丸長方形に近い堅穴で土壙といえるもの。規模は、長径1.47m、短径93cm、深さ17cmの大きさで、床面が割合平坦である。埋土は、南側から褐色系の粘質土で一気に埋没しており、時期の判明する出土品がない。

14号貯蔵穴(図版10-1、第10・11図14) 調査区の北側にある略円形の住居跡状の堅穴で床面の中央に小型土壙と対角線上に2個の小ピット一対をもつ。規模は、長径2.05m、短径1.9m、深さ10cmの大きさで、中央土壙が40×50cm、ピットが10~15cmになっている。埋土は、床面に褐色粘質土が平均的にあり、その上が灰褐色や黒褐色土が堆積している。埋土中に弥生前期後半の土器細片が混入していた。

15号貯蔵穴(図版10-2、第10図15) 15号は、調査区の北端にあり、北側半分を失っている。さらに、上部も5号溝と小溝で破壊され、平面形も不定なところから貯蔵穴とするには問題がある。規模は、径1.65m、深さ20cmの大きさ。出土品がなく、時期不明である。

16号貯蔵穴(第10図16) 16号も調査区の北端にあり、北側の大半を失っている。規模は、現状の最大径が1.6mで、深さが15cmの大きさの円形状を呈する。堅穴の壁面が一部袋状を呈することから貯蔵穴の可能性があり、埋土中から弥生前期末の土器が出土しているが、小ピットとの時期関係は不明。

17号貯蔵穴(第10・11図17) 17号は、調査区の北東端にあり北側の大半を失っている。規模は、現状の最大径1.8m、深さ30cmで、壁面が一部袋状を呈することから貯蔵穴の可能性が高いが、床面南端に径20cm、深さ5cmの小ピットがある。埋土中から弥生前期末の土器片が出土している。

④ 大型堅穴

大型堅穴とは、調査区の北西側傾斜面で、溝状遺構の下で検出された不整形で比較的大型の堅穴に対して便宜上命名して、他の不整形堅穴と区別した。时期的には、古墳時代以後に下降すると思われる溝状遺構より古いが、弥生時代でも新しい時期と思われる。

1号大型堅穴(図版11-1、第12図1) 1号は、調査区の西端にあり、西半分と北半の上部を3号溝に破壊されている。形態は、平面形で隅丸長方形を呈すると思われるが、壁面の傾斜や下端が一定しないところが不整形堅穴といえる。A地区で溝の次に検出された目立つ遺構であったところから大型の名を付けた。規模は不明なところが多いが、最小でも南北径4.3m、東西径3.6m、最大深さ55cmの大きさである。埋土は、最下層の地山が混入した黄褐色粘土から上

南 標高29.6m北 貯1



- 1 黒褐色土混入褐色土
- 2 褐色土混入褐色アロップ
- 3 褐色土アロップ混入黒褐色土

貯2 東

標高29.6m西



南 標高29.7m北 貯3



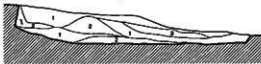
- 1 炭粒混入褐色土
- 2 炭・焼土粒混入黒褐色土
- 3 炭・焼土塊混入黒褐色土
- 4 炭・焼土粒混入褐色土

南 標高29.6m北 貯2



- 1 褐色粘質土
- 2 黒褐色土混入褐色土
- 3 褐色土混入黒褐色土
- 4 黒褐色土混入褐色粘質土
- 5 黒褐色・褐色土アロップ

南 標高29.6m北 貯6



- 1 炭混入黒褐色土
- 2 黒褐色土混入褐色土
- 3 褐色土混入黒褐色土

西 標高29.5m東 貯8



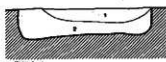
- 1 炭化粒混入黒褐色土
- 2 炭・焼土混入黒褐色土

北 標高29.4m南 貯7



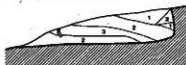
- 1 黒褐色土
- 2 炭粒・褐色土混入黒褐色土
- 3 褐色土塊混入黒褐色土

北 標高29.4m南 貯9



- 1 赤褐色土
- 2 褐色土塊混入黒褐色土

北 標高29.2m南 貯10



- 1 炭粒混入黒褐色土
- 2 黒褐色土混入褐色粘質土

北 標高29.7m南 貯11



- 1 褐色・黒褐色混合土
- 2 焼土粒混入黒褐色土
- 3 炭・焼土・黒褐色土混合

東 標高29.7m西 貯12



- 1 褐色・黒褐色混合土
- 2 焼土・炭・黒褐色混合土

北 標高29.7m南 貯13



- 1 赤褐色粘質土
- 2 赤褐色粘質土

西 標高29.4m東 貯14



- 1 灰褐色・黒褐色混合土
- 2 灰褐色土混入褐色土
- 3 褐色粘質土
- 4 焼土混入黒褐色土

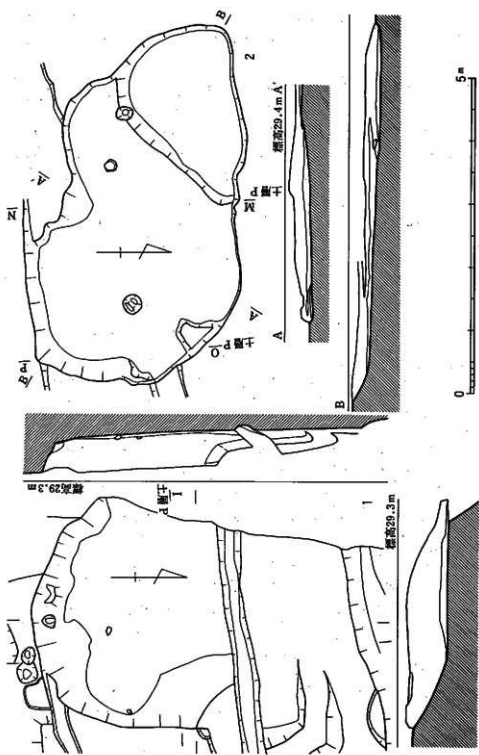
北 標高29.3m南 貯17



- 1 炭・焼土混入黒褐色土
- 2 黒褐色・褐色混合土

0 1.5m

第11図 貯蔵穴土層断面図(1/30)



第12圖 1号・2号大型壙穴実測図(1/60)

層にしたがい黒色系の強褐色粘質土が順次南側の斜面から堆積している。埋土中には、弥生前期末から後期末までの土器と磨製石斧片、石のみが混入しており、時期が弥生終末頃になるものと思われる。

2号大型堅穴(第12図2) 2号は調査区北西斜面の中央付近で、2・3・5号溝の下で検出された。形態から2基以上の不整形堅穴が重複している可能性があるが、新旧関係がつかめなかったことから1基の大型堅穴とした。規模は、最大長径6.05m、最大短径3.25m、深さ約35cmの大きさで、床面も一定するとはいえない。性格不明の堅穴で、時期も前期末らしき3号不整形土壇より新しく、弥生終末頃になると思われるが時期判明する出土品がない。

3号大型堅穴(図版11-2) 1・2号大型堅穴の中間にあって、3号溝より古い複数の堅穴の重複と思われるものを出土品の関係上3号大型堅穴としたが、平面形態が隅丸長方形らしく、床面が傾斜している(第13図EF土層図)。時期も、弥生中期から弥生終末の土器細片が出土しているだけであり、1・2号と同じと思われる。

⑤ 不整形堅穴

不整形堅穴とは、A地区全体に点在する小型不整形で時期不明のものに命名した。

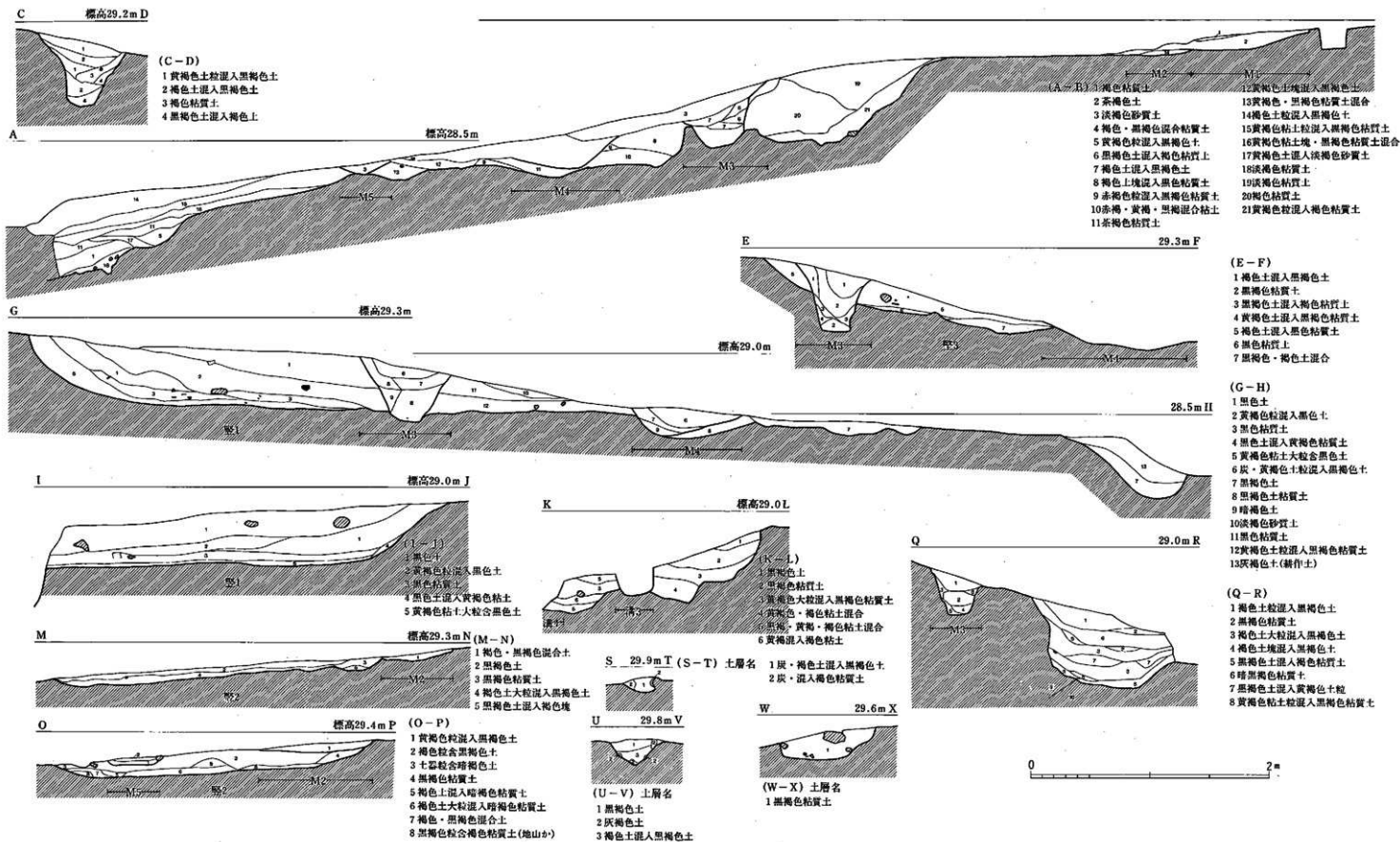
1号不整形堅穴(第14図1) 1号は調査区東側で、かろうじて床面が検出されたもので平面形が一定していない。規模は、最大径1.83m、深さ5cmの大きさで、出土品として磨製石剣細片が1点あるのみ。

2号不整形堅穴(第14図2) 調査区の北側で検出され、14号貯蔵穴と重複してそれより新しい。形態は、平面形が楕円形であるが、床面が一定しないところから複数のピットから形成されたものかもしれない。大きさは、長径1.23m、短径95cm、最大深さ15cmである。

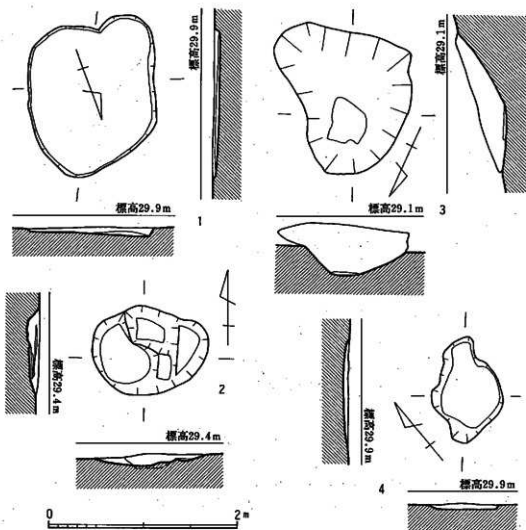
3号不整形堅穴(第14図3) 調査の北端中央付近の傾斜面にあり、床面が不明な摺鉢状堅穴。大きさは、長径1.5m、上面からの深さ52cmのもの。出土品に、弥生前期末らしき土器片がある。

4号不整形堅穴(第14図4) 4号も調査区の東端で床面のみが検出されたもの。したがって平面形が不定で、最大径1.1mの大きさのもの。埋土に炭化物と焼土が混入していた。

5号不整形堅穴(第15図) 調査区北西傾斜面にあり、3号溝と2号大型堅穴の下にあって古い。形態は、二重の摺鉢状を呈し、複数の遺構の可能性がある。規模は、長径2.15m、上辺からの深さ80cmの大きさで、重複関係から弥生時代に含まれる。



第13圖 大型壑穴・溝土層断面図(1/60)

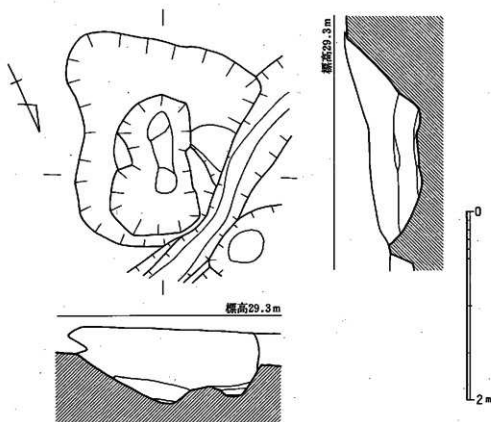


第14図 不整形土坑実測図①(1/40)

⑥ ビット群 (図版13-14)

A地区では、中央から東側の平坦面を中心にビット群が検出されたが、掘立柱建物などビット群が関連しての遺構が検出できなかった。ただ図版13のようにビットが半円形状に位置するものもあり、南隣する神手遺跡のように円形住居跡が存在した可能性もあるが、その中のP19からは弥生終末の土器が出土しており、時期的には円形竪穴住居跡が存在しない。

ビットの時期は、時期が判明する土器の出土したもので、弥生前期末がP1・6・16・17・21・30・35・43・46・50、弥生中期がP51・59、弥生終末がP15・19・20である。



第15図 不整形土墳実測図②(1/40)

⑦ 溝状遺構 (図版12)

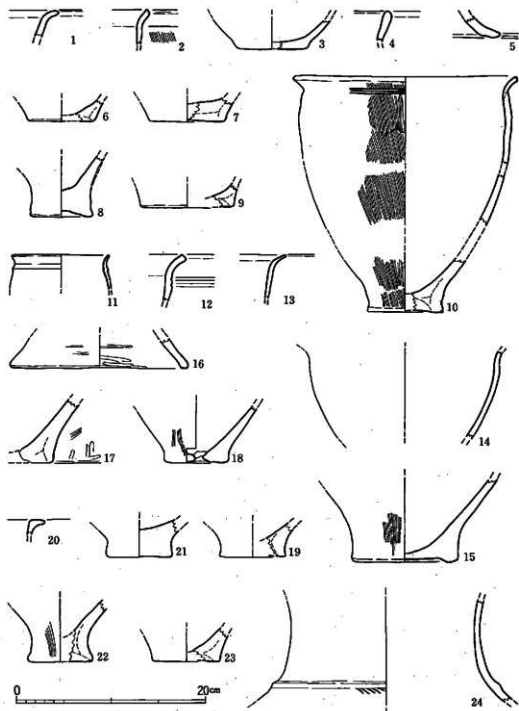
溝状遺構は、調査区の北西傾斜面と東端地域に集中しており、時期も古墳時代以後のものである。時期の判明する溝は少ないが、埋土や重複関係から中世の間壁に伴うものが多いと思われる。

(2) 遺物

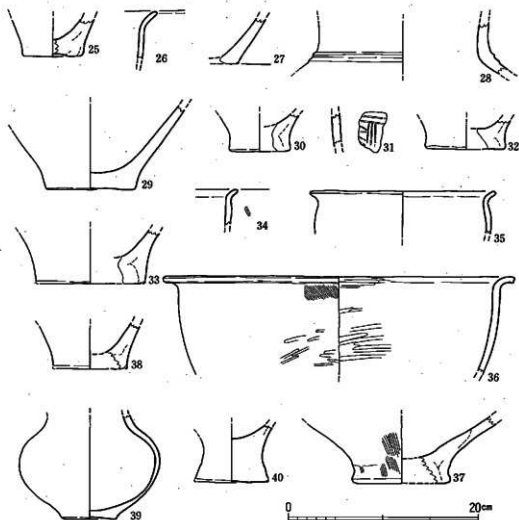
① 土器 (図版15、第16～20図)

第16図1は、唯一4号落とし穴から出土した土器細片であるが、遺構検出面の最上層であることから混入品であるかもしれない。土器は弥生前期末の甕口縁部と思われる。全面摩滅して、胎土に角閃石・石英粒などを含んでいる。

2・3は2号貯蔵穴から出土した。2が甕口縁部、3が壺底部である。時期は、弥生前期末に含まれる。



第16図 落とし穴・貯蔵穴出土土器実測図(1/4)



第17図 貯蔵穴・不整形土塊等出土土器実測図(1/4)

4～10は、3号貯蔵穴から出土した弥生前期末の土器片。4・5は器形が不明な細片であるが4の外面に煤が付着し、5が高杯脚部裾の可能性がある。6～9は底部で、6・7が壺、8・9が甕であろう。10は、口縁下外面に3条のヘラ描沈線をめぐらす甕で、復原高さ24.7cm、口径23.5cm、底径8cmの大きさ。器面調整は、外面がハケ目、内面ナアで、外面胴部に煤が付着し、底部が熱を受けて赤変している。胎土には、角閃石・赤褐色粒・石英等細砂を多く含み、色調が黄茶褐色を呈している。

11～19は4号貯蔵穴出土の弥生前期末の土器と思われるが、16が高杯脚部とする弥生後期後半となる。11～14は、甕口縁部で、口縁下に11が底い突帯1条、12が2条の沈線、13・14が無紋である。15・17～19が底部で、17の外面にヘラミガキ、15・18がハケ目調整が残っている。

16の内外面にヘラミガキがある。18の底部には焼成後の穿孔がある。

20～22は、弥生前期末～中期初頭の20が壺口縁部、21が壺底部、22が壺底部分である。全体に器面が摩滅しているが、22の外面のみハケ目調整が残っている。

23・24は、6号貯蔵穴出土の弥生前期末の土器片。23が壺底部で、24が壺頸部。24の頸部下端に底い三角突帯が1条めぐり、さらにその下にヘラ描線杉紋と思われる一部が残っている。胎土には、雲母・赤褐色粒・角閃石などの細砂を多く含み、褐色から黄褐色系の色調を呈している。

第17図25は、7号貯蔵穴出土の壺底部で、割合厚味のある底部であることから前期末から中期に含まれる。

26は、8号貯蔵穴出土の壺口縁部細片で、弥生前期末のもの。

27・28は、10号貯蔵穴出土の弥生前期末から中期初頭の壺の27が底部と28が頸部で、28の頸部下端に2条一対の突帯をめぐらしている。

29は、11号貯蔵穴出土の壺の底部片であるが、外面が2次的に加熱され、赤変している。

30は、12号貯蔵穴出土の底部。外面が2次的に加熱されているところから壺と思われる。

31～33は、14号貯蔵穴出土で、31が壺の肩部で外面にヘラ描紋、32・33が底部である。

34・35は、16号貯蔵穴出土の壺口縁部で、前期末のもの。

36は、17号貯蔵穴出土の中型壺口縁部で、口径37.7cmの大きさ。器面調整は、ハケ目の後にヨコのヘラミガキが施されているが、外面口縁下の一部にハケ目が残っている。胎土には、雲母・赤褐色粒・角閃石等の細砂をかなり含み、黄褐色を呈するが、内外面の一部に煤も付着している。

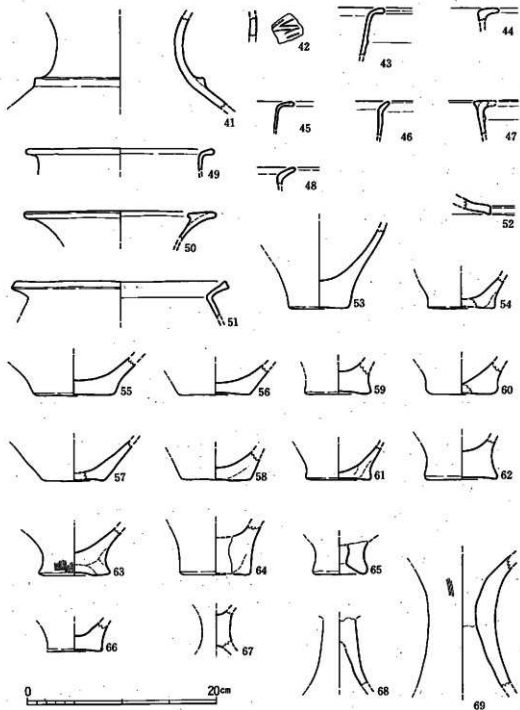
37は、2号不整形土壇出土の弥生前期壺の底部で外面にハケ目調整が残っている。

38は、3号不整形土壇出土の壺の底部で、前期末から中期のものと思われる。

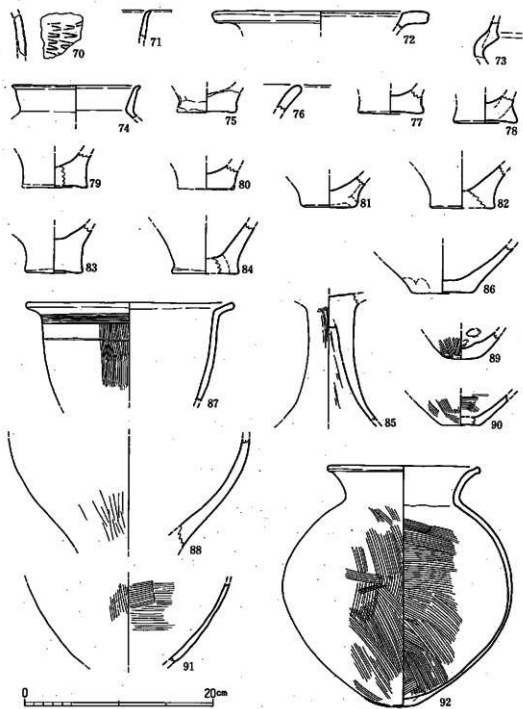
39・40は、表土剥ぎ時の表土直下から出土した遺構に属さない土器である。39は弥生前期中頃から後半の壺で、調査区東側の2・4号不整形土壇付近から出土した。器面が全体に摩滅しているので調整は不明。40は、前期末の壺底部である。

第18図41～69は、1号大型堅穴から出土した土器片群。堅穴の上層から41・44・52・53が、中層から42・46・47・56～60・68が、他が下層からだ。下層からは明らかに弥生後期に属する67・69のような器台や68のような弥生終末の高杯脚部が出土しているので、それ以前の土器や石器が混入品であることがわかる。時期的に区分すると41～46・48・53・59・60～66が前期末から中期初頭、47・49・50が中期前半、51・52などが中期後半、67～69が後期後半から終末ということになる。

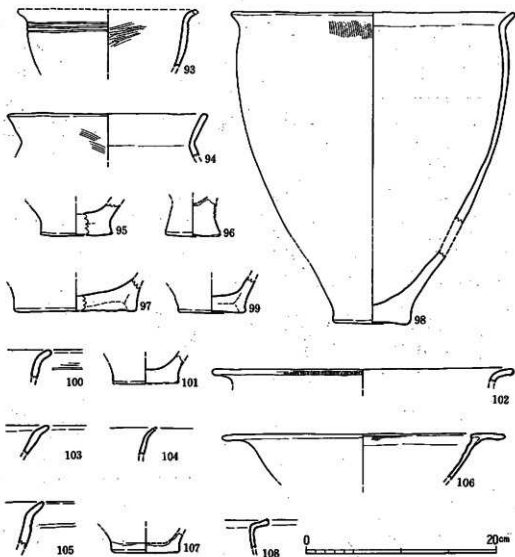
第19図70～74は、3号大型堅穴出土の土器細片で、70は弥生前期のヘラ描線杉紋、71が壺口縁部である。72は弥生中期壺口縁で、73・74が弥生終末である。73は、複合口縁壺で、74が短頸



第18图 1号竖穴出土土器实测图(1/4)



第19図 竪穴・溝・ピット出土土器実測図(1/4)



第20図 ビット出土土器実測図(1/4)

といえる。

75-82は、清から出土した弥生土器であるが、皆中期前半以前の厚手の底部であるところから遺構の時期に関連なく混入品である。

第19図83から第20図108は、その他のビット出土の土器で、83がP 1、84がP 6、85がP 15、86がP 16、87・88がP 17、89-92がP 19、93-97がP 20、98・99がP 21、100がP 30、101がP 35、102・103がP 43、104がP 46、105がP 50、106・107がP 51、108がP 59出土である。これら出土の土器から、P 1・P 17・P 21・P 30・P 43・P 46・P 50が前期末、P 51が中期末、P

15・P19・P20が弥生終末に属することになる。

87は、外面口縁下に5条一組のヘラ描沈線とさらにその下に1条の沈線をハケ目調整の後に施した前期末の甕で、胎土に角閃石、赤褐色粒、石英などの細砂を多く含み、暗褐色の色調を呈している。外面上方に煤が付着し、下端が2次加熱のために赤変している。

92は、外反する口縁と突起が底に近い胴部の弥生終末の甕で、胴部内外面にハケ目調整が著しい。大きさは、口径16.2cm、器高25.3cm、胴最大径24.3cmである。胎土には、雲母・赤褐色粒・角閃石などの細砂を多く含み、全体に茶褐色を呈している。

98は、全体に器面の摩滅が著しく、外面口縁下にハケ目が一部に残っているだけである。外面上方に煤が付着し、下半が赤変している。大きさは、口径30cm、器高約33cm、底径8.3cm。胎土には、角閃石・赤褐色粒などの砂礫を多く含み、全体に暗黄褐色を呈する。

106は、口径30cmの丹塗高杯であるが、全体に器面の摩滅が著しく、丹塗りが落ちている。鋤先口縁の幅が広く、器内が薄いところが中期末の特徴といえる。胎土には、雲母・角閃石・石英など細砂を多く含み、黄茶褐色を呈する。

② 石製品 (図版16、第21回、表2)

A地区の石製品は、おもに貯蔵穴とした堅穴から出土し、他の遺構からの出土品は時期が違ふところから混入品と考えられる。

第21回1は、弥生前期末の3号貯蔵穴から出土した蛇紋岩製石斧の刃部細片で、刃部が片刃状を呈する。大きさなどは不明であるが、縄文期のものの混入品とも思われるが、この遺跡では前期末の遺構に伴うことが多い。

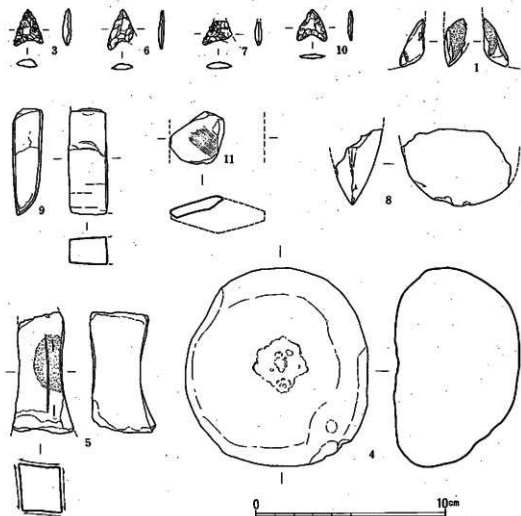
3・6・7・10は打製石礫で、3が4号貯蔵穴、6が5号貯蔵穴、7が8号貯蔵穴出土品で、10が3号大型堅穴の混入品である。3・7が姫島産黒耀石製、6・10がサヌカイト製となっている。3は全長1.9cm、最大幅1.55cm、重さ0.85g、6が全長2.15cm、10が全長1.65cm、最大幅1.6cm、重さ0.45gである。

8は、弥生終末の1号大型堅穴上層に混入していた灰緑色蛇紋岩製石斧の刃部である。刃部幅は約6cm前後に復原できる。

9は、やはり弥生終末の1号大型堅穴に混入していた柱状片刃石斧で、現状で長さ5.6cm、幅2cm、最大厚さ1.5cmであるが、長さ幅がさらに大きいものであろう。石材は、縦に縞目のある淡褐色粘板岩と思われる。

11は、弥生前期末と思われる1号不整形堅穴出土の石剣基部細片である。細片を復原すると幅約5cm、厚さ約2cmの石剣基部になり、側面に面取りがあり刃部を形成しない。石材は、灰色頁岩か粘板岩である。表面に斜方向の極細目の研摩痕がある。

4・5は、弥生前期末の4号貯蔵穴出土の凹石と砥石である。4は、最大径10.4cm、最大厚



第21図 A地区出土石器実測図(1/2)

さ6.7cm、重さ927gで、灰色火山礫製である。5は、淡褐色砂質岩製の4面使用の柱状礫石で、一面に細溝と表面がわずかにくぼむ荒れた部分があり、細溝などから鉄器用礫石であることが明らかなものであろう。重さは、83.85gである。

(柳田)

2 B地区の調査記録

B地区は、A地区の北側に位置している。検出した遺構は、縄文期の落とし穴群、縄文から弥生期の井戸、弥生前中期から中期の貯蔵穴群、竪穴住居、土塚墓、土塚、溝、ピット、さらに弥生後期の竪穴住居、溝、ピット等がある。地区全体はA地区と同様に削平が著しかった。

(1) 遺構

① 落とし穴

落とし穴は、B地区北側、3号、4号竪穴住居周辺に集中する。A地区の落とし穴とは間隔をおいている。また、配列の規則性などは看取することはできない。また、5号落とし穴は欠番とする。

1号落とし穴(図版19-1、第22回、付図2) 1号落とし穴は、B地区中央、2号竪穴住居西側に位置する。長軸東側は溝により、またその他の周縁は土塚により切られる。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央に略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.94m、短軸0.56m、深さ0.66m、床面では長軸0.77m、短軸0.44m、中央ピットは径0.26m、深さ0.09mを測る。

2号落とし穴(第22回、付図2) 2号落とし穴は、B地区北側、3号竪穴住居北側に位置する。24号貯蔵穴の下層から検出した。また西側の土塚墓状遺構にも切られる。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央には楕円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸0.85m、短軸0.58m、深さ0.48m、床面では長軸0.75m、短軸0.43m、中央ピットは長軸0.32m、短軸0.25m、深さ0.26mを測る。

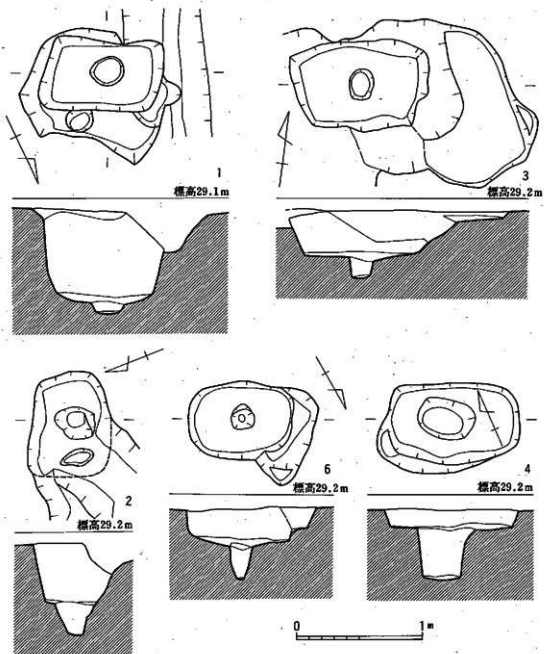
3号落とし穴(第22回、付図2) 3号落とし穴は、B地区北側、24号貯蔵穴と4号竪穴住居の間に位置する。長軸東側で他の遺構と切り合う。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央には楕円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.07m、短軸0.67m、深さ0.36m、床面では長軸0.9m、短軸0.58m、中央ピットは長軸0.24m、短軸0.19m、深さ0.16mを測る。

4号落とし穴(図版19-2、第22回、付図2) 4号落とし穴は、B地区北側、24号貯蔵穴と4号竪穴住居の間に位置する。長軸西側で他の遺構と切り合う。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央には略円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸0.83m、短軸0.62m、深さ0.28m、床面では長軸0.75m、短軸0.51m、中央ピットは長軸0.19m、短軸0.16m、深さ0.24mを測る。

5号落とし穴 欠番



第22図 1号~4号・6号落とし穴実測図(1/30)

6号落とし穴 (図版20-1、第22回、付図2) 6号落とし穴は、B地区北側、4号墜穴住居北側に位置する。長軸西側で他の遺構と切り合う。

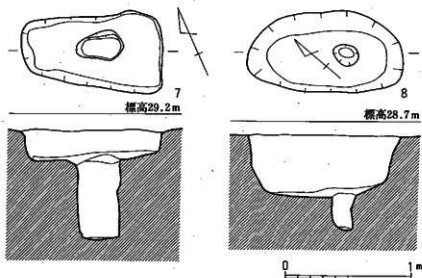
この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央に楕円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸1.02m、短軸0.64m、深さ0.16m、床面では長軸0.95m、短軸0.55m、中央ピットは長軸0.45m、短軸0.33m、深さ0.41mを測る。

7号落とし穴 (図版20-2、第23回、付図2) 7号落とし穴は、B地区北側、6号落とし穴北側に位置する。

この遺構の床面は隅丸台形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央には楕円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸1.12m、短軸0.55m、深さ0.25m、床面では長軸1m、短軸0.45m、中央ピットは長軸0.37m、短軸0.21m、深さ0.62mを測る。

8号落とし穴 (図版21-1、第23回、付図2) 8号落とし穴は、B地区北側、24号貯蔵穴北側に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央から長軸に沿って南側に略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.23m、短軸0.63m、深さ0.49m、床面では長軸0.94m、短軸0.44m、中央ピットは長軸0.19m、短軸0.17m、深さ0.62mを測る。



第23回 7号・8号落とし穴実測図(1/30)

② 貯蔵穴

貯蔵穴は、B地区中央に集中し、東西に伸びるように所在する。これらは、A地区の貯蔵穴群とは間隔をおいている。15号・16号貯蔵穴は欠番とする。

1号貯蔵穴（図版21-2、第24回、付図2） 1号貯蔵穴は、B地区中央、1号整穴住居西側に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、床面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸2.22m、短軸1.79m、深さ0.57m、床面では長軸1.95m、短軸1.52mを測る。

2号貯蔵穴（図版22-1、第24回、付図2） 2号貯蔵穴は、B地区中央から東側、3号貯蔵穴と重複する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾し、部分的に内傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.72m、短軸1.47m、深さ0.45m、床面では長軸1.37m、短軸1.3mを測る。

3号貯蔵穴（図版22-2、第24回、付図2） 3号貯蔵穴は、B地区中央から東側、2号貯蔵穴と重複する。また他のピットが多数切り合っている。

この遺構の床面は不整楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.94m、短軸1.55+m、深さ0.44m、床面では長軸1.9m、短軸1.52+mを測る。

4号貯蔵穴（図版23-1、第24回、付図2） 4号貯蔵穴は、B地区中央から東側、2号、3号貯蔵穴北側に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや内傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.67m、短軸1.28m、深さ0.19m、床面では長軸1.66m、短軸1.26mを測る。

5号貯蔵穴（第29回、付図2） 5号貯蔵穴は、B地区中央から東側、4号貯蔵穴の北側に位置する。長軸西側では他の遺構と重複する。

この遺構の床面は不整楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.4m、短軸1m、深さ1.15m、床面では長軸0.9+m、短軸0.85mを測る。

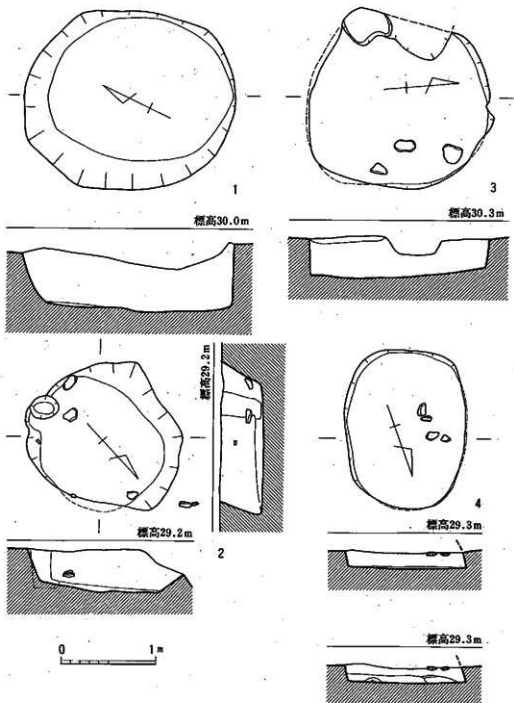
6号貯蔵穴（図版23-2、第25回、付図2） 6号貯蔵穴は、B地区中央から東側、5号貯蔵穴北側に位置する。他のピットが切り合っている。

この遺構の床面は不整形を呈し、床面からやや内傾しながら立ち上がる場所がある。大きさは上面で長軸2.3m、短軸1.68m、深さ0.27m、床面では長軸2.2m、短軸1.57mを測る。

7号貯蔵穴（図版24-1、第25回、付図2） 7号貯蔵穴は、B地区中央に位置し、1号円形住居東側で重複している。

この遺構の床面は不整楕円形を呈し、床面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.65m、短軸1.5m、深さ0.31m、床面では長軸1.15mを測る。

8号貯蔵穴（図版24-2、第25回、付図2） 8号貯蔵穴は、B地区中央、7号貯蔵穴北側に位置



第24圖 1号~4号貯藏穴実測図(1/40)

し、1号円形住居と東側で重複している。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸2m、短軸1.06m、深さ0.37m、床面では長軸1.8m、短軸0.89mを測る。

9・10号貯蔵穴(図版25-1、第25回、付図2) 9・10号貯蔵穴は、B地区中央、7号貯蔵穴南側に位置する。検出時は2基の貯蔵穴と見ていたが、掘削後は1基の貯蔵穴となった。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸2.35m、短軸1.82m、深さ0.53m、床面では長軸1.87m、短軸1.26mを測る。

11号貯蔵穴(図版26、第26回、付図2) 11号貯蔵穴は、B地区中央、1号竪穴住居南側に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸2.8m、短軸2.5m、深さ1.34m、床面では長軸2.02m、短軸1.9mを測る。

12号貯蔵穴(図版25-2、第26回、付図2) 12号貯蔵穴は、B地区中央、1号竪穴住居と西側で重複する。

この遺構の床面は略円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で径1.4m、深さ0.68m、床面では径1.05mを測る。

13号貯蔵穴(第26回、付図2) 13号貯蔵穴は、B地区中央2号竪穴住居西側に位置する。周辺をトレンチや2号溝で切られる。

この遺構の床面は不整楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸2.4m、短軸1.65m、深さ0.32m、床面では長軸2.35m、短軸1.55mを測る。

14号貯蔵穴(第26回、付図2) 14号貯蔵穴は、B地区南西角側に位置する。

この遺構の床面は不整円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸2.15m、短軸2.05m、深さ0.47m、床面では長軸1.85m、短軸1.67mを測る。

15号貯蔵穴 欠番

16号貯蔵穴 欠番

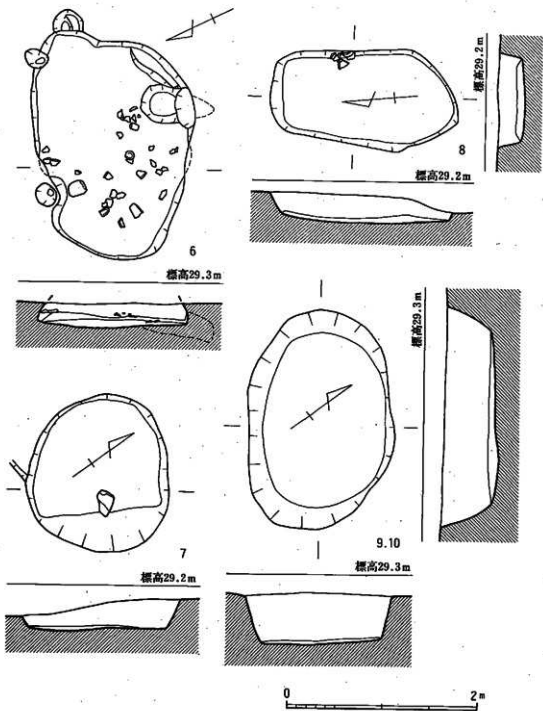
17号貯蔵穴(第27回、付図2) 17号貯蔵穴は、B地区南西側、14号貯蔵穴北側に位置する。東西側では溝とピットに切られる。

この遺構の床面は不整円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.1m、短軸1.05m、深さ1.27m、床面では長軸0.65m、短軸0.63mを測る。

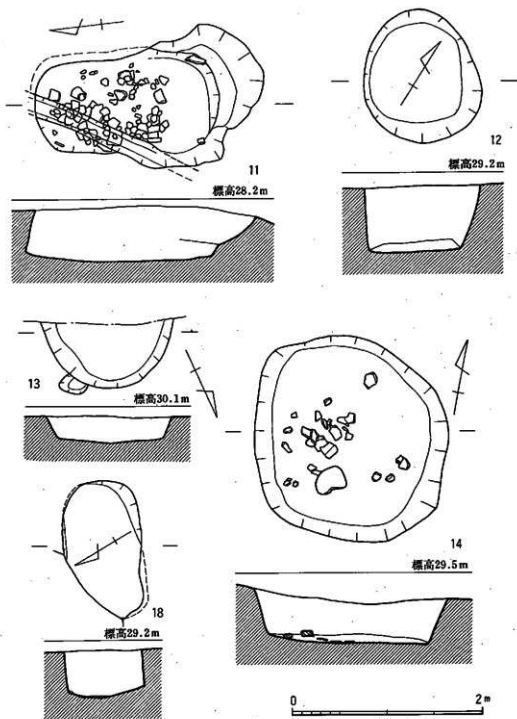
18号貯蔵穴(図版27-1、第26回、付図2) 18号貯蔵穴は、B地区中央から東側に位置し、北西側で19号貯蔵穴と重複する。

この遺構の床面は不整楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.45m、短軸0.85m、深さ0.58m、床面では長軸1.3m、短軸0.86mを測る。

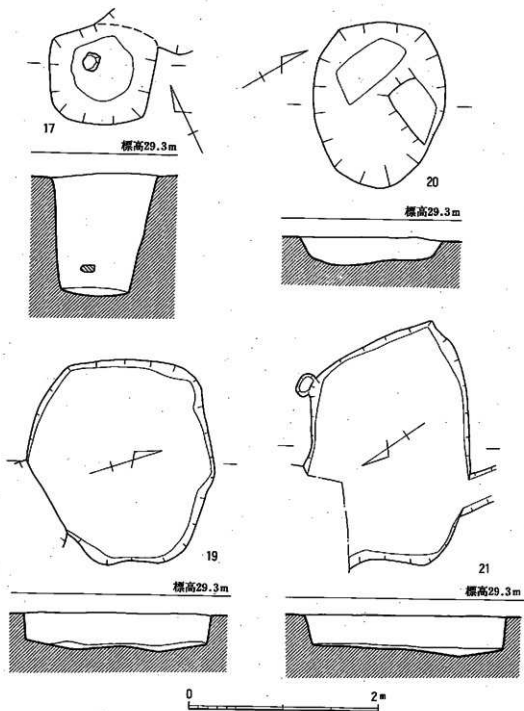
19号貯蔵穴(図版27-1、第27回、付図2) 19号貯蔵穴は、B地区中央から東側に位置し、南側



第25图 6号~10号貯蔵穴実測図(1/40)



第26图 11号~14号·18号貯藏穴実測図(1/40)



第27圖 17号・19号～21号貯藏穴実測図(1/40)

で18号貯蔵穴と重複する。

この遺構の床面は不整形楕円形を呈し、床面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長径2.12m、短軸1.97m、深さ0.18~24m、床面では長軸2m、短軸1.92mを測る。

20号貯蔵穴(図版27-2、第27図、付図2) 20号貯蔵穴は、B地区中央から東側、19号貯蔵穴北側に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.73m、短軸1.38m、深さ0.27m、床面では長軸1.4m、短軸1.25mを測る。

21号貯蔵穴(図版28-1、第27図、付図2) 21号貯蔵穴は、B地区中央から、2号竪穴住居西側に位置する。遺構の半分は地区外に伸びる。

この遺構は、床面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で残存長軸1.4+m、短軸0.68m、深さ0.38m、床面では残存長軸1.15m、短軸0.58mを測る。

22号貯蔵穴(図版28-2、第28図、付図2) 22号貯蔵穴は、B地区中央から東側、4号竪穴住居南側に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。底面は中央付近で段をもつ。大きさは上面で長軸1.38m、短軸1.18m、深さ0.4~45m、床面では長軸1.42m、短軸1.11mを測る。

23号貯蔵穴(第28図、付図2) 23号貯蔵穴は、B地区中央から西側、1号貯蔵穴西側に位置する。長軸西側は大きく削平される。

この遺構の床面は不整形楕円形を呈し、床面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸2.35m、短軸1.9m、深さ0.7m、床面では長軸1.58m、短軸0.88mを測る。

24号貯蔵穴(図版29-1、第28図、付図2) 24号貯蔵穴は、B地区北側、3号竪穴住居と落とし穴群の間に位置する。周辺部をピットで切られている。

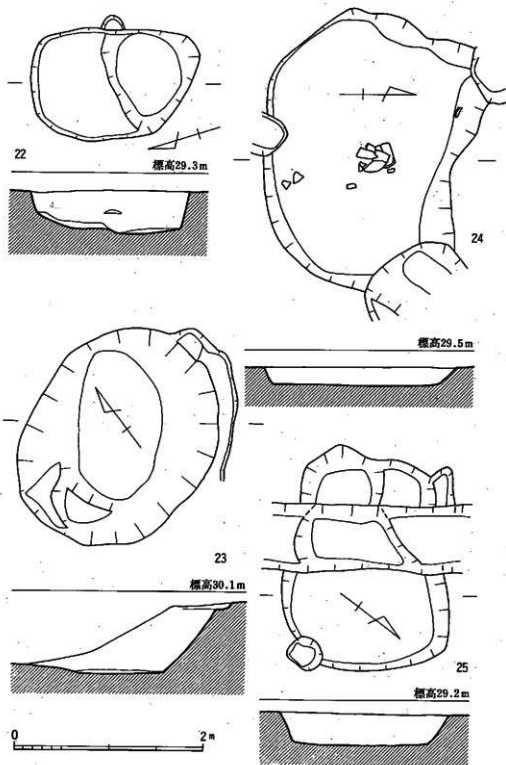
この遺構の床面は楕円形を呈し、床面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸2.96m、短軸1.96+m、深さ0.2m、床面では長軸2.68m、短軸1.75+mを測る。

25号貯蔵穴(図版29-2、第28図、付図2) 25号貯蔵穴は、B地区中央から東側に位置し、南西側に2号竪穴住居がある。また、遺構中央部に溝が走る。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。底面は中央付近で段をもつ。大きさは上面で長軸2.32m、短軸1.7m、深さ0.33m、床面では長軸2.05m、短軸1.4mを測る。

26号貯蔵穴(第29図、付図2) 26号貯蔵穴は、B地区中央から東側、調査区境界付近に位置し、南側に21号貯蔵穴がある。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。底面は中央付近から北側にピットがある。大きさは上面で長軸1.32m、短軸0.85m、深さ0.17m、床面では長軸



第28图 22号~25号貯藏穴实测图(1/40)

1.1m、短軸0.77mを測る。

27号貯蔵穴(図版30-1、第29図、付図2) 27号貯蔵穴は、B地区中央、1号貯蔵穴北側に位置する。長軸東側で他の遺構と重複する。

この遺構の床面は不整形楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.62m、短軸0.71m、深さ1.38m、床面では長軸1.04m、短軸0.47mを測る。

28号貯蔵穴(図版30-2、第29図、付図2) 28号貯蔵穴は、B地区中央、1号貯蔵穴住居と重複している。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。底面は中央付近で段をもつ。大きさは上面で長軸1.8m、短軸1.43m、深さ0.18-24m、床面では長軸1.36m、短軸1.22mを測る。

③ 土墳墓

調査区全体では中世の土墳墓を10基程度検出しているが、弥生時代前期の土墳墓は1基のみである。

1号土墳墓(図版31、第30図、付図2) 1号土墳墓は、B地区北東側、葎川へ落ちる段落ち近くに位置する。

この遺構は平面プランが不整形楕円形を呈し、その大きさは長軸2.2m、短軸1.41m、深さ0.35m、底面は長軸2.06m、短軸1.34mを測る。底面からやや外傾しながら立ち上がる。遺構内上層には、長さ60cmと35cmの2個の河原石がある。

また、主軸南側、壁体に寄った底面直上から磨製石戈切先、磨製石鏃、打製石鏃片各1点が出土した。

④ 土 墳

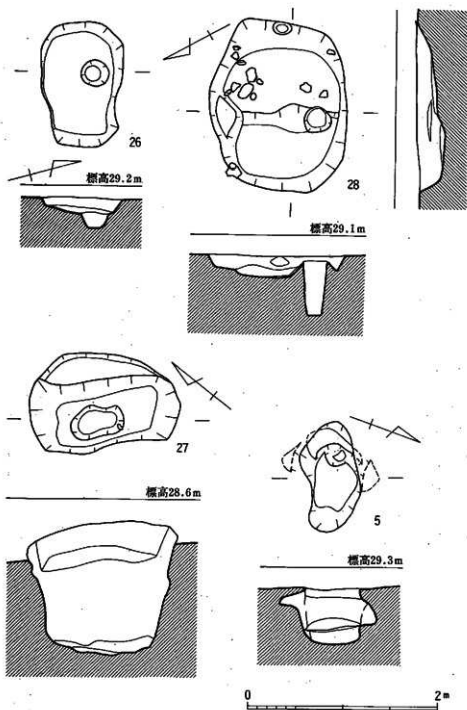
調査区内では、土墳状の遺構が多数あったが、ここでは弥生土器など出土したものを取り上げることにした。

1号土墳(第31図、付図2) 1号土墳は、B地区南側に位置する。7号溝と重複する。

この遺構は、平面プランが楕円形で、その大きさは長軸1.4m、短軸0.64m、深さ0.16mを測る。

5号土墳(第31図、付図2) 5号土墳は、B地区北側に位置する。周辺を他のピットに多数切られる。

この遺構は、平面プランが不整形で、その大きさは長軸4m、短軸2.05m、深さ0.1mを測る。



第29图 5号・26号~28号貯蔵穴実測図(1/40)

⑤ 竪穴住居

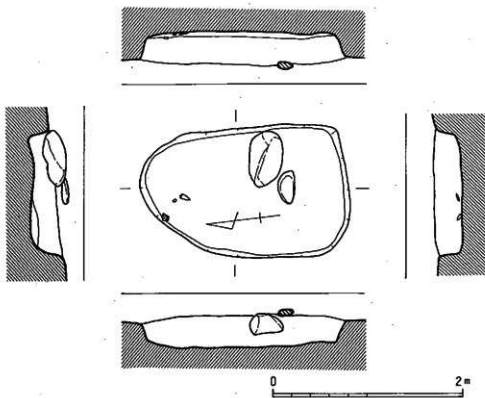
竪穴住居は、B地区内で4軒検出した。それらは、円形プランと方形状プランの2タイプに分かれ、分散的に確認された。時期は、弥生前期末から中期末である。

1号竪穴住居（図版32-1、第32図、付図2） 1号竪穴住居は、B地区中央に位置する。竪穴住居は7号・8号・12号・28号貯蔵穴と重複している。

この遺構は、削平が著しく壁体が15cm程しか残っていないが、略円形を呈している。

南北残存長4.48m、東西 4.23m、深さ0.15mを測る。住居内にはピットが見られるが、主柱穴と判別することはできない。

2号竪穴住居（図版32-2、第33図、付図2） 2号竪穴住居は、B地区中央、1号竪穴住居北側に位置する。竪穴住居南側はトレンチで、さらに北側は14号溝に切られている。



第30図 1号土壇基突洞図(1/20)

この遺構は、削平が著しく全体が5cm程しか残っていないが、東西側のはほぼ平行になるプランや遺構内の台石の存在から住居と見なした。

南北残存長3m、東西残存3.46m、深さ0.05mを測る。住居内にはピットが2個見られるが、主柱穴と判別することはできない。

3号竪穴住居 (図版33-1、図版83、第35図、付図2) 3号竪穴住居は、B地区北側、貯蔵穴群南側に位置する。竪穴住居南側ではトレンチのため三角形に残存するに過ぎない。

この遺構は、表土直下から二次加熱による赤変した土器が住居内一面に検出された。その後土器を除去すると、炭層・焼土層が多量に分布していた。その中からは炭化米も検出できた。

南北残存長2.94m、東西残存1.02m、深さ.14mを測る。住居内にはピットが2個見られるが、主柱穴と判別することはできない。

4号竪穴住居 (図版33-1、第35図、付図2) 4号竪穴住居は、B地区北東側、3号竪穴住居東側に位置する。

この遺構は、削平が著しく全体が全く残っていなかったが、中央の炉跡の存在や9本程存在する柱穴から、円形住居と推定した。

各柱穴の大きさはP1 (径33cm、深さ55cm)、P2 (径28cm、深さ41cm)、P3 (径32cm、深さ48cm)、P4 (径45cm、深さ33cm)、P5 (径20cm、深さ27cm)、P6 (径32cm、深さ25cm)、P7 (径36cm、深さ10cm)、P8 (径26cm、深さ20cm)、P9 (径43cm、深さ20cm)を測る。また各柱穴間距離はP1-P2 (1.62m)、P2-P3 (1.47m)、P3-P4 (0.97m)、P4-P5 (1.28m)、P5-P6 (1.39m)、P6-P7 (2.15m)、P7-P8 (1.35m)、P8-P9 (1.22m)、P9-P1 (1.64m)を測る。

(2) 遺物

① 土器

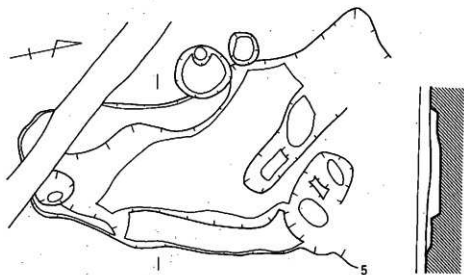
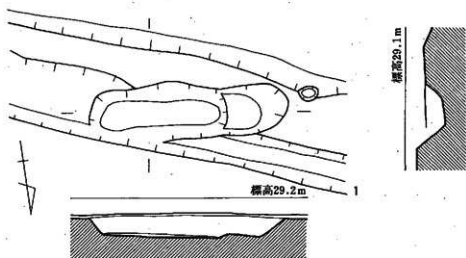
1号貯蔵穴出土土器 (第36図)

316は「ハ」の字に開く口縁部片である。調整は摩滅のため不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗橙色を呈する。復元口径13cmを測る。

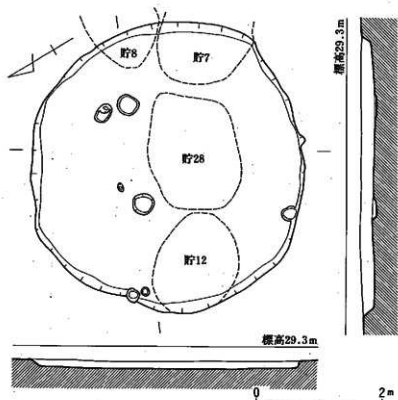
317は如意形口縁をもつ甕である。外面には部分的に煤を附着する。調整は外面でハケ目がみられる。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄茶色を呈する。復元口径は13cmを測る。

318はほぼ平坦な底部片である。外面は赤変している。調整は摩滅のため不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径7cmを測る。

319はやや上げ底の底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎



第31圖 1号・5号土坑実測図(1/40)



第32図 1号竪穴住居実測図(1/60)

土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元底径は11.5cmを測る。

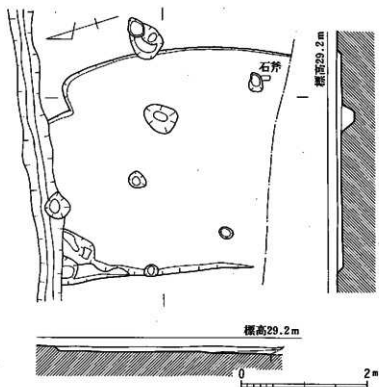
320はやや上げ底の底部片である。調整は外面が細かいタテハケの後磨研、内面が摩滅のため不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄茶褐色を呈する。復元底径は10cmを測る。

321はやや上げ底の底部片である。調整は摩滅のため不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径は6.8cmを測る。

322は如意形口縁部片である。口縁端部下方には刻み目を入れる。また体部には三角凸帯を貼付する。調整は外面口縁端部下方にハケ目、凸帯部ヨコナデ、内面摩滅のため不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。

323は逆L字状口縁部片である。調整は外面にタテハケが見られる。焼成は良好である。胎土は砂粒を若干含む。色調は暗褐色を呈する。

324は「ハ」の字に開く口縁部片である。外面に2条の沈線が巡る。調整は外面沈線を入れた後にタテハケ、内面ヨコ磨研である。焼成は良好である。胎土は細粗砂粒が混在する。色調は暗褐色を呈する。



第33図 2号竪穴住居実測図(1/60)

325は「ハ」の字に開く口縁部片である。調整は摩滅のため不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙色を呈する。復元口径11.8cmを測る。

326は肩部に凸帯を貼付する体部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多量に含む。色調は黄茶色を呈する。

327は2条の凸帯を貼付する体部片である。調整は摩滅が著しいが、凸帯部はヨコナデである。胎土は細粗砂粒が混在する。色調は黄茶褐色を呈する。

328は如意形口縁部片である。外面には2条の沈線が入る。調整は摩滅が著しく不明である。

胎土は細粗砂粒が混在する。色調は黄橙色を呈する。

329は如意形口縁部片である。体部には三角凸帯を貼付する。調整は外面凸帯下方にハケ目、凸帯部ヨコナデ、内面摩滅のため不明である。焼成は良好である。胎土は細粗砂粒を混在している。色調は橙褐色を呈する。

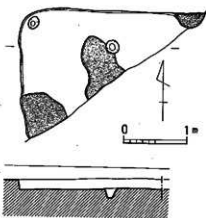
330は如意形口縁部片である。口縁端部に刻み目を入れる。体部には三角凸帯を貼付する。調整は外面凸帯部ヨコナデ、内面摩滅のため不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。

331は如意形口縁部片である。調整は外面口縁部片ヨコナデ、体部がタテハケ、内面摩滅のため不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径27cmを測る。

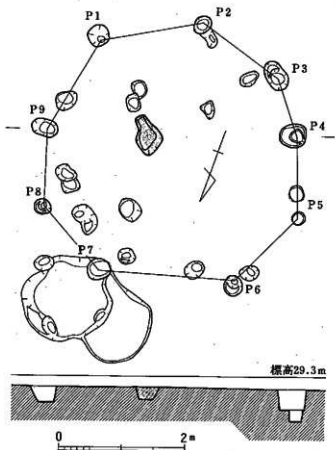
350はやや上げ底の底部片である。外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。胎土は細粗砂粒が混在する。焼成は良好である。色調は黄橙色を呈する。底径は8.5cmを呈する。

2号貯蔵穴出土土器（図版79、第37図）

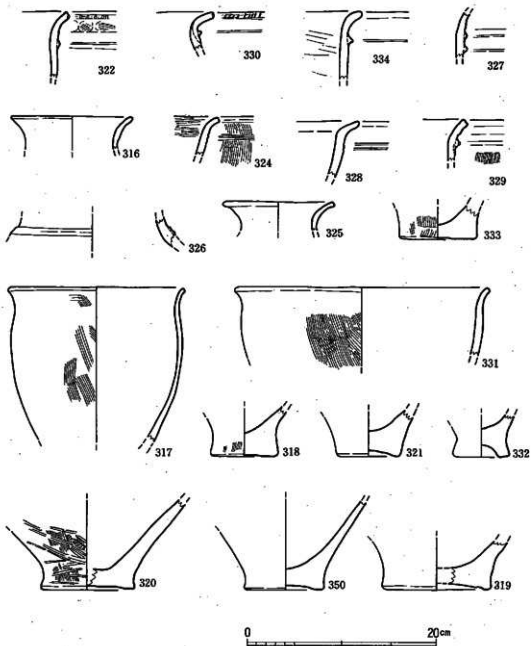
332は、上げ底で外方に張り出す底部片である。外



第34図 3号壺穴住居実測図(1/60)



第35図 4号壺穴住居実測図(1/60)



第36图 1号貯藏穴出土土器实测图(1/4)

面は赤変している。調整は外面タテハケ、内面ナデである。焼成は良好である。胎土は細砂粒がとても多い。色調は橙色を呈する。

333は平坦な底部片である。調整は外面タテハケが見られる。焼成は良好である。胎土は細粗砂粒が混在する。色調は黄橙色を呈する。底径は8.2cmを呈する。

334は如意形口縁部片である。外面には垂れ気味の凸帯を貼付する。調整は外面不明、内面ナデである。焼成は良好である。胎土は細粗砂粒が混在する。色調は黄橙色を呈する。

335は平坦で、体部に向かって大きく張り出す底部片である。内外面とも赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄茶色を呈する。底径は6cmを測る。

336はやや上げ底で、外方に張り出す底部片である。調整は外面にタテハケが見られる。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。底径は7.6cmを測る。

337は平坦で突出する底部片である。外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を含む。色調は黄橙色を呈する。底径は7cmを測る。

338は鋤先条口縁部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は細粗砂粒が混在する。色調は黄橙色を呈する。口径は14cmを測る。

339は逆し字状口縁部片である。調整は外面不明、内面ヨコナデである。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含む。色調は赤茶色を呈する。

340は如意形口縁部片である。口縁部下方に刻み目を入れる。調整は外面ヨコハケが見られる。焼成は良好である。胎土は細粗砂粒を多く含む。色調は黄茶色を呈する。

341は如意形口縁部片である。調整は外面口縁部辺タテハケの後ナデ、体部タテハケである。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙色を呈する。

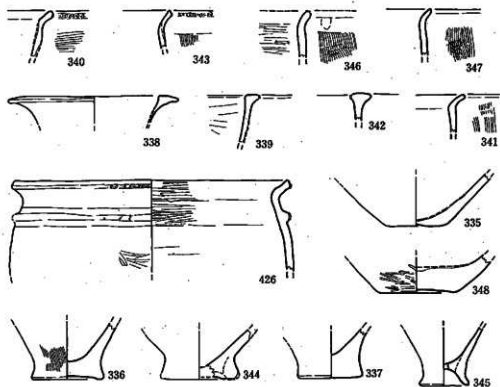
342は逆し字状口縁部片である。口縁部は内方に肥厚する。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は細粗砂粒が混在する。色調は黒褐色を呈する。

343は如意形口縁部片である。口縁部はやや窪み、端部下方には刻み目を入れる。調整は外面口縁部辺ナデ、体部タテハケである。焼成は良好である。胎土は細粗砂粒を混在する。色調は黄茶色を呈する。

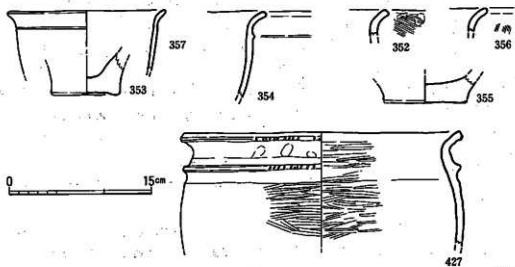
344はやや上げ底で、外面に張り出す底部片である。外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細粗砂粒が混在する。色調は黄橙色を呈する。復元底径は8.2cmを呈する。

345は極端に上げ底で、外面に張り出す底部片である。外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を含む。色調は黄橙色を呈する。復元底径は5cmを測る。

346は如意形口縁部片である。調整は外面口縁部辺ヨコナデ、体部タテハケの後ナデ、内部



附 2



附 3

第37图 2号·3号貯藏穴出土土器实测图(1/4)

磨研である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗黄茶色を呈する。

347は如意形口縁部片である。調整は外面口縁部辺ヨコナア、体部タテハケである。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。

348はやや上げ底で底部片である。外面底部には黒斑がみられる。調整は外面磨研である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗黄茶色を呈する。底径は8cmを呈する。

426は如意形口縁をもつ甕である。体部に1条の凸帯を貼付する。口縁部下方及び凸帯に刻み目を入れる。調整は外面口縁部辺ヨコナア、凸帯部ヨコナア、それ以下磨研、内面は磨研である。焼成は良好である。胎土は細粗砂粒が混在する。色調は暗黄茶色を呈する。復元底径は30cmを測る。

3号貯蔵穴出土土器 (第37図)

352は如意形口縁片である。調整は口縁部及び内面がヨコナア、外面がハケ目である。焼成は良好である。また胎土は細粗砂粒が混在する。色調は橙色を呈する。

353は底部片である。若干上げ底になる。外面は赤変している。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。復元底径7.3cmを測る。

354は如意形口縁片である。屈曲部下方に凸帯が貼付される。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。

355は平坦な底部片である。外面は赤変している。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は砂粒を少し含む。色調は黄橙色を呈する。復元底径8.8cmを測る。

356は如意形口縁片である。調整は口縁部及び内面がヨコナア、外面がハケ目の後、ナアである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を少し含む。色調は暗橙色を呈する。

357は如意形口縁をもつ甕である。体部下半から底部にかけて欠失している。屈曲部片に1条の沈線が巡る。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は砂粒を少し含む。色調は黄橙色を呈する。復元口径16.8cmを測る。

427は2号貯蔵穴出土の426と接合可能である。

5号貯蔵穴出土土器 (第38図)

351は体部片である。調整は外面で部分的に磨きが見られる。焼成は良好である。また胎土は砂粒を少し含む。色調は黄橙褐色を呈する。

6号貯蔵穴出土土器 (第38図)

358は如意形口縁をもつ甕である。体部下半から底部にかけて欠失している。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。復元口径27.2cmを測る。

359は平坦な底部片である。外面は赤変している。調整は磨減が著しく不明である。焼成は

良好である。また胎土は細粗砂粒が混在する。色調は黄橙色を呈する。復元底径8.2cmを測る。

360は「ハ」の字に開く口縁部片である。外面は赤変している。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。復元口径17.2cmを測る。

362は如意形口縁片である。屈曲部に凸帯を巡らす。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を少し含む。色調は淡橙色を呈する。

363は如意形口縁片をもつ壺である。外面は赤変している。体部中央から底部にかけて欠失している。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を少し含む。色調は黄橙色を呈する。復元口径20cmを測る。

364は「ハ」の字に開く口縁部片である。部分的に煤が付着する。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細粗砂粒が混在する。色調は淡黄色を呈する。復元口径18cmを測る。

365は如意形口縁をもつ壺である。体部中央から底部にかけて欠失している。調整は磨減が著しく不明である。外面にハケ目がみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。復元口径20cmを測る。

366は如意形口縁片である。やや屈曲が強い。外面は赤変している。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗黄橙色を呈する。

368は如意形口縁片である。調整は磨減が著しいが、内面ナデ、口縁部辺ハケ目である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を少し含む。色調は橙褐色を呈する。

7号貯蔵穴出土土器 (第38回)

372は底部片である。若干上げ底になる。外面は赤変している。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。復元底径7.2cmを測る。

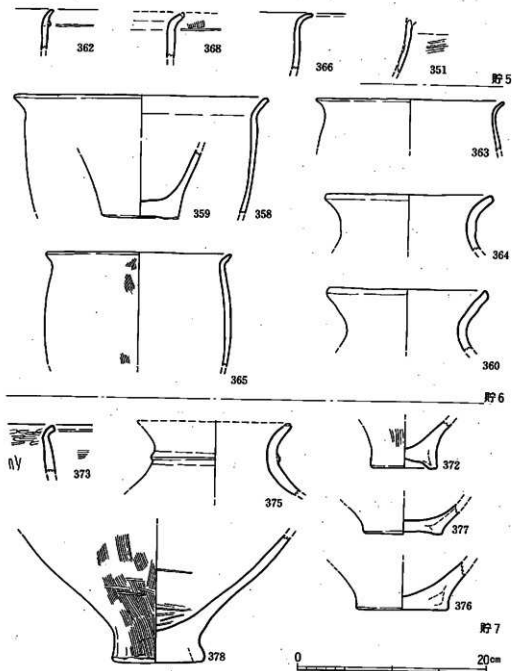
373は如意形口縁片である。調整は磨減が著しいが、内面磨きのみみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を少し含む。色調は黄褐色を呈する。

375は「ハ」の字に開く口縁部片である。頸部に凸帯を巡らす。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を少し含む。色調は橙色を呈する。径13.6cmを測る。

376は平坦な底部片である。外面は黒変している。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。復元底径10cmを測る。

377は底部片である。若干上げ底になる。調整は磨減が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。復元底径8.5cmを測る。

378は底部片である。底部はやや突出気味になる。外面は煤が付着している。調整は縦方向



第38图 5号~7号貯藏穴出土土器实测图(1/4)

ハケ目の後、部分的に磨き状に消している。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄茶褐色を呈する。底径10cmを測る。

8号貯蔵穴出土土器 (第39図)

380は如意形口縁片である。屈曲部辺に凸帯を貼付する。調整は磨滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄茶色を呈する。

381は平坦な底部片である。外面は黒変している。調整は磨滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径7.5cmを測る。

382は如意形口縁部片及び底部片である。体部が欠失している。如意形口縁部片は屈曲部下方に2条の沈線を巡らす。また、底部はやや突出気味で、若干上げ底となる。調整は外面に立て方向のハケ目がみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径23cm、底径6cmを測る。

383は如意形口縁片である。調整は口縁部内面ヨコハケ、外面タテハケ、口縁端部はヨコナデがみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗褐色を呈する。

438は体部片である。外面には無輪紋杉文様が線刻される。

9号貯蔵穴出土土器 (第39図)

385は底部片である。底部はやや突出気味になる。外面は赤変している。調整は磨滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細粗砂粒が混在する。色調は黄茶褐色を呈する。底径8.6cmを測る。

387は底部片である。底部はやや突出気味し、上げ底になる。調整は外面縦方向ハケ目、内面ナデである。焼成は良好である。また胎土は細粗砂粒が混在する。色調は黄茶褐色を呈する。底径6.7cmを測る。

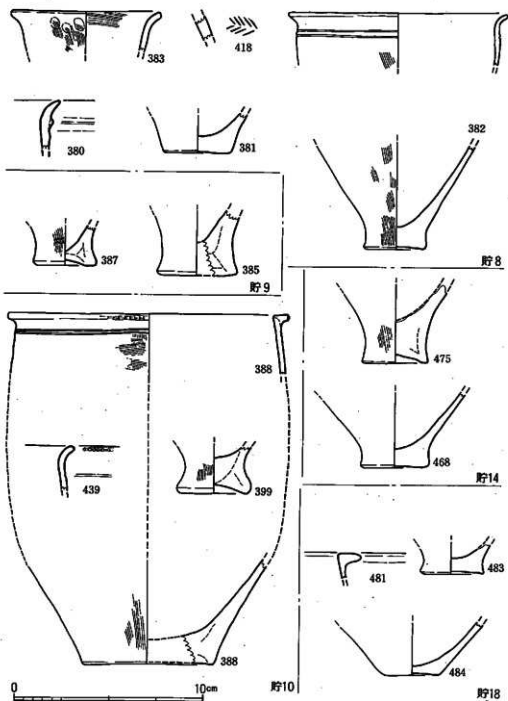
10号貯蔵穴出土土器 (図版79、第39図)

388は、逆し字状口縁部片及び底部片である。体部が欠失している。逆し字状口縁部は口縁端部下方に刻み目を巡らす。また、口縁部下方には2条の沈線を施す。底部は平坦である。調整は口縁部で沈線下方にハケ目、内面及び底部で磨滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径30cm、復元底径14cmを測る。

399は底部片である。底部は突出し、上げ底になる。外面は赤変している。調整は磨滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細粗砂粒が混在する。色調は橙褐色を呈する。底径8cmを測る。

439は如意形口縁部片である。口縁端部下端に刻み目、下方に沈線を巡らす。調整は磨滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗褐色を呈する。

11号貯蔵穴出土土器 (図版79、第40図)



第39图 8号~10号·14号·18号贮藏穴出土土器实测图(1/4)

365は如意形口縁をもつ甕である。体部内外面では黒斑がみられ、外面底部辺では赤変している。底部を欠失している。調整は全体的に摩滅が著しく不明であるが、外面にハケ目がみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含み、粗砂粒も混じる。色調は黄褐色を呈する。復元口径25.4cmを測る。

441はやや上げ底で突出した底部辺である。調整は外面ハケ目である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含み、粗砂粒も混じる。色調は黄褐色を呈する。復元底径7.2cmを測る。

442はやや緩やかに屈曲する如意形口縁部片である。調整は外面タテハケ、内面ナデである。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒が混在する。色調は黄褐色を呈する。復元口径2.8cmを測る。

444は逆し字状口縁をもつ甕である。口縁端部は丸くおさまる。体部下方から底部が欠失している。調整は全体的に摩滅が著しく不明であるが、外面ハケ目、内面ナデがみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径22cmを測る。

446は如意形口縁をもつ鉢である。部分的に黒斑がみられる。調整は全体的に摩滅が著しく不明であるが、外面でヨコ方向の摩滅がみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径25.7cmを測る。

448はやや上げ底で突出した底部辺である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径8.5cmを測る。

449は逆し字状口縁をもつ甕である。体部下方から底部が欠失している。外面には煤が付着している。調整は全体的に摩滅が著しく不明であるが、外面でハケ目がみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は明茶色を呈する。復元口径24.5cmを測る。

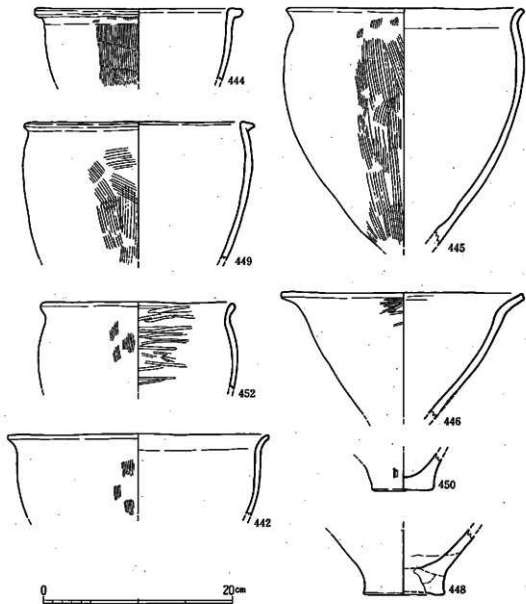
450は平坦な底部片である。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が少なく、粗砂粒が多く混じる。色調は褐色を呈する。復元底径6.6cmを測る。

452はやや緩やかに屈曲する如意形口縁部片である。調整は外面タテハケ、内面摩研である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗茶褐色を呈する。復元口径21cmを測る。

14号貯蔵穴出土土器 (第39図)

416はやや上げ底の底部片である。底部辺は赤変している。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元底径12.6cmを測る。

468は突出する底部片である。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は赤褐色を呈する。底径7.3cmを測る。



第40图 11号貯藏穴出土土器实测图(1/4)

475は極端に突出し、上げ底の底部片である。調整は摩滅が著しいが、外面にタテハケがみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。底径7cmを測る。

18号貯蔵穴出土土器 (第39図)

481 鋤先口縁部片である。調整は内外面共に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は黄褐色である。

483 上げ底で突出する底部片である。調整は内外面共に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は黄褐色である。底径は6.8cmを測る。

484 やや上げ底で、外方に大きく広がる底部片である。調整は内外面共に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は黄褐色である。底径は6.3cmを測る。

19号貯蔵穴出土土器 (第41図)

251は中層出土。体部片である。頸部の屈曲部片と思われる。調整不明。焼成はあまり良くない。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は赤褐色を呈する。

252は如意形口縁をもつ大形鉢である。口縁端部下端に刻目を施す。また屈曲部下方に断面三角凸帯を貼付する。内面は黒斑がみられる。調整は内面で丁寧なヨコ磨き、外面で口縁部から凸帯までがヨコ磨き、凸帯下方で粗いヨコハケになる。焼成はあまり良くない。また胎土は細砂粒を多く含む。調整は内外面に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は暗黄褐色を呈する。復元口径41cmを測る。

486 肥厚した平坦な底部片である。色調は黄褐色である。底径は9.6cmを測る。

487 上げ底でやや外方に張り出す底部片である。外面は部分的に黒変、赤変しているところがある。調整は内外面共に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は暗褐色である。底径は4.6cmを測る。

491 体部変である。貝殻文による施文である。上方は3条の沈線、下方はまず縦に2本の沈線で区画し、右側はタテ方向の羽状文、左側はヨコ方向の羽状文を施す。

492 上げ底でやや外方に張り出す底部片である。底部から体部へは直線的に伸びる。外面は部分的に赤変しているところがある。調整は内外面共に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は黄褐色である。復元底径8.6cmを測る。

20号貯蔵穴出土土器 (第41図)

493は如意形口縁をもつ甕である。口縁部の屈曲がやや強い。煤が付着する部分がある。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が少なく、粗砂粒が多く混じる。色調は褐色を呈する。復元口径27cmを測る。

494は底部片である。やや外方に張り出す。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好で

ある。また胎土は細砂粒が少なく、粗砂粒が多く混じる。色調は褐色を呈する。底径8cmを測る。

495は如意形口縁をもつ甕である。器壁がやや厚い。屈曲部に沈線を巡らす。調整は全体的に摩滅が著しいが、内面にはヨコ摩きがみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は褐色を呈する。復元口径17cmを測る。

496は如意形口縁をもつ甕である。口縁端部には刻み目を施す。口縁部辺では黒斑がみられる。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含み、粗砂粒も混じる。色調は褐色を呈する。復元口径29cmを測る。

497はやや突出している底部。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が少なく、粗砂粒が多く混じる。色調は褐色を呈する。復元底径6.8cmを測る。

21号貯蔵穴出土土器 (第42回)

498は底部片である。やや外方に張り出す。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が少なく、粗砂粒が多く混じる。色調は褐色を呈する。底径9cmを測る。

499はやや突出している底部。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が少なく、粗砂粒が多く混じる。色調は褐色を呈する。復元底径7.6cmを測る。

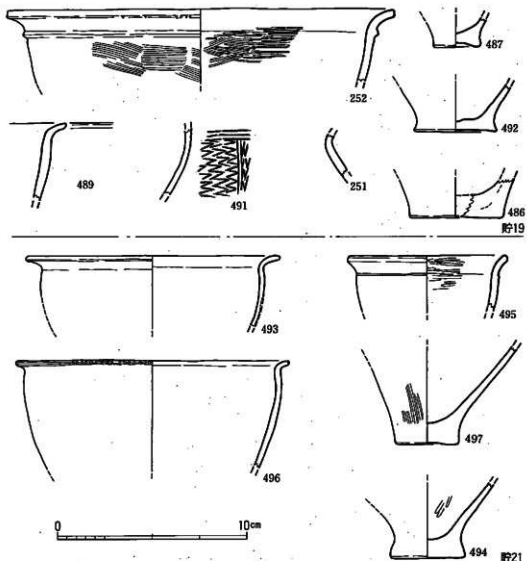
500は口縁部と底部が欠失した体部片である。胴最大径部に2条の沈線を貝殻で巡らす。調整は内面にヨコ摩きが見られる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が少なく、粗砂粒が多く混じる。色調は橙色を呈する。復元胴径18.4cmを測る。

501は体部片である。2条の沈線及び重弧文が施される。外面には黒斑がみられる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は淡黄橙色を呈する。

502は、口縁部と体部下半から底部が欠失した肩部片である。肩部上端は段をつけ、参上の沈線を巡らす。上下段の沈線は貝殻施文である。またその下には重弧文及び貝殻施文の沈線が巡る。調整は内面に上方でヨコハケの後ナデ、下方でヨコ摩きがみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が多く混じる。色調は橙褐色を呈する。復元胴径19cmを測る。

504は平坦な底部片である。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含み、粗砂粒も交じる。色調は橙褐色を呈する。復元底径7.8cmを測る。

505は平坦でやや肥厚した底部片である。黒斑がみられる。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含み、粗砂粒も混じる。色調は褐色を



第41図 19号・20号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

呈する。復元底径9.8cmを測る。

507は如意形口縁をもつ甕である。調整は外面タテハケ、内面ヨコハケである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含み、粗砂粒も混じる。色調は橙褐色を呈する。復元口径11cmを測る。

508は如意形口縁片である。調整は内面に指頭圧痕がみられる。焼成は良好である。また胎

土は細砂粒を多く含み、粗砂粒も混じる。色調は褐色を呈する。

509は如意形口縁をもつ甕である。体部辺では黒斑がみられる。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含み、粗砂粒も混じる。色調は褐色を呈する。復元口径24cmを測る。

510はやや突出している底部で、焼成後穿孔が見られる。調整は外面粗いタテハケ、内面ナデである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が少なく、粗砂粒が多く混じる。色調は褐色を呈する。底径9cmを測る。

511はやや突出している底部で、体部には大きく張り出す。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は褐色を呈する。復元底径7cmを測る。

512は如意形口縁片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含み、粗砂粒も混じる。色調は橙褐色を呈する。

22号貯蔵穴出土土器 (第42回)

97は平坦な底部片である。外面に黒斑がみられ、内面は赤変している。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は橙褐色を呈する。復元底径11.4cmを測る。

98は段を有する体部片である。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は黄褐色を呈する。

99は「く」の字に屈曲する口縁部片である。やや器壁は薄い。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は黄褐色を呈する。

100は平坦な底部片である。内外面共に赤変している。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は橙褐色を呈する。復元底径9.6cmを測る。

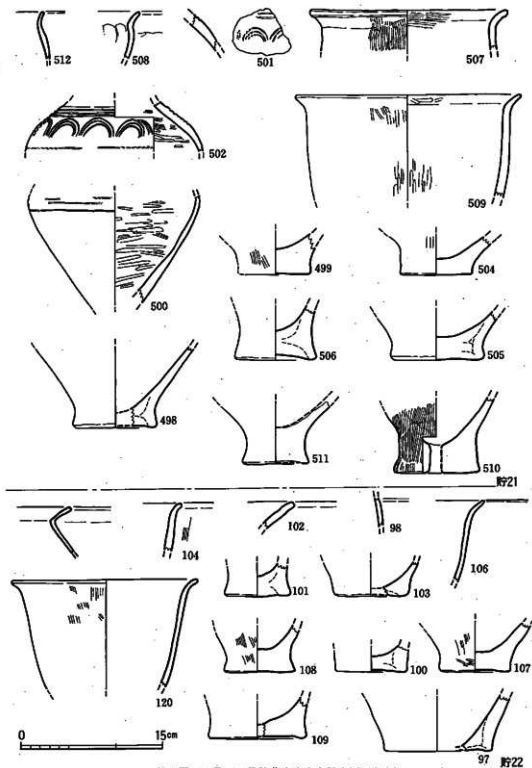
101はやや突出した底部片である。外面は赤変している。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径7cmを測る。

102は外方に大きく開く口縁部片である。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は淡茶褐色を呈する。

103は平坦な底部片である。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は橙褐色を呈する。復元底径7.8cmを測る。

104は如意形口縁片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含み、粗砂粒も混じる。色調は黒茶褐色を呈する。

106は如意形口縁片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土



第42图 21号·22号贮藏穴出土土器实测图(1/4)

は粗砂粒が多い。色調は橙褐色を呈する。

107は平坦な底部片である。底部外面まで黒斑が見られる。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多量に含む。色調は橙褐色を呈する。復元底径7.4cmを測る。

108は中層出土。平坦で、やや張り出す底部片である。外面に黒斑がみられる。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成はあまり良くない。また胎土は細砂粒を多量に含む。色調は黄橙色を呈する。復元底径7.4cmを測る。

109は平坦な底部片である。調整は全体的に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多量に含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径10.5cmを測る。

120は上層出土。如意形口縁片である。外面に煤が付着する。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む、粗砂粒が多く混じる。色調は黄橙色を呈する。復元口径19.8cmである。

23号貯蔵穴出土土器 (第43回)

110は、やや突出した底部片である。体部は丸味をもつようである。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒が多い。色調は黄橙色を呈する。復元底径4.2cmを測る。

111は、外方に張り出す口縁部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒が多い。色調は黄橙色を呈する。

112は、外方に張り出す口縁部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒が多い。色調は黄橙色を呈する。

113は、やや内弯気味に立ち上がる口縁部片である。内面に黒斑が見られる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒が多い。色調は黄橙色を呈する。

114は、外方に張り出す口縁部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒が多い。色調は黄橙色を呈する。

115は、如意形口縁片である。口縁部内面に黒色付着物がある。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。

116は、平坦で肥厚した底部片である。外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。復元底径7.1cmを測る。

117は、底部片である。やや上げ底になる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は赤褐色を呈する。復元底径7cmを測る。

118は、平坦な底部片である。やや丸味をもって体部に立ち上がる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は砂粒を多く含む。色調は赤褐色を呈する。復元底径

7.6cmを測る。

119は、平坦な底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径8cmを測る。

121は、如意形口縁をもつ甕である。体部下半は欠失している。口縁部径は胴最大径を下回る。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径19cmを測る。

122は、平坦でやや張り出す底部片である。外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径7.9cmを測る。

123は、平坦でやや張り出す底部片である。外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径8.5cmを測る。

124は、如意形口縁をもつ甕である。体部下半から欠失している。外面口縁部から体部にかけて煤が付着する。口縁部径は胴最大径を上回る。調整は内面ナデ、外面タテハケである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。復元口径23cmを測る。

125は、平坦でやや肥厚した底部片である。外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径6.9cmを測る。

126は平坦で肥厚し、やや突出した底部片である。外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元底径8.6cmを測る。

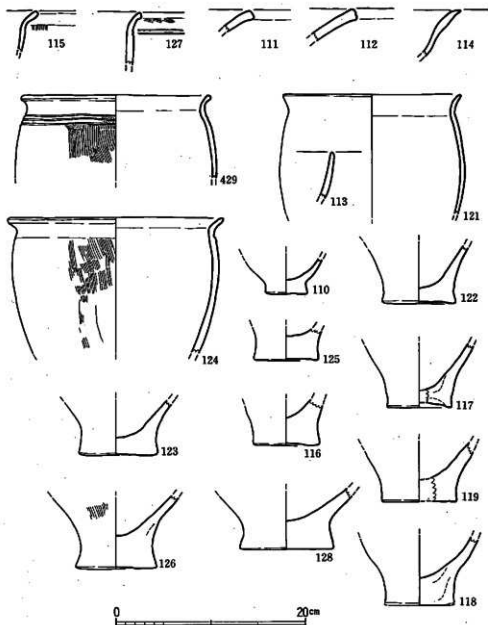
127は、如意形口縁部片である。口縁端部はやや下方に肥厚する。外面に煤が付着する。調整は摩滅のため不明で、焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。

128は平坦で肥厚し、やや突出した底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。復元底径9.9cmを測る。

429は、如意形口縁をもつ甕である。体部中央から欠失している。口縁部径は胴最大径を下回る。口縁端部下端に刻み目を入れ、屈曲部下方に3条の沈線を入れる。調整は内面ナデ、外面タテハケである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径20.2cmを測る。

24号貯蔵穴出土土器 (第44回)

348は若干上げ底の底部片である。外面は黒斑がみられる。調整は摩滅が著しいが、外面に摩きが見られる。焼成は良好である。また胎土は砂粒を多く含む。色調は橙茶色を呈する。復



第43图 23号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

元底径 8 cm を測る。

574は体部片である。頸部には4条の沈線が廻り、肩部には沈線で区画した内部に鋸歯文及び羽状文を貝殻施文により描く。焼成は良好である。また胎土は砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。

575は体部片である。肩部には沈線で区画した内部に鋸歯文及び羽状文を貝殻施文により描く。焼成は良好である。また胎土は砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。

129は若干上げ底の底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元底径10.4cmを測る。

130は131の体部と思われる。

131は舌状把手である。口縁部に逆し字状に貼付する。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。

348 若干上げ底の底部片である。外面は黒斑がみられる。調整は摩滅が著しいが、外面に磨きが見られる。焼成は良好である。また胎土は砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。復元底径 8 cm を測る。

430は頸部片である。2条の削り出し凸帯が見られる。調整は摩滅が著しく、不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は灰褐色を呈する。

574 体部片である。頸部には4条の沈線が廻り、肩部には沈線で区画した内部に鋸歯文及び羽状文を貝殻施文により描く。焼成は良好である。また胎土は砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。

575 体部片である。肩部には沈線で区画した内部に鋸歯文及び羽状文を貝殻施文により描く。焼成は良好である。また胎土は砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。

25号貯蔵穴出土土器 (第44回)

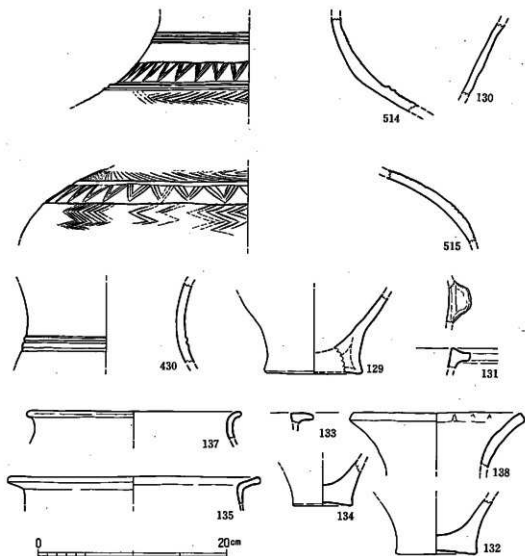
132は若干上げ底の底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元底径8.6cmを測る。

133は逆し字状口縁部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。

134は若干上げ底の底部片である。外面全体は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元底径 6.4cm を測る。

135は如意形口縁片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が多い。色調は黄褐色を呈する。復元口径27cmを測る。

137は口縁部片である。口縁端部は丸くおさまる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が多い。色調は茶褐色を呈する。復元口径23cmを測る。



第44図 24号・25号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

138は「ハ」の字に大きく開く口縁部片である。口縁端部は面をもつ。口縁内面には鋸歯文状の文様が入る。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径17.8cmを測る。

26号貯蔵穴出土土器 (第45図)

143は若干上げ底の底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元底径10.4cmを測る。

144は如意形口縁片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒が多い。色調は橙褐色を呈する。

253は「ハ」の字に大きく開く口縁部片である。器壁は厚く、口縁端部は面をもつ。頸部に2条の沈線が巡る。調整は外面口縁部下方はヨコ摩研、沈線以下タテハケである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄茶色を呈する。復元口径27.7cmを測る。

254は「ハ」の字に大きく開く口縁部片である。器壁は厚く、口縁端部は面をもつ。調整は内面にヨコ摩きが見られる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径21.8cmを測る。

256は如意形口縁をもつ甕である。体部中央より下半は欠失している。内外面には黒斑がみられる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径26cmを測る。

27号野藏穴出土土器 (図版85、第46～50図)

257は三角形舌状把手である。口縁部に逆L字状に貼付すると思われる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。

258は「ハ」の字に大きく開く口縁部片である。器壁は厚く、口縁端部は面をもつ。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径36cmを測る。

259は体部片である。調整は摩滅が著しいが、外面下半にハケ目が見られる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。

519は器台片である。上下端が欠失している。調整は外面タテハケ、内面に絞り痕が見られる。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。

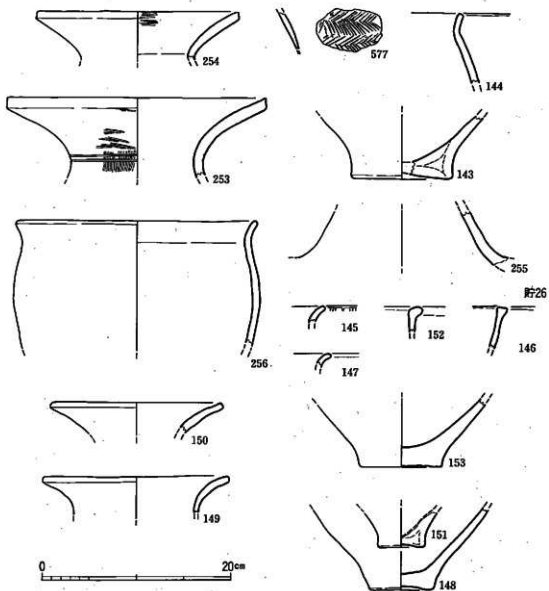
521は底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。復元底径5.8cmを測る。

522はやや外方に張り出す底部片である。底部辺は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。復元底径5.8cmを測る。

523は如意形口縁をもつ甕である。体部中央から欠失している。口縁端部はややつまみ上がる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は淡黄褐色を呈する。復元口径28.4cmを測る。

524は如意形口縁をもつ甕である。体部下半から欠失している。口縁端部は丸くおさまる。外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径27.6cmを測る。

525は逆L字状口縁部片である。口縁端部はやや下方に垂下する。また1条の凸帯状のもの



第45図 26号・28号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

貯28

が見られる。外面に丹を塗る。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径32cmを測る。

526は如意形口線をもつ甕である。体部中央から欠失している。口縁端部はややつまい上がる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調

は橙褐色を呈する。復元口径22.4cmを測る。

527は如意形口縁をもつ甕である。体部下半分から欠失している。口縁端部はややつまみ上がる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。復元口径11cmを測る。

528は「く」の字形口縁をもつ甕である。屈曲部には三角凸帯を貼付する。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。復元口径28.4cmを測る。

529は「く」の字形口縁をもつ甕である。口縁端部はややつまみ上がる。調整は外面タテハケ、内面なでである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径26.8cmを測る。

530は高杯の脚片である。外面は丹が塗られる。杯底部は充填手法を取る。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。

531は「く」の字形口縁をもつ甕である。口縁端部はややつまみ上がる。底部はやや上げ底になる。外面口縁部片に煤が付着する。調整は外面にタテハケがみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗褐色を呈する。口径30cm、底径7.9cm、器高39.4cmを測る。

532はやや突出した底部片である。やや丸味をもって立ち上がる。外面に黒斑がみられる。底部辺は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗黄褐色を呈する。復元底径6.2cmを測る。

533は体部片である。外面は丹が塗られる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。

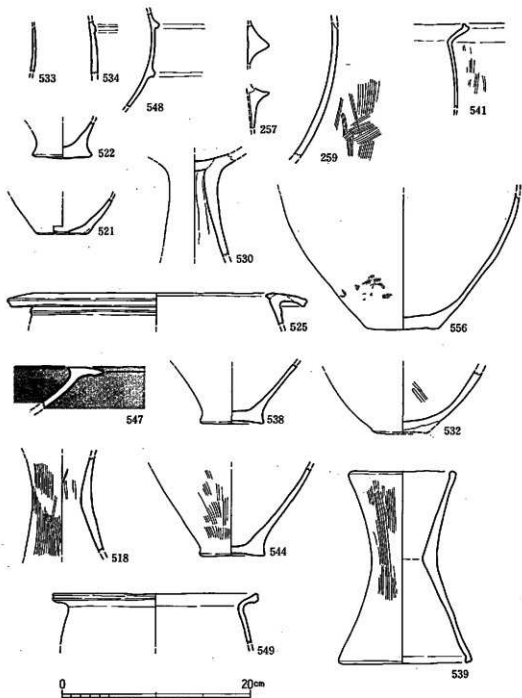
534は体部片である。凸帯を削り出す。外面は丹が塗られる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。

535は如意形口縁をもつ甕である。体部下半分から欠失している。口縁端部は丸くおさまる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は淡黄褐色を呈する。復元口径30.6cmを測る。

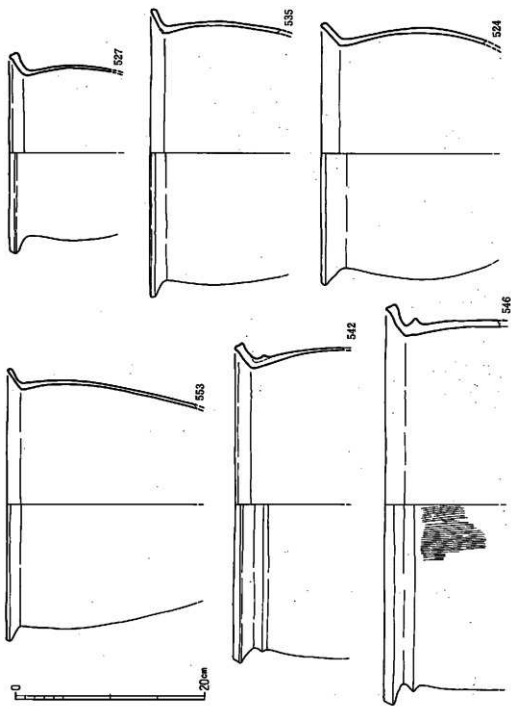
536は「く」の字形口縁をもつ甕である。口縁端部はややつまみ上がる。調整は外面タテハケ、内面ナデである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。復元口径28.4cmを測る。

538はやや上げ底で、外方に突出する底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細・粗砂粒が混在する。色調は灰茶褐色を呈する。底径は6.8cmを測る。

539は「く」の字に屈曲する器台である。屈曲部以下は赤変している。内面上下端部はつま



第46图 27号貯蔵穴出土土器実測図①(1/4)



第47图 27号貯簋式出土器类图②(1/4)

み上げる。調整は外面に一部ハケ目が残る。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は白黄橙褐色を呈する。口径は11.5cm、底径は14.2cmを測る。

541は如意形口縁部片である。口縁端部をつまみ上げる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。

542は如意形口縁をもつ甕である。体部中央から欠失している。口縁端部はやや肥厚し、窪んでいる。口縁部内面に黒斑が見られる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径23.4cmを測る。

543は如意形口縁部をもつ甕である。口縁端部をつまみ上げる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径28.3cmを測る。

544はやや上げ底の底部片である。外面には煤が付着する。また外面底部辺は赤変している。調整は外面に一部ハケ目が残る。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。底径は6.9cmを測る。

545は如意形口縁部をもつ甕である。口縁端部をつまみ上げる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径28.7cmを測る。

546は「く」の字に屈曲する口縁部をもつ甕である。口縁端部は面をもち、やや上方につまみ上げる。屈曲部下方に三角凸帯を巡らす。調整は外面に一部タテハケが残る。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径は41.4cmを測る。

547は鋤先状口縁部をもつ高杯片である。内外面とも丹塗り痕が見られる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。

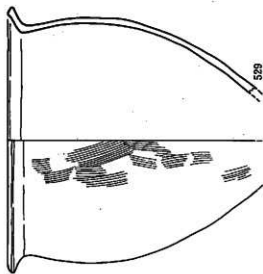
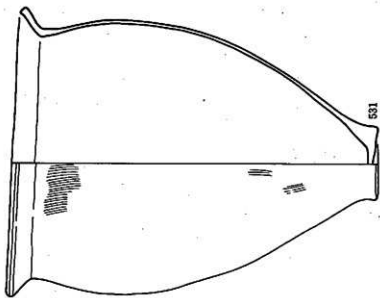
548は体部片である。2条の凸帯を巡らす。調整は内外面ともヨコナデである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。

549は如意形口縁をもつ甕である。体部上半から欠失している。口縁端部はやや肥厚し、窪んでいる。内面に煤が付着する。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径21.4cmを測る。

550は如意形口縁をもつ甕である。体部下半から欠失している。口縁端部をつまみ上げる。外面体部に黒斑が見られる。調整は外面にタテハケがみられる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径24cmを測る。

552は如意形口縁をもつ甕である。体部下半から欠失している。口縁端部はやや肥厚し、窪んでいる。口縁部及び外面体部に煤が付着する。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径27cmを測る。

553は如意形口縁をもつ甕である。体部下半は欠失している。調整は摩滅が著しく不明であ



第48图 27号貯蔵穴出土器実測図①(1/4)

る。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。口径29cmを測る。

554は如意形口縁をもつ甕である。体部中央より下半は欠失している。口縁端部はやや上方につまみ上げる。外面には黒斑がみられる。調整は摩滅が著しいが、外面にハケ目、内面に指頭圧痕がある。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径27cmを測る。

555は如意形口縁をもつ甕である。体部中央より下半は欠失している。口縁端部はやや上方につまみ上げる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。口径22.6cmを測る。

556は平坦な底部片である。外面は丹が見られる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。底径7.8cmを測る。

28号貯蔵穴出土土器 (第45回)

145は口縁部片である。口縁端部に刻み目を入れる。調整は外面ヨコなである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。

146は口縁部片である。調整は外面ヨコなである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄橙色を呈する。

147は口縁部片である。口縁端部は丸くおさまる。調整は外面ヨコなである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。

148はやや上げ底な底部片である。底部外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗細砂粒が混在する。色調は褐色を呈する。底径6.9cmを測る。

149は頸部から「ハ」の字に開く口縁部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗細砂粒が混在する。色調は褐色を呈する。復元口径19.4cmを測る。

150は「ハ」の字に大きく開く口縁部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗細砂粒が混在する。色調は茶褐色を呈する。復元口径18.5cmを測る。

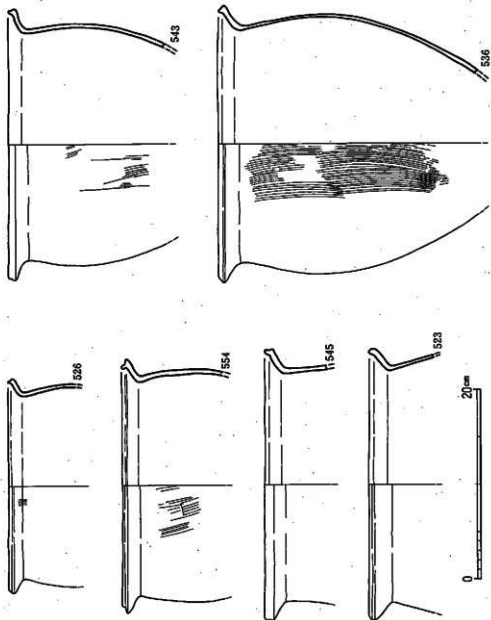
151はやや上げ底な底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗細砂粒が混在する。色調は茶褐色を呈する。底径5.1cmを測る。

152は口縁部片である。調整は外面ヨコなである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。

153は平坦な底部片である。底部外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は粗細砂粒が混在する。色調は黄橙色を呈する。底径8.8cmを測る。

1号土甕出土土器 (第50回)

604 やや上げ底で、やや張り出す底部片である。調整は内外面共に摩滅が著しく不明であ



第49图 27号野麻穴出土器类测图④(1/4)

る。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は黄橙色である。復元底径は7.2cmを測る。

605 やや上げ底で、やや張り出す底部片である。調整は内外面共に摩滅が著しいが、タテハケが見える。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は暗黄褐色である。復元底径は6.8cmを測る。

606 如意形口縁部片である。端部はやや上方に上がる。調整は内外面共に摩滅が著しいが、タテハケが見える。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は暗黄褐色である。復元口径は28.6cmを測る。

5号土壙出土土器 (第50図)

613 体部片である。2条の沈線を巡らし、その下方に鋸歯文を施す。調整は内外面共に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は灰黄褐色である。復元口径は28.6cmを測る。

ピット7出土土器 (第50図)

276は逆L字形口縁部片である。口縁下方に凸帯を巡らす。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径28cmを測る。

ピット17出土土器 (第51図)

280はやや上げ底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。底径10.8cmを測る。

ピット40出土土器 (第51図)

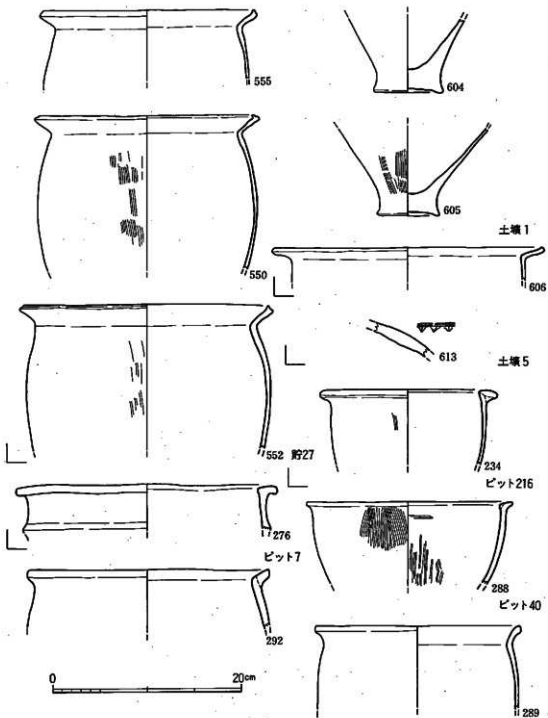
285は逆L字形口縁部をもつ鉢である。底部は平坦である。口縁下方に凸帯を巡らす。口縁部及び底部辺に黒斑がみられる。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細粗砂粒が混在する。色調は褐色を呈する。復元口径16cm、底径9.8cm、器高11.5cmを測る。

287は頸部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙色を呈する。

288は体部から内穹気味に立ち上がり、逆L字形口縁部になる碗である。口縁部は内面に突出する。調整は外面がハケ、内面が磨研である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗黄褐色を呈する。復元口径は22cmを測る。

289は如意形口縁をもつ甕である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径22cmを測る。

290は底部片である。上げ底の底部である。調整は外面にタテハケが見られる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗黄褐色を呈する。復元底径は9.4cmを測る。



第50 27号貯蔵穴、1号・5号土壌、ビット7・40・216出土土器実測図(1/4)

291はかなり突出する底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元底径6.6cmを測る。

292は如意形口縁部片である。口縁内外面が赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細粗砂粒が混在する。色調は黄褐色を呈する。復元口径26cmを測る。

ピット166出土土器 (第51図)

435は如意形口縁をもつ甕である。外面には煤が付着する。調整は外面細かなタテハケ、内面摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は明褐色を呈する。復元口径30cmを測る。

ピット206出土土器 (第51図)

231はやや突出する底部片である。調整は外面にタテハケが見られる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元底径8cmを測る。

ピット209出土土器 (第51図)

436は体部片である。貝殻施文による羽状文を施す。調整は内面でナデである。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。

ピット216出土土器 (第51図)

234は逆L字形口縁部をもつ甕である。体部下半から欠失している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。復元口径19cmを測る。

236は逆L字形口縁部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は暗褐色を呈する。

237はかなり突出する底部片である。内外面とも赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。復元底径7.6cmを測る。

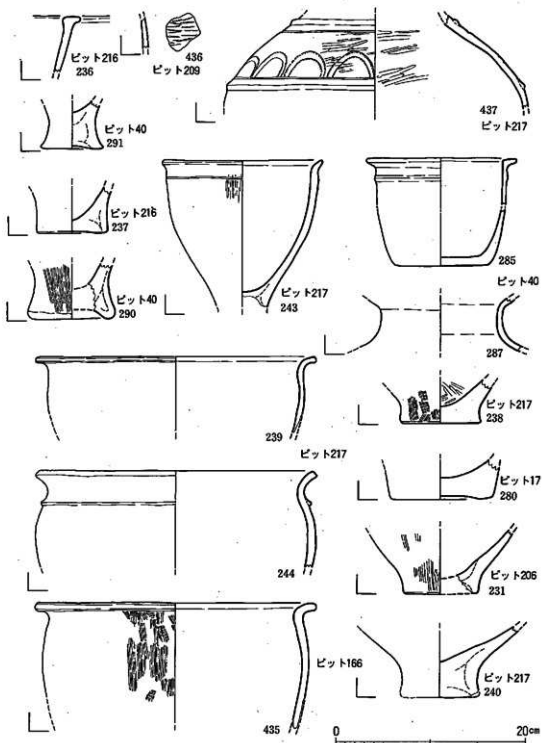
ピット217出土土器 (第51図)

238は底部片である。調整は外面タテハケ、内面磨研である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。底径8.6cmを測る。

239は如意形口縁をもつ甕である。体部中央から欠失する。内外面は赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は明褐色を呈する。復元口径30cmを測る。

240は極端に突出する底部片である。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は橙褐色を呈する。復元底径8.4cmを測る。

243は如意形口縁をもつ甕である。底部を欠失する。口縁部下方に1条の沈線を巡らす。調



第51図 ピット40・166・206・209・216・217出土土器実測図(S=1/4)

整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄色を呈する。復元口径16.8cmを測る。

244は如意形口縁をもつ壺である。体部はやや丸みをもつ。体部中央から欠失する。頸部辺にはやや垂れ気味の凸帯を巡らす。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は明褐色を呈する。復元口径29.2cmを測る。

437は体部辺である。頸部及び胴最大頸部上方に凸帯を巡らす。肩部には貝殻施文で2条の円弧文を巡らす。調整は内面摩研が見られる。焼成は良好である。また胎土は細砂粒を多く含む。色調は褐色を呈する。

ピット85出土土器 (第52図)

691は如意形口縁をもつ壺である。口縁端部下方には刻み目がめぐる。また口縁部下方には3条の沈線が入る。口縁外面には煤が付着する。底部はやや上げ底で、若干突出している。さらに底部辺は赤変している。調整は外面ハケメ、内面摩研が見られる。胎土は細砂粒を多く含むが、粗砂粒も混じる。焼成は良好である。色調は褐色を呈する。口径25.6cm、底径8.1cm、器高24.9cmを測る。

出土地不明土器 (第52図) 854 如意形口縁をもつ壺である。口縁端部下には刻み目がめぐる。また口縁部下方には1条の沈線が入る。口縁外面から体部にかけて黒変している。底部はやや上げ底である。さらに底部辺は赤変している。調整は外面ハケメが見られる。胎土は細砂粒も混じる。焼成は良好である。色調は茶褐色を呈する。口径22.3cm、底径7cm、器高22.8cmを測る。

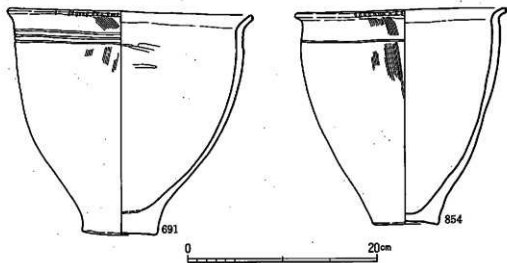
3号壑穴住居出土土器 (図版82、第53図)

584 高杯の身部である。口縁端部はやや垂下し、鵝先状を呈する。内外面共に丹塗りである。調整は内外面共に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は茶褐色である。復元口径31.4cmを測る。

586 「く」の字に屈曲する口縁部片である。端部は上方につまみ上げる。屈曲部に三角突帯を貼付する。また、口縁外面には、刻み目を施す。調整は内外面共に摩滅が著しく不明である。焼成はややあまい。胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色である。復元口径は37.4cmを測る。

587 「く」の字に屈曲する口縁部片である。端部は上方に若干つまみ上げる。屈曲部に稜があまり明瞭でない三角突帯を貼付する。調整は内外面共に摩滅が著しく不明である。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。復元口径27.2cmを測る。

588 体部は大きく張り出し、底部はやや丸味をもつ壺である。頸部及び体部最大径付近に2条1組の三角突帯を貼付する。内外面共黒斑が各所にみられる。調整は内外面共摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。底径8.2cm、胴最大径31.5cmを測る。



第52図 ビット85、位置不明出土土器実測図(1/4)

591 無頸壺の口縁部片である。調整は内外面共摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、粗砂も少し混じる。復原口径21.2cmを測る。

596 壺の底部である。体部から底部を残す。底部はやや上げ底になる。調整は外面にタテハケがみられる。焼成は良好である。内面にススが付着する。胎土は細砂粒を多く含む。底径は7.4cmを測る。

599 碗の口縁部片である。調整は内外面共摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復原口径は12cmを測る。

602 高杯の脚部片である。丹が外面端部まで塗られている。調整は内外面共摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。復原底径18.6cmを測る。

これらの土器の時期は弥生中期末とみられる。

② 石製品

打製石器

㊦ 打製石斧 (同図88、第110図)

101、95、83、3、4、90、75、56は片岩質の打製石斧である。101は18号溝出土、95は10号貯蔵穴出土、83・3・4は表採、95・75は小谷出土、56は3号墳北側集石出土。3は大形で短冊形、75は破損しているものの大形、その他は小形である。

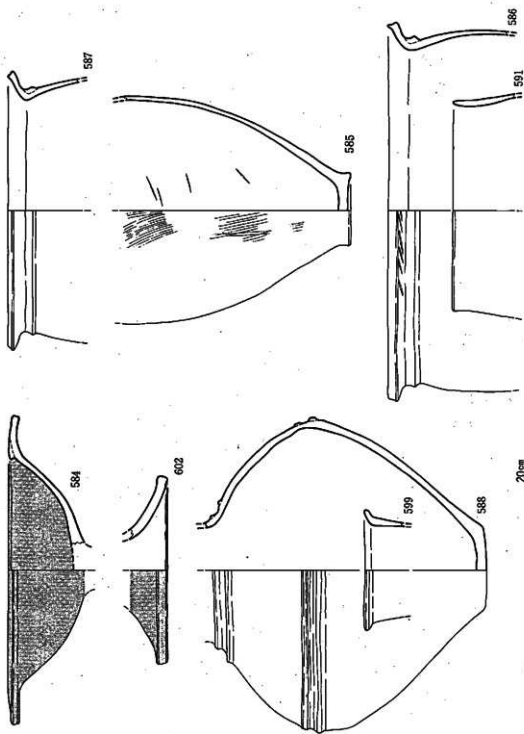


圖53 3号壑穴柱厝出土土器実測図(1/4)

82・18は片岩質の打製石斧製作過程のものと思われる。82は小谷出土。18は4号墳丘墓4号棺集石内出土。

80は玄武岩の打製片刃石斧である。80は18号貯蔵穴出土。表面は風化のためボロボロしている、基部は折損している。

⑥ 打製石鏃 (図版89、第111図)

8 (28号貯蔵穴出土)、78 (ピット169出土)、103 (1号溝中央出土) は、サヌカイト製石鏃である。平面形は正三角形・二等辺三角形の2タイプに分かれ、大きさは小型である。8は基部の抉れがややある。

9 (28号貯蔵穴出土)、39-1 (包含層出土)・99 (10号溝出土)、105 (17号溝出土) は、姫島産黒曜石製石鏃である。平面形は正三角形・二等辺三角形 (中型・小型) の3タイプに分かれ、特に105は二等辺三角形先端がとてもしarpで、基部の抉れも大きい。

⑦ その他

89は16号溝出土。白石と思われるが、一面のみ使用されており、残りは破面である。花崗岩である。

113は玄武岩製の凹石で、10号貯蔵穴出土。一面のみ窪みがある。

50・51はサヌカイト原石である。50は10号墳北東周溝中層出土。51は3号墳墳丘内出土。

39-2 (包含層出土) は姫島産黒曜石の剥片である。 (緒方)

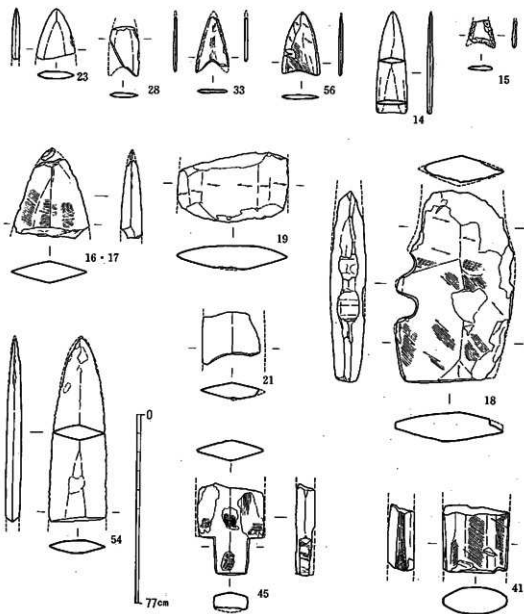
●磨製石器 (図版84、第54～56図)

① 磨製石鏃 (図版84、第54図14・23・28・33・56) 14は、1号土壇墓出土の完形品で、15のサヌカイト製打製石鏃と16・17の石戈らしき切先と共伴している。14は、全長5.4cm、最大幅1.65cm、最大厚が中心部で2.95mm、基部厚が2.15mmの大きさで、重さ3.05gある。中央部の最も厚味のある部分から先に鑿があり、下部を三角状に平坦面を形成して矢柄装着部とし、基部端がわずかに内湾するように仕上げている。全体に丁寧に研磨され、わずかな刃こぼれがあるだけの完形品。石材は、現状で灰淡褐色を呈しているものの、本来は灰色粘板岩か頁岩であろう。土壇墓被葬者の人体に刺っていたものと思われ、15の打製石鏃も同様であろう。

23は、1号貯蔵穴出土の切先で、大型の扁平磨製石鏃となる。先端のみに鑿を有し、大型であるために刃部も広いが、平坦部も広く厚味がある。大きさは、現状で長さ2.7cm、最大幅2.1cm、最大厚さ3.7mmである。石材は、灰褐色頁岩であろう。

28は、8号貯蔵穴出土の扁平磨製石鏃の再加工品である。石鏃は、切先と一方の逆利を欠損しているが逆利の欠損面が研磨され平坦な面をもっている。大きさは、現状で長さ2.6cm、最大厚さ2.4mmで、重さ1.25gある。石材は灰色粘板岩か頁岩と思われる。

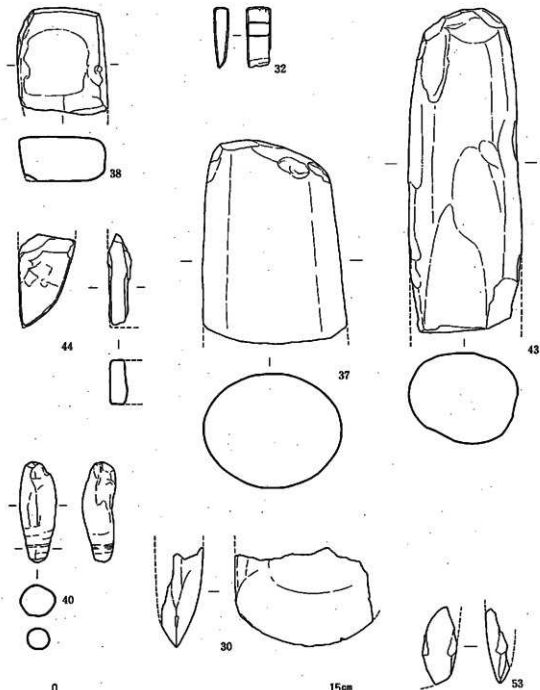
33は、27号貯蔵穴出土の扁平磨製石鏃で灰白色頁岩製と思われる。切先と逆利の一部を欠損しているが、原形をよく保っている。大きさは、復原長3.2cm、最大幅1.8cm、最大厚さ1.65mm、



第54図 B地区出土石器実測図①(1/2)

重さ0.9gある。

56は、8号墳の北東周溝から出土したが、発掘時に一部欠損した扁平磨製石鏃。部分的に研磨面がみだれて錆線が一定しないが、中央部を最も厚味に仕上げ、切先と矢柄装着部に向かってやや薄くしている。基部がわずかに内湾して面をもつ。大きさは、長さ3.35cm、最大幅1.98cm、



第55图 B地区出土石器实测图②(1/2)

最大厚さ2.45mm、重さ1.7gある灰色頁岩製。

⑥ 磨製石製武器（図版84-17~19、第54図16-19）ここでは、石戈、石矛・石剣の諸説のある幅広い大型磨製石製武器を扱う。

16・17は、14・15に共伴して1号土墳墓から出土し、16が17の欠損した切先部細片である。14・15と同様に、被葬者に刺さっていたもので、17自体が刺さった衝撃で折れ、さらにその先端が砕けたものが16であり、16の存在こそ人体に刺さっていた確証となるものであろう。16・17は、現状で長さ4.7cm、最大幅4cm、最大厚さ1.12cmの大きさで、幅と厚さがさらに大きくなることから、通例の石剣ではなく、石戈とすべきものであろう。いずれにせよ、幅広い石製武器の実戦に使用された例ということになる。石材は、良質の灰色頁岩と思われるもので、年輪状の縞模様がある。

18・19は、1号貯蔵穴から出土した別個体で、18が基部で一方に袈りが2ヶ所あり、19が鎗が明瞭でないが刃部を形成することから中央部付近の破片と思われる。18は、基部に刃がなく、袈りより上に刃部を作り、刃部から細身になるところから、欠損などによって再研磨され細くなったものと思われ、実用武器となる。18は、現状で長さ10.1cm、最大幅6.2cm、最大厚さ18.3cmの大きさで、灰黒色頁岩製と思われる。袈りの部分に何かの柄を装着すると思われるが、剣とした場合に片手で握れる幅ではない。この種の石製武器の基部の幅が6cm前後で、石剣の間部幅が5cm以上のものもなく、たとえ5cm以上あっても茎や柄の装着部は細くなっている。

19は、最大幅5.85cm、厚さ1.27cmで、灰褐色砂質粘板岩製と思われる。

⑦ 磨製石剣（図版84、第54図21・41・45・54）21は、幅3.4cm、厚さ9mmに復元できる石剣身部片で、灰褐色砂質粘板岩製と思われる。

41は、1区7号溝東側に混入していた石剣基部で、全体に丸味をもって刃部がない。最大幅3.5cm、厚さ1.41cmで、灰色頁岩製と思われる。

45は、P95から出土した鉄剣形石剣の基部で、現状で長さ4.75cm、間幅3.7cm、身厚さ1.03cm、茎長1.9cm、茎幅1.85cm、茎復原厚さ1.05cmの大きさ。身の鎗が茎にも通り、茎側面に経状繊維を巻いてずれないためのものか数条のキザミ目が残っている。石材は、淡褐色の頁岩と思われるが、表面が剝離しているところが多い。

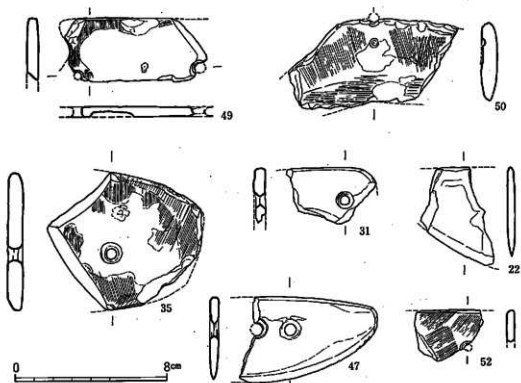
54は、9号墳北側小溝で出土した石剣である。現状で長さ9.75cm、最大幅3.1cm、最大厚さ7.9mmの大きさであるが、身の中央付近よりやや下で鎗がなくなり、平坦部を形成して厚さも次第に減少するところから、短身の茎をもたない型式の石剣と考える。石材は、灰黒色の頁岩と思われ、年輪状の縞模様がある。

（柳田）

58は粘板岩の磨製石剣片である。3号墳墳丘内出土。

（緒方）

⑧ 石のみ（図版85-32、第55図32）32は、19号貯蔵穴から出土した灰白色粘板岩製と思われる小型品。本品が、石のみなのか片刃石斧としてよいか判断できないが、小型であることから



第56図 B地区出土石器実測図③(1/2)

石のみとした。大きさは、長さ3.15cm、幅1.25cm、最大厚さ7.1mmで、表面の風化が著しい。

◎ 柱状片刃石斧(図版85、第55図38・44) 38は、1区2号溝の中央から出土した扶入石斧の頸部破片。大きさは、現状で長さ5.6cm、幅2.38cm、厚さ4.7cmで、欠損部の一部に扶部の名残がある。石材は、灰白色の粘板岩と思われる。

44は、2区P59から出土した刃部破片で、淡褐色の粘板岩製と思われる。

① 太型石斧(図版86-1、第55図30・37・43・53) 30・53が刃部で、37・43が基部の破片で、刃部片が蛇紋岩、基部が玄武岩と思われ、刃部と基部は形式が異なる石斧である。刃部片が蛇紋岩製で、片刃状を呈するところから縄文系で、37・43は弥生系太型蛤刃石斧となる。大きさは、37が現長10.65cm、最大幅7.6cm、厚さ6.1cm、43が現長17cm、最大幅5.9cm、厚さ4.8cmである。(榊田)

53・6・84・57・55は磨製石斧である。6(6号貯蔵穴出土)・53(表採)・57(3号墳北側集石内出土)・55(7号墳集石内出土)は玄武岩である。53・6・57は両刃、55は片刃である。(緒方)

◎ 穿孔具(図版85-40、第55図40) 40は、3号溝下層から出土した灰白色の砂質岩製穿孔具。

大きさは、長さ5.35cm、握り部径1.95cm、穿孔部径1.1cmである。時期は、不明。

⑥ 大型石庵丁 (図版86-1, 第56図31・35・49・50) これらは、いわゆる大型石庵丁と呼ばれている鉞形の大型摩製石器である。4点共に穿孔部を含む頭部の破片であるが、50のみ内湾する刃部を残し、35が鉞形石器ではなさそうである。出土遺構は、31が7号貯蔵穴、49がP209、50がP217、そして35がC地区貯蔵穴である。石材は、4点共に灰色系の頁岩と思われるが、35のみ粘板岩の可能性もある。全体に製品が粗製で、研磨が粗で、穿孔も中途のものが多い。しかも、破損品の再加工部分も見られる。

① 石庵丁 (図版86-1, 第56図22・47・52) 出土遺構は、22が1号貯蔵穴、47がP159、52が小谷の9である。石材は、22が灰黒色頁岩、47が淡褐色砂質頁岩、52が灰色頁岩と思われる。47は、現長7.2cm、最大幅4.55cm、厚さ5.05mmの大きさで、径約6mmの穿孔が2個ある。

(柳田)

① その他

73はピット145出土。磨製の石玉状を成している。表面がすべすべしている。玄武岩である。

(緒方)

3 C地区の調査記録

C地区では、落とし穴群、井戸、貯蔵穴、土塙、土塙墓、竪穴住居を検出した。C地区では中央部から北側で、祇川の段丘西側端に沿って古墳時代後期の群集墳が、そして弥生時代終末期の墳丘墓群が1グループ4～5基を1単位として5グループ程存在している。そして、それらの下層から先述の遺構が検出されている。

(1) 遺構

① 落とし穴

落とし穴は、C地区内で21基検出した。それらは北側、西側で群を成すようであるが、その他は分散的に存在する。

1号落とし穴(図版36-1、第57図、付図2) 1号落とし穴は、C地区南西側、2号落とし穴西側に位置する。旧番号は10号落とし穴である。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央に略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.2m、短軸0.74m、深さ0.73m、床面では長軸0.9m、短軸0.54m、中央ピットは径0.23m、深さ0.44mを測る。

2号落とし穴(図版36-1、第57図、付図2) 2号落とし穴は、C地区南西側に位置する。1号落とし穴が西側に隣接している。旧番号は11号落とし穴である。

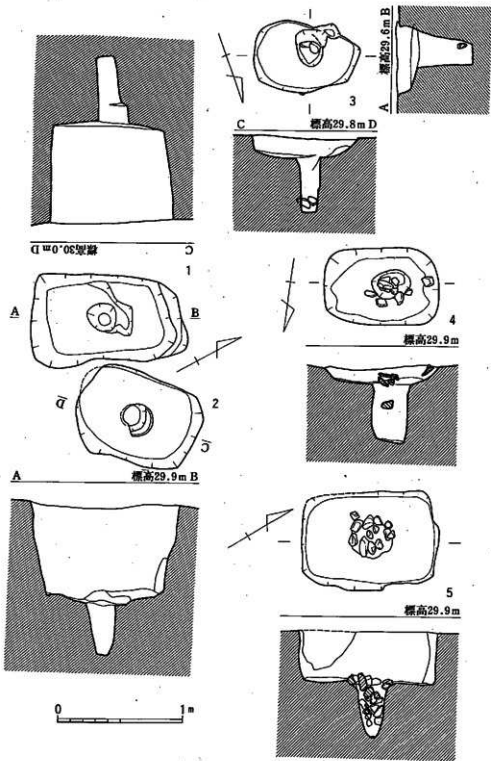
この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からはほぼ垂直に立ち上がる。底面中央には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.99m、短軸0.66m、深さ0.81m、床面では長軸0.9m、短軸0.62m、中央ピットは径0.25m、深さ0.52mを測る。ピットは2段掘りで、斜めに掘り込まれる。

3号落とし穴(第57図、付図2) 3号落とし穴は、C地区中央より南側、5号落とし穴南側に位置する。旧番号は12号落とし穴である。

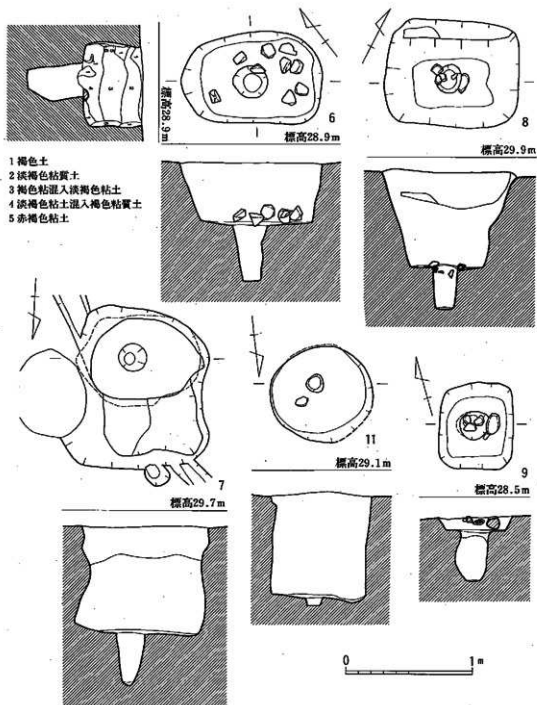
この遺構の床面は不整楕円形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面ほぼ中央には楕円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.84m、短軸0.55m、深さ0.17m、床面では長軸0.76m、短軸0.49m、中央ピットは長軸0.29m、短軸0.19m、深さ0.44mを測る。ピット内下層には礫石が落ち込んでいる。

4号落とし穴(第57図、付図2) 4号落とし穴は、C地区北西隅段落ち部分、6号落とし穴北側に位置する。旧番号は13号落とし穴である。

この遺構の床面は不整楕円形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央には楕円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.9m、短軸0.61m、深さ0.12m、床面では長軸



第57図 1号~5号落とし穴実測図(1/30)



第58圖 6～9号・11号落とし穴実測図(1/30)

0.75m、短軸0.49m、中央ピットは長軸0.3m、短軸0.22m、深さ0.48mを測る。ピット内上層及び中層には礫石が落ち込んでいる。

5号落とし穴(図版36-2、第57回、付図2) 5号落とし穴は、C地区中央、3号落とし穴北側に位置する。長軸西側で46号土壌墓に切られる。旧番号は14号落とし穴である。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.08m、短軸0.73m、深さ0.42m、床面では長軸1.1m、短軸0.67m、中央ピットは径0.32m深さ0.65mを測る。ピット内上層から中層には密に礫石が落ち込んでいる。

6号落とし穴(第58回、付図2) 6号落とし穴は、C地区北西隅段落ち部分、2号堅穴住居北側に位置する。旧番号は15号落とし穴である。

この遺構の床面は隅丸方形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。底面には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.12m、短軸0.72m、深さ0.49m、床面では長軸0.89m、短軸0.6m、中央ピットは径0.26m、深さ0.45mを測る。底面には礫石が散乱している。

7号落とし穴(第58回、付図2) 7号落とし穴は、C地区北側端段落ち部分に位置する。長軸北側は他の遺構で切られ、大きく削平を受けている。旧番号は16号落とし穴である。

この遺構の床面は不整形円形を呈し、底面からオーバーハングしながら立ち上がる。底面中央には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.03m、短軸0.72m、深さ0.83m、床面では長軸0.98m、短軸0.7m、中央ピットは径0.22m、深さ0.43mを測る。

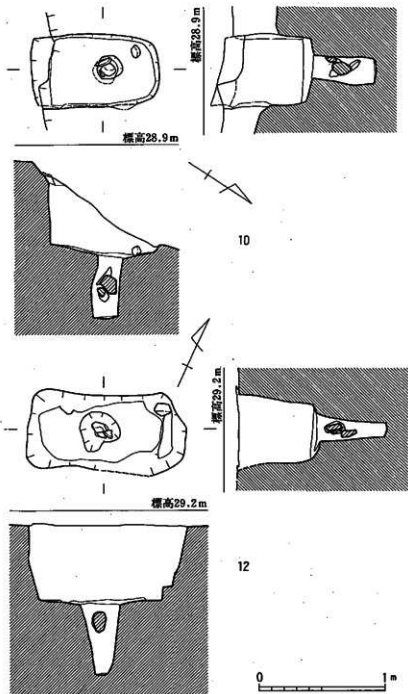
8号落とし穴(第58回、付図2) 8号落とし穴は、C地区中央、西側に位置する。旧番号は17号落とし穴である。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央に略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.04m、短軸0.84m、深さ0.76m、床面では長軸0.57m、短軸0.39m、中央ピットは径0.2m、深さ0.35mを測る。ピット周縁及びピット内上層には礫石が見られる。

9号落とし穴(図版37-1、第58回、付図2) 9号落とし穴は、C地区北西隅北側段落ち部分に位置する。旧番号は18号落とし穴である。

この遺構の床面は隅丸方形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面中央には楕円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.68m、短軸0.58m、深さ0.21m、床面では長軸0.48m、短軸0.46m、中央ピットは径0.23m、深さ0.4mを測る。床面及び底面からやや浮いて礫石がみられる。

10号落とし穴(第59回、付図2) 10号落とし穴は、C地区南西隅段落ち部分に位置する。長軸北側は大きく削平される。旧番号は19号落とし穴である。



第59図 10号・12号落とし穴実測図(1/30)

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面には略円形ビット1個がある。大きさは上面で長軸1.02+m、短軸0.58m、深さ0.61+m、床面では長軸0.83m、短軸0.5m、中央ビットは径0.2m、深さ0.49mを測る。ビット内中層には礫石がままとってみられる。

11号落とし穴(図版37-2、第58図、付図2) 11号落とし穴は、C地区北側端段落ち部分に位置する。旧番号は20号落とし穴である。

この遺構の床面は略円形を呈し、底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面中央には略円形ビット1個がある。大きさは上面で径0.8m、深さ0.85m、床面では径0.74m、長軸ビットは径0.13m、深さ0.07mを測る。底面には1個の礫石がみられる。

12号落とし穴(図版38-1、第59図、付図2) 12号落とし穴は、C地区東側、13号落とし穴に位置する。長軸南側はビットで削平される。旧番号は21号落とし穴である。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面には不整形ビット1個がある。大きさは上面で長軸1.25m、短軸0.59m、深さ0.62m、床面では長軸0.97m、短軸0.43m、中央ビットは径0.31m深さ0.55mを測る。ビット内中層には礫石がままとってみられる。

13号落とし穴(図版38-2、第60図、付図2) 13号落とし穴は、C地区中央より東側、1号土壌南側に位置する。長軸東側でビットと重複する。旧番号は22号落とし穴である。

この遺構の床面は不整形円形を呈し、底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面長軸主軸に沿って略円形ビット2個がある。大きさは上面で長軸1.16+m、短軸0.68m、深さ0.61m、床面では長軸0.95m、短軸0.55m、東側ビットは径0.2m、深さ0.5m、西側ビットは径0.17m、深さ0.43mを測り、ビット内中層には1個の礫石が見られる。

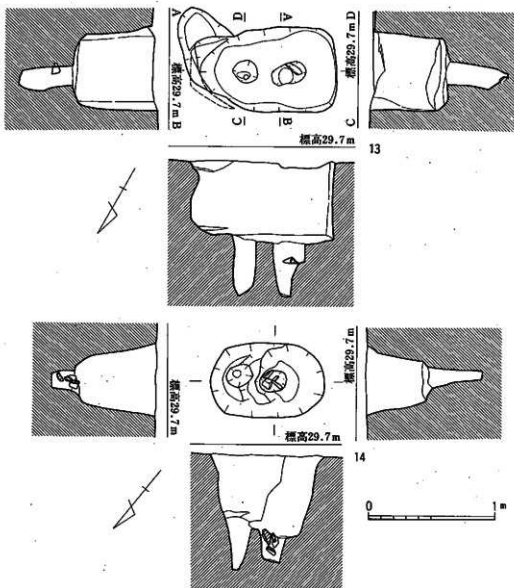
14号落とし穴(図版39-1、第60図、付図2) 14号落とし穴は、C地区中央より東側、1号落とし穴南側に位置する。旧番号は23号落とし穴である。

この遺構の床面は2段になり、それぞれに略円形ビットをもつ。その段差が0.07m程あることから、2つの落とし穴が重複していることも考えられるが、それにしては床面の広さが狭いことや下段のビットが全体の中央にあり、そのビット上層から中層にかけて礫石がままとってみられることから、落とし穴の再構築の所産と考えることとした。

下段の床面は楕円形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。大きさは上面で長軸0.91m、短軸0.57m、下段の深さ0.63m、上段の深さ0.50m下段の床面では長軸0.41m、短軸0.33m、下段ビットは径0.21m、深さ0.23m、上段ビットは径0.21m、深さ0.49mを測る。

15号落とし穴(図版39-2、第61図、付図2) 15号落とし穴は、C地区北東側、12号落とし穴北側に位置する。長軸西側は溝で削平される。旧番号は24号落とし穴である。

この遺構の床面は不整形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面には略円形ビット

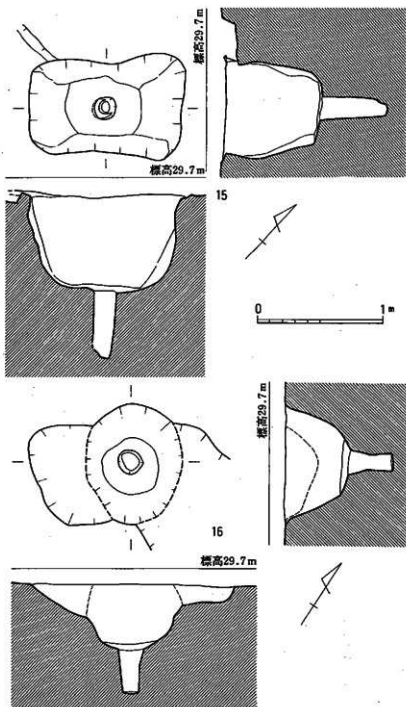


第50図 13号・14号落とし穴実測図(1/30)

ト1個がある。大きさは上面で長軸1.21m、短軸0.74m、深さ0.72m、床面では長軸0.6m、短軸0.45m、中央ビットは径0.16m、深さ0.54mを測る。

なお、落とし穴検出時には、中央から50×20cm程の大石とその周辺から10cm程の小石がまともてみられた。

16号落とし穴(図版40-1、第61図、付図2) 16号落とし穴は、C地区北側、19号落とし穴西側



第51図 15号・16号落とし穴実測図(1/30)

に位置する。長軸東西側は他の遺構で削平される。旧番号は25号落とし穴である。

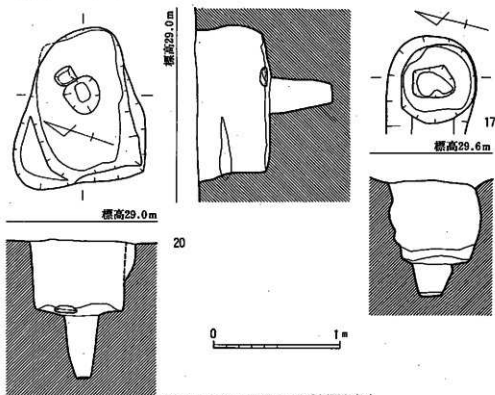
この遺構の床面は略円形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.96m、短軸0.76+m、深さ0.5m、床面では径0.45m、中央ピットは径0.19m、深さ0.31mを測る。

17号落とし穴(第62図、付図2) 17号落とし穴は、C地区中央より南側に位置する。長軸西側は他の遺構で削平される。旧番号は26号落とし穴である。

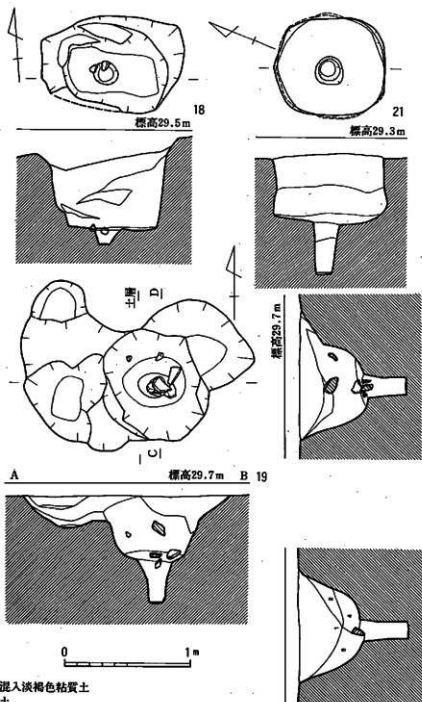
この遺構の床面は不整長方形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面には楕円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.21m、短軸0.82m、深さ0.58m、床面では長軸1.08m、短軸0.65m、中央ピットは長軸0.3m、短軸0.28m、深さ0.5mを測る。ピット周縁には長さ25cm程の平石がおかれる。

18号落とし穴(図版40-2、第63図、付図2) 18号落とし穴は、C地区西側5号方形周溝東側に位置し、長軸南側は他の遺構で削平される。旧番号は27号落とし穴である。

この遺構の床面は不整長方形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.13m、短軸0.77+m、深さ0.73m、床面では長軸0.7m、短軸0.32m、中央ピットは径0.2m、深さ0.11mを測る。ピット上面には礫石が2個み



第62図 17号・20号落とし穴実測図(1/30)



第63圖 18号-19号・21号落とし穴実測図(1/30)

られる。

19号落とし穴(図版41-1、第63図、付図2) 19号落とし穴は、C地区北側、16号落とし穴東側に位置する。長軸東西側は他の遺構(不整形土域10など)で削平される。旧番号は28号落とし穴である。

この遺構の床面は略円形を呈し、底面からやや外傾して立ち上がる。底面には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.92+m、短軸0.57+m、深さ0.54 m、床面では径0.59m、中央ピットは径0.28m、深さ0.35mを測る。ピット上面には礫石がまるとまてみられる。また、床面から20cm程上にも礫石が2個みられる。

20号落とし穴(図版42-1、第62図、付図2) 20号落とし穴は、C地区南側、3号貯蔵穴南側に位置する。長軸西側は他の遺構で削平される。旧番号は29号落とし穴である。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からは垂直に立ち上がる。底面には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.13+m、短軸0.75+m、深さ0.57m、床面では長軸1.01m、短軸0.68m、中央ピットは径0.28m、深さ0.49mを測る。ピット周縁には礫石がみられる。

21号落とし穴(図版41-2、第63図、付図2) 21号落とし穴は、C地区南側、2号貯蔵穴北側に位置する。旧番号は30号落とし穴である。

この遺構の床面は略円形を呈し、底面からやや内傾しながら立ち上がる。底面には略円形ピット1個がある。大きさは上面で径0.88m、深さ0.51m、床面では径0.83m、中央ピットは径0.2m、深さ0.41mを測る。

② 井戸

井戸は中央と南側にまともるように計8基検出している。

1号井戸(図版42-2、第64図、付図2) 1号井戸は、C地区中央より南側、2号落とし穴南東側に位置する。

この遺構の上面は略円形を呈す。大きさは上面で径1.28m、深さ1.82mを測る。

2号井戸(図版43-1、第64図、付図2) 2号井戸は、C地区中央に位置する。

この遺構の上面は略円形を呈す。大きさは上面で径0.89m、深さ1.27mを測る。

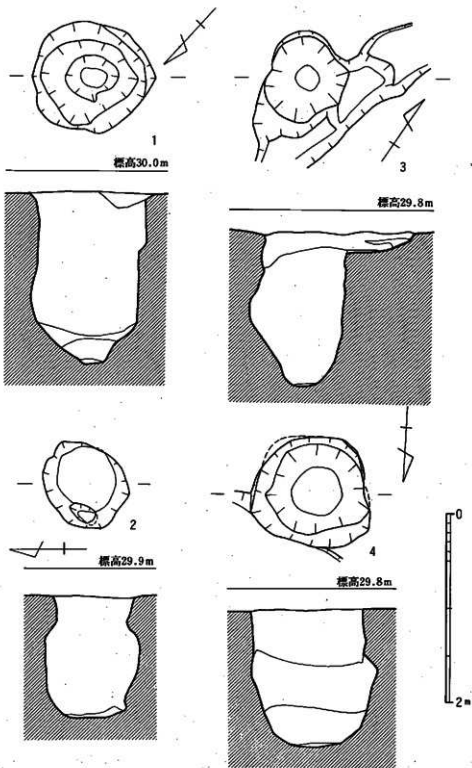
3号井戸(図版43-2、第64図、付図2) 3号井戸は、C地区中央より西側、4号井戸西側に位置する。遺構周辺を他の遺構に切られる。

この遺構の上面は略円形を呈す。大きさは上面で径0.81m、深さ1.6mを測る。

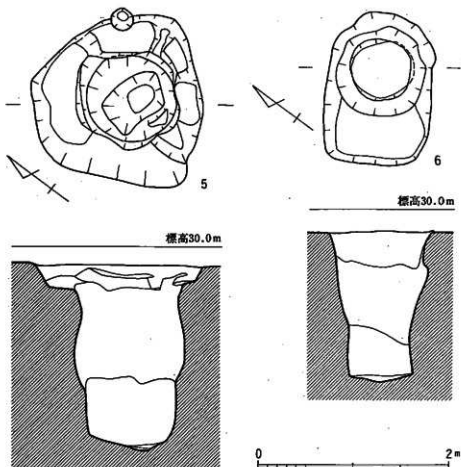
4号井戸(図版44-1、第64図、付図2) 4号井戸は、C地区中央、2号井戸北側に位置する。遺構周辺を3号墓に切られる。

この遺構の上面は略円形を呈す。大きさは上面で径1.26m、深さ1.43mを測る。

5号井戸(第65図、付図2) 5号井戸は、C地区南側、6号井戸南側に位置する。遺構周辺を



第64图 1号~4号井尸实测图(1/40)



第65図 5号・6号井戸実測図(1/40)

他の遺構（不整形土痕1）に切られる。旧番号は10号井戸である。

この遺構の上面は略円形を呈す。大きさは上面で径1.15+m、深さ1.7+mを測る。

6号井戸（図版44-2、第65図、付図2） 6号井戸は、C地区南側、5号井戸北側に位置する。

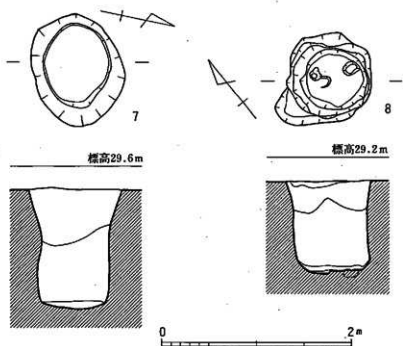
遺構周辺を他の遺構に切られる。旧番号は11号井戸である。

この遺構の上面は略円形を呈す。大きさは上面で径0.91+m、深さ1.19+mを測る。

7号井戸（第66図、付図2） 7号井戸は、C地区南側端に位置する。旧番号は12号井戸である。

この遺構の上面は略円形を呈す。大きさは上面で径1.13m、深さ1.24mを測る。

8号井戸（図版45-1、第66図、付図2） 8号井戸は、C地区南西側に位置する。旧番号は13号



第66図 7号・8号井戸実測図(1/40)

井戸である。

この遺構の上面は略円形を呈す。大きさは上面で径0.82m、深さ0.95mを測る。床面には径10~15cm程のピットが3個ある。

③ 貯蔵穴

貯蔵穴は、調査区北側及び南側で分散的に検出した。周辺では同時期の竪穴住居の検出はなかった。

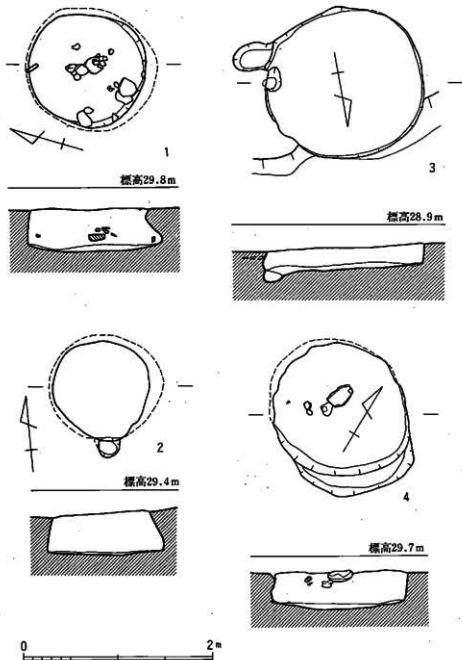
1号貯蔵穴(第67図、付図2) 1号貯蔵穴は、C地区1号竪穴住居北側、3号方形周溝墓内に位置する。旧番号は2号貯蔵穴である。

この遺構の床面は略円形を呈し、底面からややオーバーハングしながら立ち上がる。底面に土器や石斧が中層から出土した。

大きさは上面で径1.17m、深さ0.44m、床面では径1.28mを測る。

2号貯蔵穴(図版46-1、第67図、付図2) 2号貯蔵穴は、C地区南側、21号落とし穴南側に位置する。旧番号は3号落とし穴である。

この遺構の床面は略円形を呈し、底面からやや内傾しながら立ち上がる。



第67圖 1号~4号貯藏穴実測図(1/40)

大きさは上面で径1.01m、深さ0.43m、床面では径1.19mを測る。

3号貯蔵穴 (図版46-2、第67図、付図2) 3号貯蔵穴は、C地区北西側に位置する。北側は10号墳削溝に切られる。旧番号は4号である。

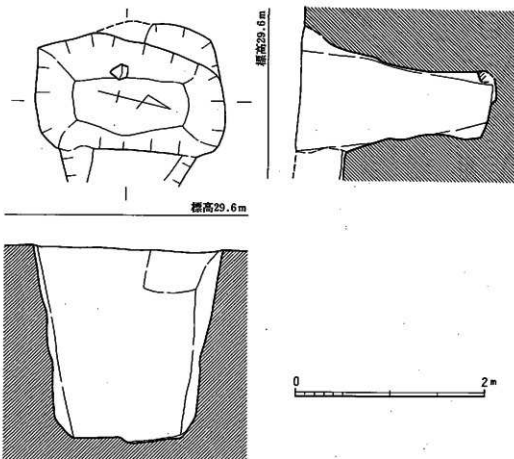
この遺構の床面は略円形を呈し、底面からやや内傾しながら立ち上がる。

大きさは上面で径1.67m、深さ0.21m、床面では径1.63mを測る。

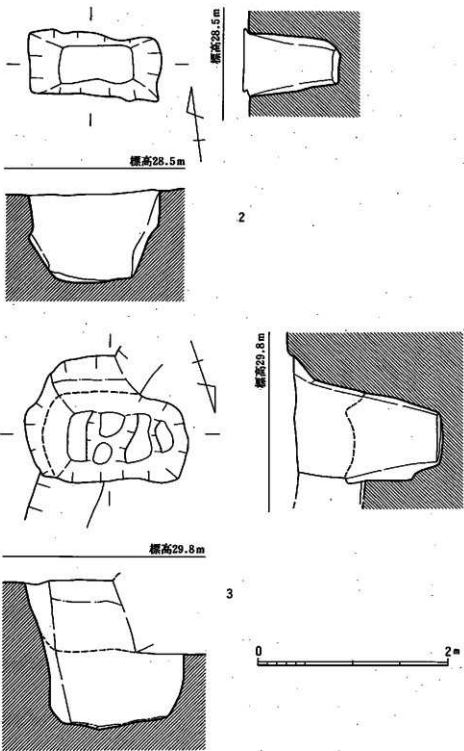
4号貯蔵穴 (第67図、付図2) 4号貯蔵穴は、C地区北西側に位置する。南東側は他の土壌に切られる。土器や石製品は各層位 (石鏃は下層、石包丁は中層) から出土している。旧番号は40号落とし穴である。

この遺構の床面は略円形を呈し、底面からやや内傾しながら立ち上がる。

大きさは上面で径1.39m、深さ0.39m、床面では径1.4mを測る。



第68図 1号壑穴実測図(1/40)



第69回 2号・3号竖穴実測図(1/40)

④ 竖穴

竖穴は調査区西側端に沿って、計3基を検出した。

1号竖穴(第68図、付図2) 1号竖穴は、C地区中央より南西側、10号落とし穴東側に位置し、2号墓に切られる。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸2.01m、短軸1.8m、深さ1.98m、床面では長軸1.22m、短軸0.56mを測る。

2号竖穴(図版45-2、第69図、付図2) 2号竖穴は、C地区北西隅段落ち部分に位置する。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.33m、短軸0.66m、深さ0.98m、床面では長軸0.78m、短軸0.4mを測る。

3号竖穴(第69図、付図2) 3号竖穴は、C地区中央より西側、段落ち部分に位置する。長軸西側では他の遺構に大きく削平される。

この遺構の床面は不整長方形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。大きさは上面で長軸1.5m、短軸0.92m、深さ1.52m、床面では長軸1.12m、短軸0.52mを測る。

⑤ 土塚

土塚として捉えたものはC地区北東側に集中する。

1号土塚(第70図、付図2) 1号土塚は、C地区北東側、1号竖穴住居南側にある。

この遺構の床面は楕円形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。

大きさは上面で長軸0.96m、短軸0.48m、深さ0.31m、床面では長軸0.78m、短軸0.35mを測る。上層には長さ20cm程の大石が5個固まっている。

2号土塚(第70図、付図2) 2号土塚は、C地区北東側、1号土塚東側に位置する。

この遺構の床面は隅丸方形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。

大きさは上面で長軸0.82m、短軸0.68m、深さ0.18m、床面では長軸0.68m、短軸0.57mを測る。上層には長さ10cm程の大石が4個見られる。

3号土塚(第71図、付図2) 2号土塚は、C地区北東側、1号土塚東側に位置する。

この遺構の床面は隅丸方形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。

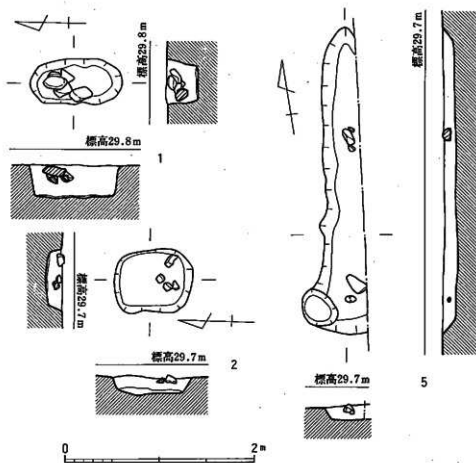
大きさは上面で長軸0.82m、短軸0.68m、深さ0.18m、床面では長軸0.68m、短軸0.57mを測る。上層には長さ10cm程の大石が4個見られる。

4号土塚(第71図、付図2) 2号土塚は、C地区北東側、1号土塚東側に位置する。

この遺構の床面は隅丸方形を呈し、底面からやや外傾しながら立ち上がる。

大きさは上面で長軸0.82m、短軸0.68m、深さ0.18m、床面では長軸0.68m、短軸0.57mを測る。上層には長さ10cm程の大石が4個見られる。

5号土塚(第70図、付図2) 2号土塚は、C地区北東側、1号土塚東側に位置する。



第70図 1号・2号・5号土坑実測図(1/40)

この遺構の床面は隅丸方形を呈し、床面からやや外傾しながら立ち上がる。

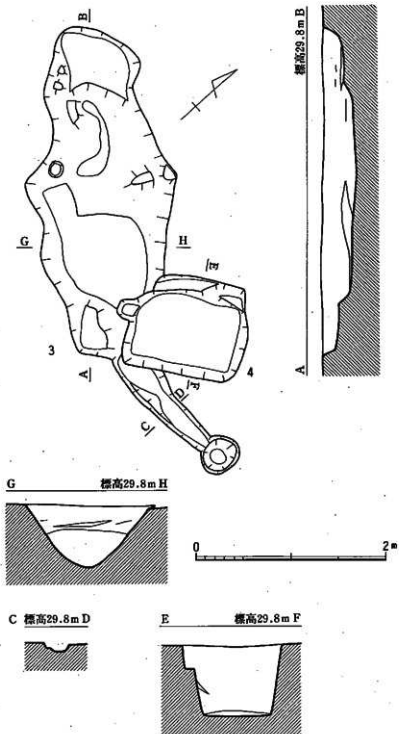
大きさは上面で長軸0.82m、短軸0.68m、深さ0.18m、床面では長軸0.68m、短軸0.57mを測る。上層には長さ10cm程の大石が4個見られる。

⑥ 竪穴住居

C地区では北東隅に集中して、計3基の竪穴住居を検出した。住居群は東側区域外に伸びていくようである。

1号竪穴住居 (図版47・8、第72図、付図2) 1号竪穴住居は、C地区北東側に位置し、北側で3号方形周溝墓周溝のため大きく削平を受ける。

この遺構は2本柱の主柱穴、炉跡、屋内土塊、ベット状遺構をもつ長方形プランのものである。壁体はほとんど削平されていたが、床面には10~20cm程の石や土器が多数見られた。



第71圖 3号・4号土坑実測図(1/40)

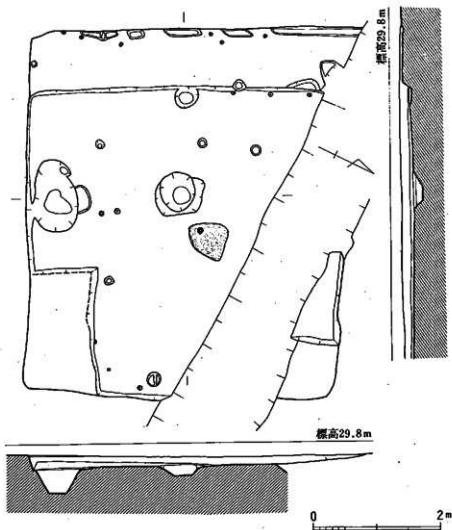
その大きさは残存南北長5.3m、残存東西長5.6mである。また、ベット状遺構は東側壁及び西側コーナーに付設し、残りの良い東側では、幅90cm、高さ32cmを測る。さらに、ベット状遺構壁体下には、幅20cm、深さ4cm程の溝が走る。

炉跡は、平面プラン略円形を呈し、径58cm、深さ16cmを測る。

2本柱は1本のみ確認できた。その大きさは、P.1が径37cm、深さ6cm、またP.1-炉跡間距離は1.55mを測る。

屋内土壌は、平面プラン不整形円形を呈し、長軸110cm、短軸70cm、深さ40cmを測る。

2号竪穴住居(図版49-1、第73図、付図2) 2号竪穴住居は、C地区北東側に位置する。東側



第72図 1号竪穴住居実測図(1/60)

で3号方形周溝墓、北側で段落ちのため大きく削平を受ける。

この遺構は、2本柱の主柱穴、炉跡、ベット状遺構をもつ長方形プランのものである。壁体はほとんど削平されていたが、床面には炭化材や土器が多数見られた。

その大きさは残存南北長3m、残存東西長2.9mである。また、ベット状遺構は北側壁及び東側コーナーに付設し、残りの良い北側では、幅75cm、高さ10cmを測る。

炉跡は、平面プラン略円形を呈し、径55cm、深さ14cmを測る。

2本柱の大きさは、P1が径20cm、深さ21cm、P2が径40cm、深さ16cm、またP1-P2間距離は3.05mを測る。

3号竪穴住居(図版49-2、第74図、付図2) 3号竪穴住居は、C地区北東隅に位置し、東側は区域外に伸びる。この遺構は南側で3号方形周溝墓のため削平を受ける。

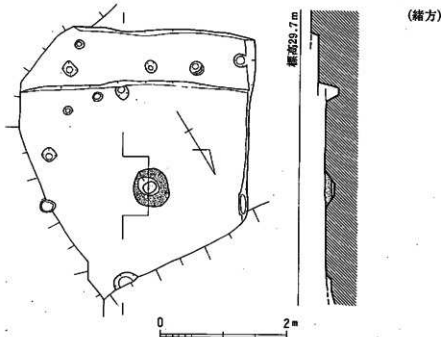
この遺構は、炉跡、屋内土壇、ベット状遺構をもつ長方形プランのものである。

その大きさは残存南北長3.6m、残存東西長3.4mである。また、ベット状遺構は西側壁に付設し、残りの良い西側では、幅97cm、高さ8cmを測る。さらに、残存する壁体下には、幅20cm、深さ6cm程の溝が走る。

炉跡は、平面プラン略円形を呈し、径54cm、深さ12cmを測る。

主柱穴は確認できなかった。

屋内土壇は、平面プラン不整形円形を呈し、長軸55cm、短軸42cm、深さ22cmを測る。



第73図 2号竪穴住居実測図(1/60)

(2) 遺物

① 土器

4号貯蔵穴出土土器 (第75回)

693は小型鉢である。調整は内外面共に磨研のようである。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は黄橙褐色である。器高8cm、口径9.6cm、底径は7.3cmを測る。

695はやや突出気味の底部片である。調整は内外面共に摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は暗橙褐色である。底部は9.1cmを測る。

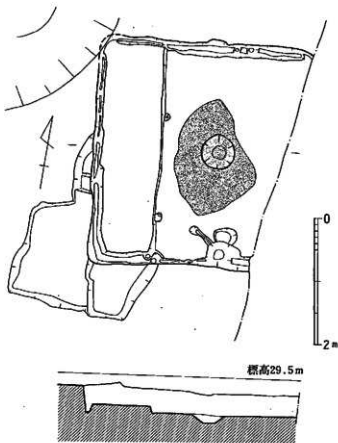
696は如意形口縁をもつ甕である。口縁端部下方には刻み目をめぐらす。また口縁端部から約5cm下方に三角刻み

目凸帯を貼付する。さらにその間にはほぼ等間隔にタテ方向に2条1組三角刻み目凸帯を貼付する。しかし、この2条1組の三角刻み目凸帯のそれぞれの間隔は一致していない。調整は外面タテハケ、口縁部及び凸帯部ヨコナデ、内面全体的に黒変していてよくわからない。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は黄茶褐色を呈する。復元口径は39cmを測る。

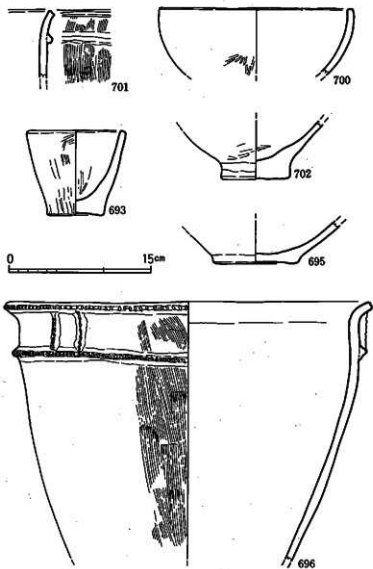
700は口縁端部がやや内弯する椀である。二次加熱により赤変している。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は黄茶褐色を呈する。復元口径は20.7cmを測る。

701は体部から直に立ち上がり、口縁端部近くで外反するものである。屈曲部分にはやや垂れ気味の凸帯を貼付する。調整は外面タテハケ、凸帯部分ヨコナデである。調整は摩滅が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は黄茶褐色を呈する。

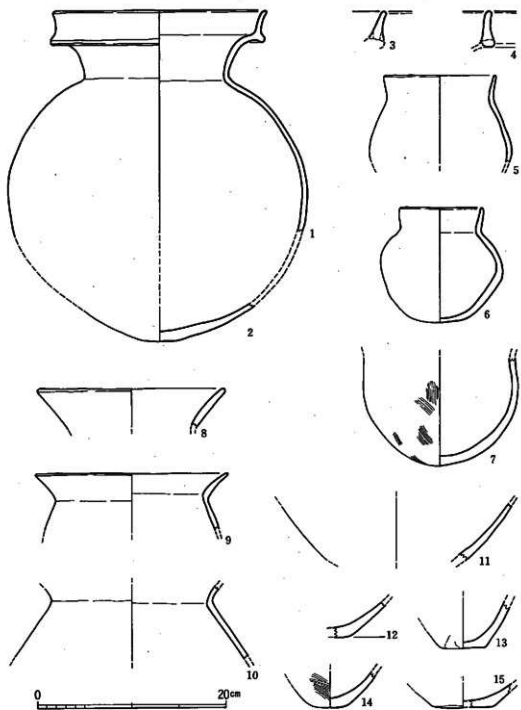
702はやや突出気味の底部片である。二次加熱により赤変している。調整は内外面共に磨研



第74図 3号貯蔵穴住居実測図(1/60)



第75图 4号貯藏穴出土土器实测图(1/4)



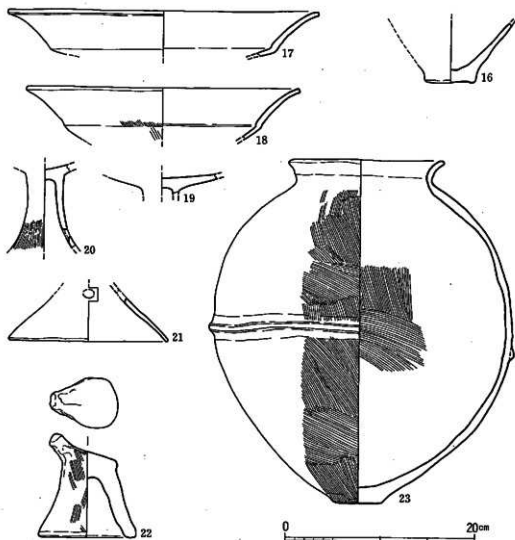
第76图 1号竖穴住居出土土器实测图①(1/4)

である。焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は黄茶褐色である。底径は7.3cmを測る。

壺穴住居出土土器 (同版82、第76～78図)

1号壺穴住居出土土器 (第76・77図1～23)

1～4は、複合口縁壺で、1・2がほぼ完形に復元することができるが、3・4が別個体。1・2は、口径22.5cm、器高約35cm、頸部径15.5cm、胴部最大径31.8cm、底径4cmの大きさ。



第77図 1号壺穴住居出土土器実測図②(1/4)

全体に器面が荒れて、調整が不明なところが多いが、胴部に粘土粒状の凹凸と外面にミガキ状のナデが見られる。内面の頸部下に指圧痕もある。胎土には、雲母・赤褐色粒・角閃石などの細砂・粗砂を多く含む。色調は、全体に暗褐色を呈する。

5-7は、短頸壺であるが、粗製に近く、全体に器面が摩滅して調整が不鮮明である。5が口径11.6cm、胴径15cm、6が口径8.7cm、器高12cm、胴径13cm、7が胴径16.2cmの大きさである。6は胎土には、細砂・粗砂が多く含まれ、褐色を呈している。

8-11は、甕と思われる破片で、9に外反する口縁に特徴があるが、器面が摩滅して調整法が不明。9の口径は、20.4cmの大きさ。

12-16は底部破片であるが、16のみ弥生中期以前のもので混入品である。12-15は、一部平底を残すが、弥生後期後半の甕と思われる。

17-21は高杯で、それぞれ別個体であるが、杯部・脚部があり同一型式で同一時期のものである。杯部の外反が長くなりはじめ、脚部裾のわずかな内湾と短脚が特徴であろう。

22は突起付支脚で、器高11cm、裾部径10.3cmの大きさ。全体に器肉が厚く、胎土に雲母・角閃石などの細砂をかなり含む、暗茶褐色を呈する。

23は、割合口径の小さな甕で、口径の外反や底部の平底に古式を残すが、胴部突帯が形式的で低く蛇行してめぐっている。大きさは、口径16.3cm、器高36.2cm、胴部最大径32.2cm、底径5.3cmである。調整は、ハケ目が残っているところ以外が器面が剝離している。胎土には、雲母・角閃石・赤褐色粒・石英などの細砂を多く、粗砂を若干含む、暗茶褐色系を呈している。土器の時期は、弥生後期後半から終末である。

2号豊穴住居出土土器 (第78図24-26) 24は、床面直上から出土した粗製甕で、口径19cmの大きさ。内面に粘土雜目が残る粗い調整で、外面も粗いハケ目仕上げとなっている。25も24と同様に湾曲した口縁部である。24は、胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒などの細砂を多量に含む、黄褐色から褐色を呈している。

26は、器壁が厚味のある甕胴部で、内外面にハケ目調整が残っている。胎土には、雲母・角閃石・赤褐色粒をかなり含む、褐色を呈している。土器の時期は、弥生終末である。

3号豊穴住居出土土器 (第78図27-33) 27は埋土下層、28が屋内土壌、他が埋土中出土で、31-33は時期が古い混入品である。27は、複合口縁壺の頸部以上で、口径17.4cmの大きさ。口縁部立上がりの外反と頸部の厚味が特徴となる。胎土には、雲母・赤褐色粒などの細砂をやや含む、黄褐色を呈している。28は、外反する甕の口縁と思われる。

29は、甕の胴部下半と思われるが、尖り底に近い平底を有するところから複合口縁壺の底部の可能性もある。内外面にハケ目調整があり、胎土に雲母・赤褐色粒を多量に含む、褐色を呈するが、2次加熱のために外面底部付近が赤変している。

30は、口径12cmの粗製鉢形土器で、製塩土器の可能性がある。全体に粘土雜目と指圧痕があ

り、粘土に雲母・赤褐色粒などを多量に含み、褐色をしている。

31は、弥生前期後半の甕肩部で外面に綾杉紋が施されている。32は、前期末の甕底部。33は、中期後半の甕口縁部である。3号竪穴住居の土器は、弥生後期後半から終末である。(柳田)

② 石製品 (第108・111回)

59は2号貯蔵穴出土。中間仕上げの砥石である。両面のみ使用し、側面は破面となる。ややザラザラした砂岩質である。

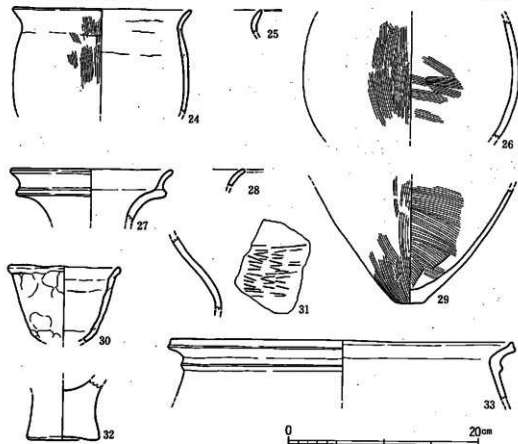
66は4号貯蔵穴出土。両端は打ち欠きによる溝がある。砂岩系である。

65 (調査区北端表採)、63 (1号竪穴出土)、38 (不整形スリバチ状遺構出土)、41 (4号貯蔵穴出土)は石鏃で、姫島産黒曜石である。平面形は正三角形・二等辺三角形(大・中・小型)の4タイプに分かれ、特に41は二等辺三角形の大型で、基部の抉れが大きい。

64は表採の石核で、姫島産黒曜石である。

60は石鏃で、2号竪穴住居ピット1出土の腰岳産黒曜石である。平面形が二等辺三角形の中型で、基部の抉れが大きい。

(緒方)



第78回 2号・3号竪穴住居出土土器実測図(1/4)



C地区 発掘調査風景

4 D地区の調査

D地区では、落とし穴群と竪穴住居、溝、ピットなどを検出した。東西南北には細い溝が走るが、大半は畝状のものである。そのほか、墳墓周囲溝になると思われるものもある。遺存する遺構は上面の削平が著しいため原状が把握しにくい。

(1) 遺構

① 落とし穴

落とし穴は、2基～3基程が1グループにまとまるように配置されている。北西から南東にかけての台地の周縁に位置するようである。

1号落とし穴(図版52-1、第79図、付図2) 1号落とし穴は、D地区南側、2号竪穴住居西側に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、床面からやや外傾しながら立ち上がる。床面中央から西側には楕円形ピットが1個ある。大きさは上面で長軸0.99m、短軸0.56m、深さ0.65m、床面では長軸0.58m、短軸0.23m、ピットは長軸0.23m、短軸0.18m、深さ0.33mを測る。ピット内上層から中層に礫石がみられる。

2号落とし穴(図版52-2、第79図、付図2) 2号落とし穴は、D地区中央に位置する。東西に1号溝が走り削平を受ける。

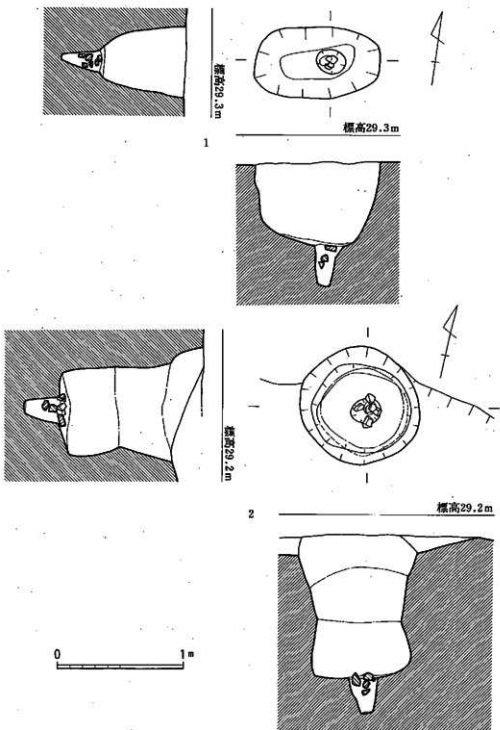
この遺構の床面は略円形を呈し、床面からややオーバーハングしながら、その後外傾して立ち上がる。床面中央には略円形ピットが1個ある。大きさは上面で径0.94m、深さ1.14m、床面では径0.71m、ピットは径0.28m、深さ0.3mを測る。ピット周縁及びピット内上層に礫石がみられる。

3号落とし穴(図版53-1、第80図、付図2) 3号落とし穴は、D地区東側、1号溝南側に位置する。

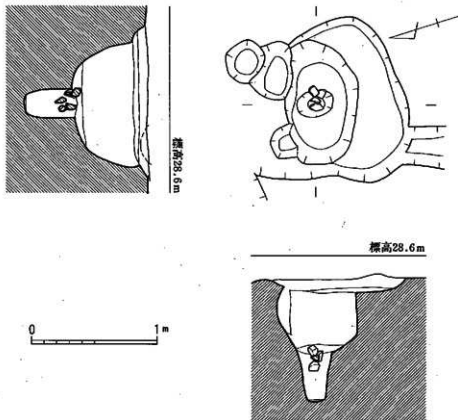
この遺構の床面は楕円形を呈し、床面からやや外傾しながら立ち上がる。床面中央には楕円形ピットが1個ある。大きさは上面で長軸0.97m、短軸0.56m、深さ0.5m、床面では長軸0.68m、短軸0.42m、ピットは長軸0.3m、短軸0.21m、深さ0.42mを測る。ピット内上層に礫石がみられる。

4号落とし穴(図版53-2、第81図、付図2) 4号落とし穴は、D地区中央からやや東側に位置する。南北に7号溝が走り削平を受ける。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、床面からやや外傾しながら立ち上がる。床面中央には楕円形ピットが1個ある。大きさは上面で長軸1.25m、短軸0.62m、深さ0.45m、床面では長



第79図 1号・2号落とし穴実測図(1/30)



第80図 3号落とし穴実測図(1/30)

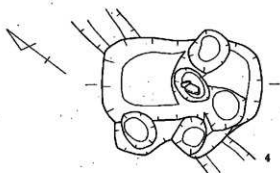
軸1m、短軸0.41m、ピットは長軸0.32m、短軸0.25m、深さ0.49mを測る。ピット内中層に礫石がみられる。

5号落とし穴(図版54-1、第81図、付図2) 5号落とし穴は、D地区南側、北側に2号竪穴住居が位置する。

この遺構の床面は長楕円形を呈し、床面からやや外傾しながら立ち上がる。床面中央から南側には略円形ピットが1個ある。大きさは上面で長軸1.62m、短軸0.48m、深さ0.32m、床面では長軸1.45m、短軸0.4m、ピットは径0.26m深さ0.63mを測る。ピット内上層から中層にかけて礫石がまとまってみられる。

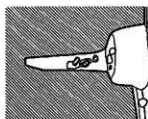
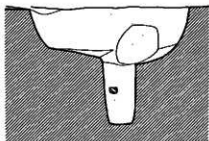
6号落とし穴(第82図、付図2) 6号落とし穴は、D地区中央から西側、段落ち付近に位置する。

この遺構の床面は略円形を呈し、床面からややオーバーハングしながらほぼ垂直に立ち上が

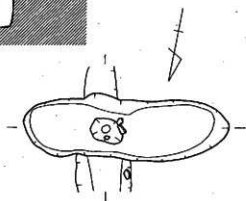


4

標高28.6m

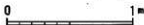
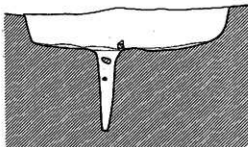


標高29.2m

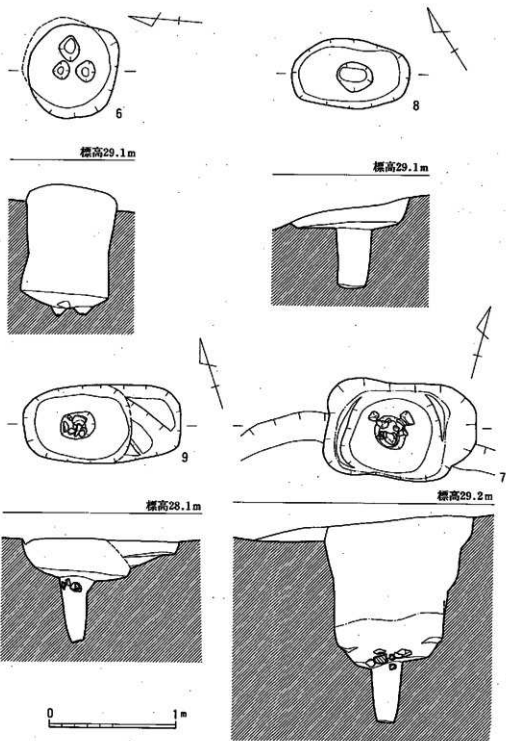


5

標高29.2m



第81図 4号・5号落とし穴実測図(1/30)



第82図 6号~9号墓とし穴実測図(1/30)

る。床面主軸上及びその脇には略円形ピットが計3個ある。大きさは上面で長軸0.64m、深さ0.97m、床面では径0.68m、中央北側ピットは径0.13m、深さ0.07m、中央南側ピットは径0.16m、深さ0.06m、脇のピットは径0.15m、深さ0.04mを測る。

7号落とし穴(図版54-2、第82図、付図2) 7号落とし穴は、D地区中央から西側、6号落とし穴北側に位置する。長軸南側は1号溝で削平されている。

この遺構の床面は不整形を呈し、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.17m、短軸0.75+m、深さ1.13m、床面では長軸0.6m、短軸0.58m、中央ピットは径0.22m、深さ0.48mを測る。ピット内上層及び周縁には礫石がまとまってみられる。

8号落とし穴(図版55-1、第82図、付図2) 8号落とし穴は、D地区南西隅に位置する。長軸西側は段落ちで削平されている。

この遺構の床面は楕円形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.93m、短軸0.55m、深さ0.2m、床面では長軸0.8m、短軸0.42m、中央ピットは径0.27m、深さ0.47mを測る。

9号落とし穴(図版56、第82図、付図2) 9号落とし穴は、D地区南東隅、調査区境界付近に位置する。

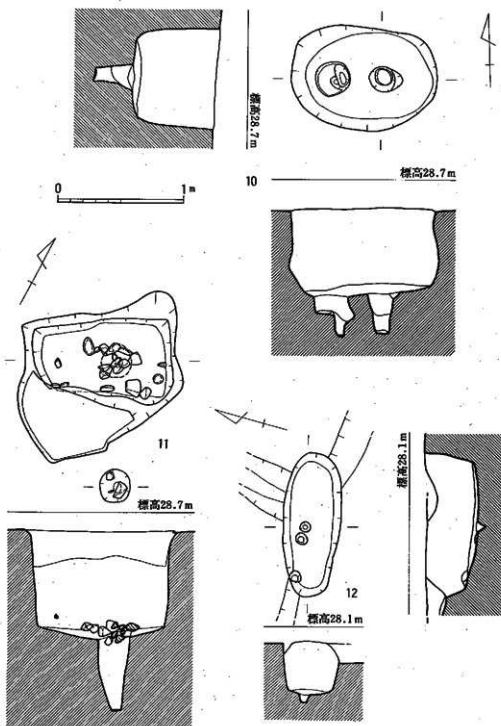
この遺構の床面は楕円形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.85+m、短軸0.62m、深さ0.3m、床面では長軸0.73m、短軸0.51m、中央ピットは径0.27m、深さ0.5mを測る。ピット内上層には礫石がまとまってみられる。

10号落とし穴(図版55-2、第83図、付図2) 10号落とし穴状遺構は、D地区南側、5号落とし穴西側に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面主軸上に沿って略円形ピット2個がある。大きさは上面で長軸1.13m、短軸0.83m、深さ0.68m、床面では長軸1m、短軸0.68m、東側ピットは径0.2m、深さ0.68m、西側ピット(2段掘りになり、東側に側面中層が挟れていることから杭の抜き取りがあったと思われる)は径0.27m、深さ0.32mを測る。底面から15cm程上から石炭1点が出土した。

11号落とし穴(図版57、第83図、付図2) 11号落とし穴は、D地区南西側、1号落とし穴に位置する。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個がある。大きさは上面で径1.13m、短軸0.7+m、深さ0.87m、床面では長軸0.97m、短軸0.56m、中央ピットは径0.24m、深さ0.58mを測る。ピット周縁には礫石がまとまってみられる。



第33図 10号~12号落とし穴実測図(1/20)

12号落とし穴 (図版58-1、第83図、付図2) 12号落とし穴は、D地区中央から東側に位置する。遺構周縁部では1号溝の削平を受けている。

この遺構の床面は長楕円形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央及びその脇には略円形ピット2個がある。大きさは上面で長軸1.15m、短軸0.45m、深さ0.39m、床面では長軸1.01m、短軸0.44m、中央ピットは径0.08m、深さ0.07m、他のピットは径0.1m、深さ0.06mを測る。

13号落とし穴 (図版58-2、第84図、付図2) 13号落とし穴は、D地区北側、4号竪穴住居内に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.13m、短軸0.73m、深さ0.98m、床面では長軸0.88m、短軸0.5m、中央ピットは径0.22m、深さ0.5mを測る。

14号落とし穴 (図版59-1、第84図、付図2) 14号落とし穴は、D地区西側、6号落とし穴南側に位置する。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面中央には楕円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.04m、短軸0.74m、深さ0.68m、床面では長軸0.86m、短軸0.72m、中央ピットは長軸0.33m、短軸0.26m、深さ0.44mを測る。なおピットは2段掘りされており、杭の抜き取りがあったと思われる。

15号落とし穴 (図版59-2、第85図、付図2) 15号落とし穴は、D地区北西側、4号竪穴住居西側に位置する。

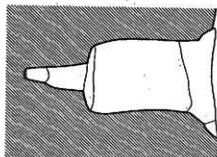
この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面中央には楕円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.92m、短軸0.75m、深さ0.79m、床面では長軸0.81m、短軸0.66m、中央ピットは長軸0.31m、短軸0.25m、深さ0.47mを測る。

16号落とし穴 (第85図、付図2) 16号落とし穴は、D地区北側、4号竪穴住居内に位置する。長軸南側ではピットに切られている。

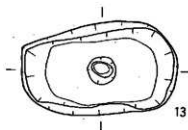
この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.27m、短軸0.62m、深さ0.64m、床面では長軸0.85m、短軸0.39m、中央ピットは径0.4m、深さ0.19mを測る。

17号落とし穴 (図版60-1、第86図、付図2) 17号落とし穴遺構は、D地区北東側、5号竪穴住居内に位置する。調査当時、1号貯蔵穴としたが、その形状から落とし穴に改めた。

この遺構の床面は略円形を呈し、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面中央には略円形ピットが1個ある。大きさは上面で径1.11m、深さ0.44m、床面では径1.08m、ピットは径0.24m、深さ0.13mを測る。ピット内に礫石がみられる。

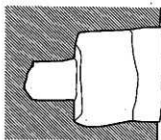
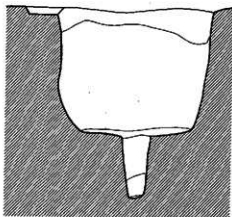
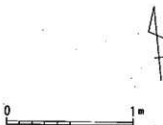


標高28.5m

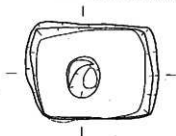


13

標高28.5m

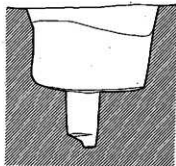


標高28.6m

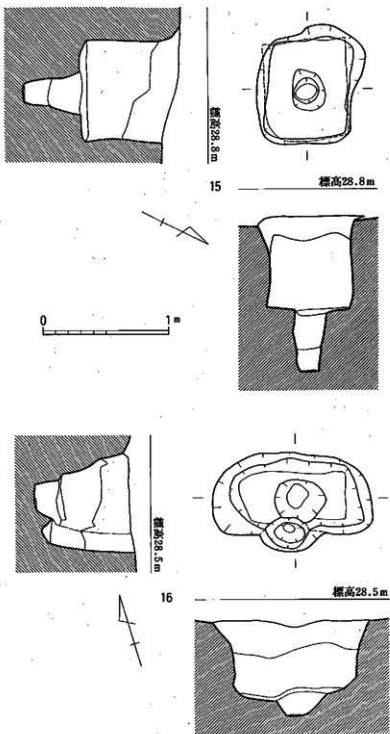


14

標高28.6m



第84図 13号・14号落とし穴実測図(1/30)



第85図 15号・16号落とし穴実測図(1/30)

② 竪穴住居

竪穴住居は、調査区内で8軒検出した。カマドをもつ5号竪穴住居以外は、ベット状遺構をもつ竪穴住居である。そのほとんどは削平が著しく、壁体がよく残っていない。

1号竪穴住居（図版61、第87図、付図2）1号竪穴住居は、D地区中央に位置する。この遺構は削平が著しく、壁体はほとんど残っていなかったが、炉跡とその両脇の主柱穴と思われる2本柱、さらに南側壁体に沿う屋内土壌の存在から竪穴住居と認定した。

炉跡は、平面プラン楕円形を呈し、長軸65cm、短軸50cm、深さ6cmを測る。

2本柱の大きさは、P1が径23cm、深さ33cm、P2が径40cm、深さ53cm、またP1-P2間距離は2.05mを測る。

屋内土壌は、平面プラン不整楕円形を呈し、長軸60cm、短軸50cm、深さ63cmを測る。

2号竪穴住居（図版62、第87図、付図2）2号竪穴住居は、D地区南側に位置する。この遺構は南側の溝、西側の削竹木棺墓等の削平が著しく、壁体はほとんど残っていなかったが、炉跡とその両脇の主柱穴と思われる2本柱、さらに南側壁体に沿うベット状遺構・東側の屋内土壌の存在や北側コーナーから竪穴住居と認定した。

残存南北長3.85m、残存東西長3.75mの長方形をなす。また、ベット状遺構は幅97cm、高さ6cmを測る。

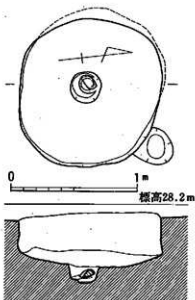
炉跡は、平面プラン略円形を呈し、径74cm、深さ14cmを測る。

2本柱の大きさは、P1が径28cm、深さ58cm、P2が径29cm、深さ57cm、またP1-P2間距離は2.35mを測る。

屋内土壌は、平面プラン不整楕円形を呈し、長軸90cm、短軸65cm、深さ17cmを測る。

3号竪穴住居（図版60-1、第89図、付図2）3号竪穴住居は、D地区中央からやや南側、1号、2号竪穴住居の中間に位置する。この遺構は東側の溝等の削平が著しく、壁体はほとんど残っていなかったが、炉跡とその両脇の主柱穴と思われる2本柱、さらに西側壁体に沿うベット状遺構・南側の屋内土壌、壁溝（ベット状遺構に沿うようにして屋内土壌まで走る）の存在や西側コーナーから竪穴住居と認定した。

残存南北長3.45m、残存東西長1.9mの長方形をなす。また、ベット状遺構は、幅95cm、高さ14cmを測る。



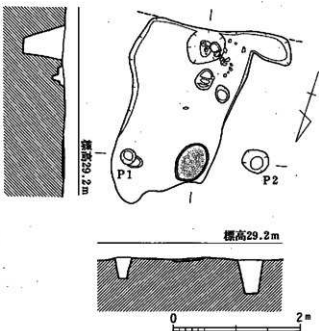
第86図 17号落とし穴実測図(1/30)

炉跡は、平面プラン楕円形を呈し、長軸46cm、短軸43cm、深さ10cmを測る。

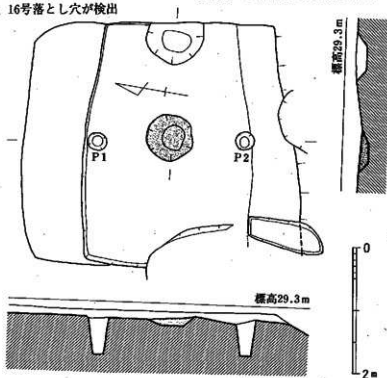
2本柱の大きさは、P1が径26cm、深さ40cm、P2が径36cm、深さ60cm、またP1-P2間距離は2.4mを測る。

屋内土壌は、平面プラン不整楕円形を呈し、長軸65cm、短軸63cm、深さ28cmを測る。

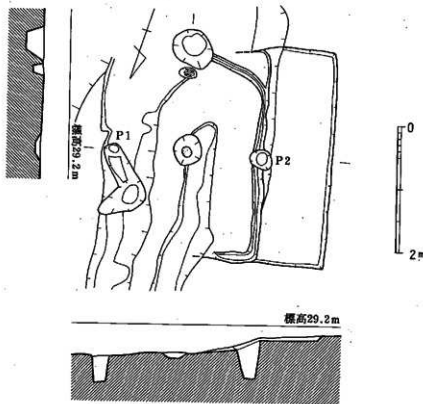
4号竪穴住居 (図版63・64、第90図、付図2) 4号竪穴住居は、D地区北側に位置する。この遺構は上面がほとんど削平され、さらに北側で溝、南側で土城により切られる。また、床面下層からは13号、16号落とし穴が検出



第87図 1号竪穴住居実測図(1/60)



第88図 2号竪穴住居実測図(1/60)



第89図 3号竪穴住居実測図(1/60)

された。

この遺構は、2本柱の支柱穴、炉跡、屋内土壇、ベット状遺構をもつ長方形プランのものである。

その大きさは残存南北長5.1m、残存東西長4.55mである。また、ベット状遺構は北壁から西壁にL字状に付設し、残りの良い西側では、幅93cm、高さ14cmを測る。

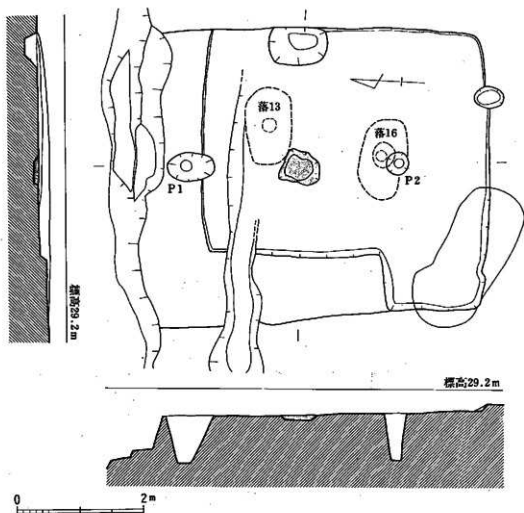
炉跡は、平面プラン楕円形を呈し、長軸60cm、短軸50cm、深さ8cmを測る。

2本柱の大きさは、P1が長軸75cm、短軸45cm、深さ76cm、P2が径35cm、深さ75cm、またP1-P2間距離は3.35mを測る。

屋内土壇は、平面プラン不整形円形を呈し、長軸92cm、短軸60cm、深さ18cmを測る。

5号竪穴住居(図版65、第91図、付図2) 5号竪穴住居は、調査区北西隅、6号竪穴住居と重複する。これについては第3分冊で説明する。

6号竪穴住居(図版65~66、第91図、付図2) 6号竪穴住居は、D地区北西隅、5号竪穴住居に切られる。この遺構は西側でカマドをもつ5号竪穴住居や溝に切られる。



第90図 4号竪穴住居実測図(1/60)

この遺構は、2本柱の主柱穴、炉跡、屋内土壌、ベット状遺構をもつ長方形プランのものである。

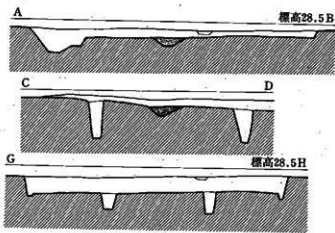
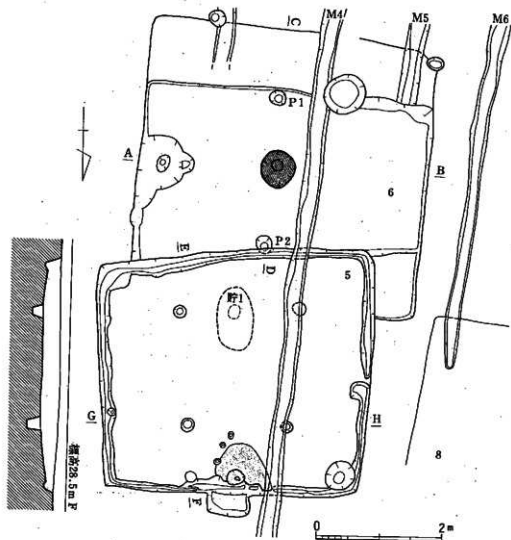
その大きさは残存南北長4.45m、残存東西長4.2mである。また、ベット状遺構は東西短壁に付設し、残りの良い東側では、幅93cm、高さ4cmを測る。

炉跡は、平面プラン楕円形を呈し、長軸60cm、短軸53cm、深さ15cmを測る。

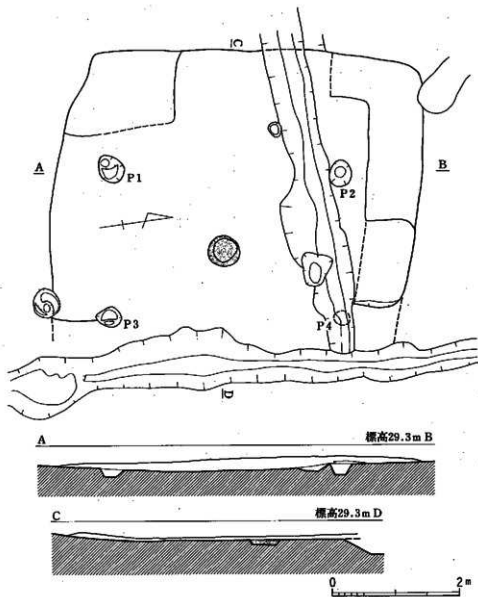
2本柱の大きさは、P1が径28cm、深さ60cm、P2が径26cm、深さ53cm、またP1-P2間距離は2.35mを測る。

屋内土壌は、平面プラン不整楕円形を呈し、長軸90cm、短軸85cm、深さ25cmを測る。

7号竪穴住居(図版67-1、第92図、付図2) 7号竪穴住居は、D地区西側に位置する。この遺



第91圖 5号~6号整穴住居実測圖(1/60)



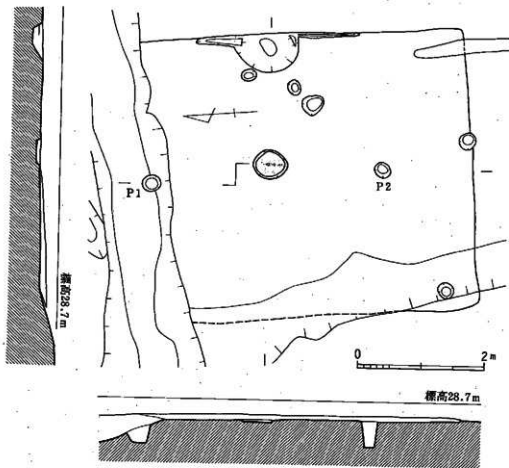
第92図 7号竪穴住居実測図(1/60)

構は北側・東側の1号、17号溝等の削平が著しく、壁体はほとんど残っていないが、炉跡と主柱穴と思われる4本柱(そのうち3本しか確認できていない)、西側・北側壁体に沿うベット状遺構の存在や西側コーナーから竪穴住居と認定した。

残存南北長5.48m、残存東西長4.2+mの長方形形状をなす。

炉跡は、平面プラン略円形を呈し、径48cm、深さ8cmを測る。

4本柱の大きさは、P1が長軸47cm、短軸40cm、深さ13cm、P2が径43cm、深さ18cm、P3



第93図 8号竪穴住居実測図(1/60)

が径32cm、深さ20cm、またP1-P2間距離は3.62m、P1-P3間距離2.5mを測る。

8号竪穴住居(図版67-2・68、第93図、付図2) 8号竪穴住居は、D地区北側、4号、6号竪穴住居の間に位置する。この遺構は北側の16号溝等の削平が著しく、壁体はほとんど残っていないが、炉跡と両脇の支柱穴と思われる2本柱、さらに東側壁体に沿う屋内土塊、壁溝の存在や南側コーナーから竪穴住居と認定した。

残存南北長5.1m、残存東西長4.4mの長方形をなす。

炉跡は、平面ブラン楕円形を呈し、長軸55cm、短軸45cm、深さ5cmを測る。

2本柱の大きさは、P1が径28cm、深さ30cm、P2が径31cm、深さ42cm、またP1-P2間距離は3.65mを測る。

屋内土塊は、平面ブラン不整楕円形を呈し、長軸1m、短軸60cm、深さ15cmを測る。

(2) 遺物

① 土器

D地区壺穴住居出土土器 (第94図)

1号壺穴住居出土土器 (第94図1・2) 1は、甕の口縁で調整法が不明であるが、胴部が急激に薄くなることから内面ケズリの可能性がある。胎土には、雲母・赤褐色粒など細砂を多量に含み、褐色をしている。

2は、甕の底部で、平底に近い丸底。外面に煤が付着している。胎土は、1に同じ。1号壺穴住居の土器の時期は、弥生後期後半。

3号壺穴住居出土土器 (第94図3～5) 3は甕口縁部、4・5が甕底部で、4には焼成後の穿孔がある。3～5は、いずれも中期後半のものと思われるので、3号壺穴住居の時期を示すのではなく混入品である。

4号壺穴住居出土土器 (第94図6) 6は、甕口縁部の細片で、屈曲が強い。胴部内面がハケ目で、他はナデ調整。胎土は、雲母・赤褐色粒・角閃石などを多量に含む褐色。

5号壺穴住居出土土器 (第94図7) 7は、壺穴住居中央部から出土した小形鉢で、平底を有する。器壁に厚味があり、平底的で、胎には赤褐色粒など細砂を多量に含み、黄褐色をしている。大きさは、口径7.1cm、底径3.3cm、器高約4.3cm。時期は、後期後半と思われる。

6号壺穴住居出土土器 (第94図8-16) 8は複合口縁甕の口頸で、口径15cmの大きさ。口縁部立上がり、外反と頸部のゆるい外反が特徴であろう。胎土には、雲母・赤褐色粒などの細砂を多量に含み、茶褐色をしている。

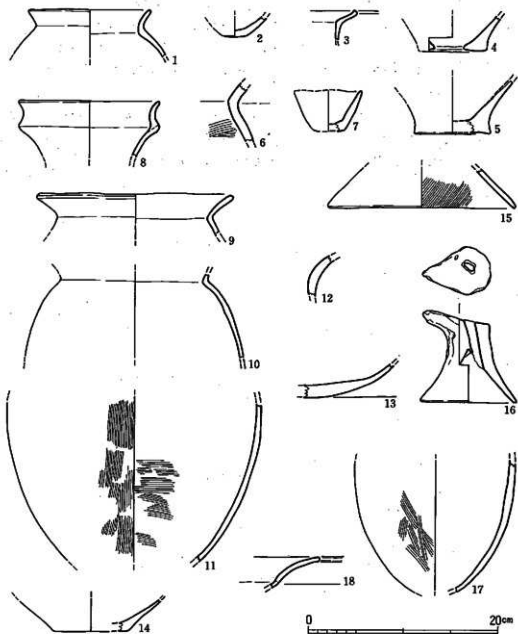
9～14は甕であるが、14が中期以前の混入品である。9が口縁、10が胴部上半、11が胴部中央、13が丸底である。9～11は同形態の甕で、9の口径が21cmの大きさ。胎土には、雲母・赤褐色粒などの細砂を多量に含み、10に角閃石を含む。

15は、高杯脚部細片である。裾部がわずかに内湾する特徴があり、胎土に雲母・赤褐色粒を若干含み、褐色を呈する。裾径20cmの大きさ。

16は、突起付支脚で、焼成前の穿孔を有する。器高9.8cm、裾径10.2cmの大きさで、胎土に雲母・赤褐色粒などの細砂多量、粗砂若干を含み、赤褐色をしている。上面に榎痕らしきものあり。6号壺穴住居出土土器の時期は、弥生後期後半から終末と考えられる。

7号壺穴住居出土土器 (第94図17・18) 17は甕胴部で、丸底になるものと思われる。器壁が密合に厚く、外面に若干ハケ目調整が残る。胎土は、雲母・角閃石・赤褐色粒などの細砂多量、粗砂をかなり含む黄茶褐色。

18は高杯の杯部細片で、外反部はさほど広くない。胎土は、雲母・赤褐色粒などの細砂を多量に含む褐色。7号壺穴住居出土の土器の時期は、弥生終末と考える。 (柳田)



第94图 D地区竖穴住居出土土器实测图(1/4)

② 石製品 (第111図)

12 (15号落とし穴出土)、16 (4号竪穴住居南西土壇出土)、10 (3号竪穴住居ベット上出土) は、サヌカイト製石鏃である。12は薄く小型のもので、平面形が正三角形で、基部の扶れが大きい。10・16は平面形が二等辺三角形で、片面が突出する。基部に扶りがある。

11 (6号竪穴住居北側出土)、13 (10号落とし穴出土)、15 (表採) は、姫島産黒燧石の石鏃である。11・15は平面形が正三角形で、薄くて小型のものである。13は平面形が二等辺三角形で、基部の扶れが大きい。

24 (4号竪穴住居南西土壇出土)、23 (16号落とし穴出土) は共に姫島産黒燧石であるが、24は石核で、徳永川ノ上遺跡から検出された姫島産黒燧石が半透明乳灰色を呈しているのに比べれば、やや明茶黒色を呈する。23は、石鏃製作過程のものである。 (緒方)

5 E地区の調査

E地区は調査区最北端に位置している。E地区は、第2分冊で紹介する弥生時代の墳丘墓群のメイン地域である。ここでは、落とし穴群、井戸、土壌及び竪穴住居について説明を加える。

(1) 遺構

① 落とし穴

落とし穴は、E地区内で10基が検出され、1号、2号、4号落とし穴が比較的近接するが他のは分散的に検出された。

1号落とし穴(図版71、第95図、付図2) 1号落とし穴は、E地区南東側、2号竪穴住居西側に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸1.06m、短軸0.66m、深さ0.37m、床面では長軸0.87m、短軸0.42m、中央ピットは径0.28m、深さ0.35mを測る。また土層観察では、床面中央のピットから0.16m程上まで淡灰褐色粘質土が乱れながらも伸びており、ピットに立てかけた杭の痕跡と思われる。

2号落とし穴(第95図、付図2) 2号落とし穴は、E地区南東側、1号落とし穴北側に位置する。

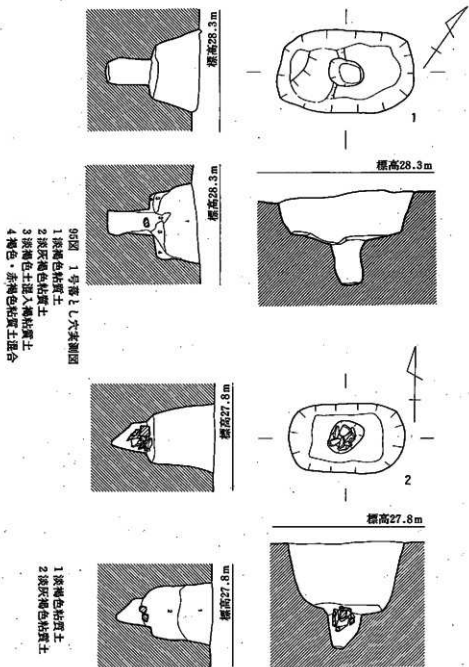
この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸0.9m、短軸0.56m、深さ0.49m、床面では長軸0.56m、短軸0.38m、中央ピットは0.26m、深さ0.27mを測る。ピット内上面から中層にかけて多数の礫石が落ち込んでいる。

3号落とし穴(図版72-1、第96図、付図2) 3号落とし穴は、E地区南側中央に位置する。長軸南側は削平を受けている。

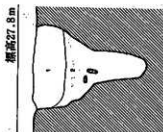
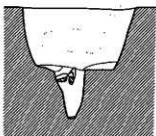
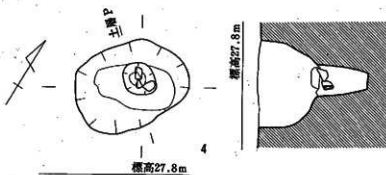
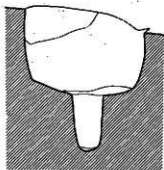
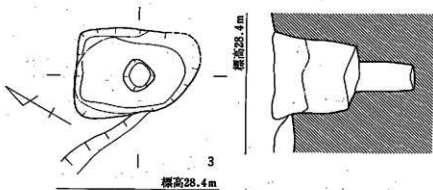
この遺構の床面は不整形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸0.98+m、短軸0.68+m、深さ0.68m、床面では長軸0.8m、短軸0.54m、中央ピットは径0.25m、深さ0.45mを測る。

4号落とし穴(図版72-2、第96図、付図2) 4号落とし穴は、E地区南東側、2号落とし穴北側に位置する。

この遺構の床面は不整形楕円形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸0.9m、短軸0.69m、深さ0.48m、床面では長軸0.61m、短軸0.37m、中央ピットは径0.24m、深さ0.38mを測る。ピット内上層には礫石3個

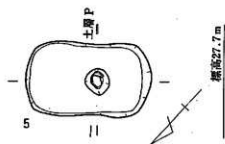


第95图 1号-2号落とし穴実測図(1/30)

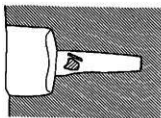


1 淡黄褐色粘質土
2 赤褐色粒混入淡黄褐色粘質土

第96図 3号—4号落とし穴実測図(1/30)

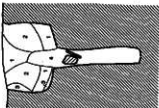


標高27.7 m



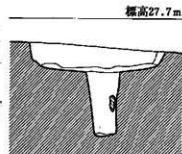
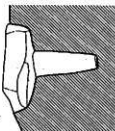
標高27.7 m

標高27.7 m

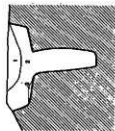


標高27.7 m

標高27.7 m



標高27.7 m



第97図 5号落とし穴実測図
1 黄褐色土、赤褐色土粒混入淡褐色土
2 淡褐色粘質土
3 赤褐色土混入淡褐色土
4 暗褐色粘質土(やわらかい)

第97図 6号落とし穴実測図

1 暗褐色粘質土
2 淡褐色粘質土
3 淡褐色赤褐色混合粘質土

第97図 5号・6号落とし穴実測図(1/30)

が落ち込んでいる。

5号落とし穴(図版73-1、第97図、付図2) 5号落とし穴は、E地区北側に単独で位置する。

この遺構の床面は隅丸長方形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸1m、短軸0.57m、深さ0.39m、床面では長軸0.9m、短軸0.53m、中央ピットは径0.2m、深さ0.68mを測る。ピット内上層には礫石2個が落ち込んでいる。また土層観察では、床面中央のピットから0.23m程上まで直線的に暗茶褐色粘質土が伸びており、ピットに立てかけた杭(長さ約0.9m)の痕跡と思われる。

6号落とし穴(図版73-2、第97図、付図2) 6号落とし穴は、E地区東側、2号壑穴住居北側に位置する。

この遺構の床面は楕円形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央には楕円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸1.06m、短軸0.71m、深さ0.19m、床面では長軸0.97m、短軸0.62m、中央ピットは長軸0.26m、短軸0.19m、深さ0.51mを測る。

7号落とし穴(図版74-1、第98図、付図2) 7号落とし穴は、E地区中央、1号壑穴住居内に位置する。

この遺構の床面は隅丸方形を呈し、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。床面中央には略円形ピット1個ある。大きさは上面で長軸0.98m、短軸0.51m、深さ0.47m、床面では長軸0.83m、短軸0.47m、中央ピットは径0.2m、深さ0.62mを測る。ピット内上面及び中層には礫石が落ち込んでいる。

8号落とし穴(図版74-2、第98図、付図2) 8号落とし穴は、E地区中央、4号周溝内に位置する。

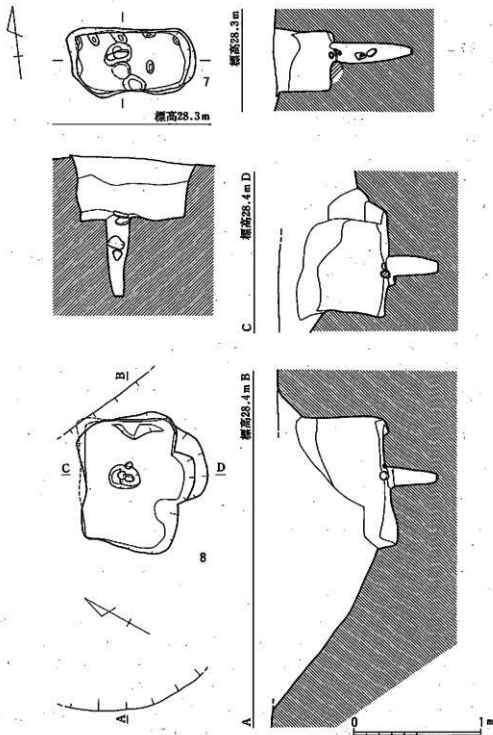
この遺構の床面は略隅丸方形を呈し、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。床面中央隅円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸1.05m、短軸0.75m、深さ0.67m、床面では長軸1m、短軸0.63m、中央ピットは長軸0.25m、短軸0.18m、深さ0.4mを測る。ピット上面には径7cm程の礫石2個が見られる。

9号落とし穴(図版75-1、第99図、付図2) 9号落とし穴は、E地区北西側、1号墳丘墓内に位置する。長軸北側はピットに切られる。

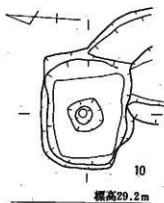
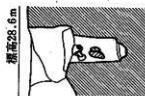
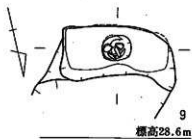
この遺構の床面は隅丸方形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央から長軸に沿って南側に略円形ピット1個がある。大きさは上面で長軸0.81m、短軸0.4m、深さ0.31m、床面では長軸0.80m、短軸0.41m、中央ピットは長軸0.22m、短軸0.2m、深さ0.42mを測る。ピット内には長さ10cm程の礫石5個が上層・中層に落ち込んでいる。

10号落とし穴(図版75-2、第99図、付図2) 10号落とし穴は、E地区南西側、2号墳丘墓内に位置する。長軸南側は2号墳丘墓3号棺で切られ、長軸西側では大きく削平を受けている。

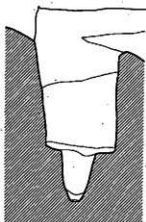
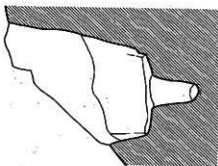
この遺構の床面は隅丸方形を呈し、床面からやや外傾して立ち上がる。床面中央に略円形ピ



第98図 7号・8号落とし穴実測図(1/30)



標高29.2m



第99図 9号・10号落とし穴実測図(1/30)

ットがある。大きさは上面で長軸0.95+m、短軸0.63+m、深さ1.11m、床面では長軸0.65m、短軸0.55m、中央ピットは長軸0.27m、短軸0.25m、深さ0.4mを測る。

② 井戸

井戸は、E地区で2基検出された。

1号井戸(図版76-1、第100図、付図2) 1号井戸は、E地区中央、4号竪穴住居南側、3号墳丘墓周溝内に位置している。

この遺構の床面は略円形を呈し、底面からややオーバーハングしてから、垂直に立ち上がる。大きさは上面で径0.85m、深さ1.44m、床面では径0.5mを測る。

2号井戸(図版76-2、第100図、付図2) 2号井戸は、E地区中央よりやや西側、1号墳丘墓周溝内に位置している。周囲を大きく削平されている。

この遺構の床面は略円形を呈し、底面からは垂直に立ち上がる。大きさは上面で径0.69m、深さ1.06m、床面では径0.55mを測る。

③ 竪穴住居

E地区では、計4基の竪穴住居が検出されたが、いずれも墳丘墓や溝による削平が著しく依存状態が良くない。

1号竪穴住居(図版79-1、第101図、付図2) 1号竪穴住居はE地区中央、4号墳丘墓周溝に囲まれる。竪穴住居東側部分はほとんど削平され、残存部分も壁体を10cm程しか残さない。17号落とし穴が切り合う。

この遺構は方形を呈し、ベット状遺構をもつ支柱穴4本の住居と思われる。大きさは残存南北長2.8+m、残存東西長3.9+m、ベット幅1.17m、壁体高10cm、ベット高8cm程である。また、残存する支柱穴P1・P2は、それぞれの大きさがP1(径34cm、65cm)、P2(56cm、60cm)、P1-P2間距離が3.25mである。

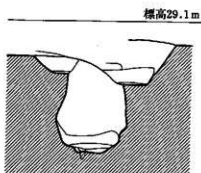
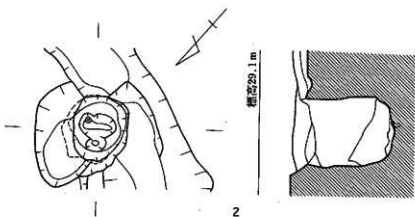
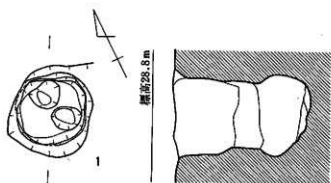
P1-P2間には焼土が3箇所で見られる。

2号竪穴住居(第102図、付図2) 2号竪穴住居はE地区南東側に位置する。竪穴住居東側部分はほとんど削平され、残存部分も壁体を10cm程しか残さない。

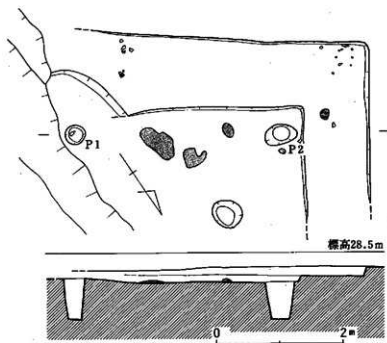
この遺構は方形を呈すると思われるが、支柱穴は判別できない。大きさは南北長4.15m、東西長2.6+m、壁体高0.17mを測る。

3号竪穴住居(第103図、付図2) 3号竪穴住居はE地区北側に位置する。竪穴住居は周囲の溝5、6のためほとんど削平され、壁体もわずかに残すにすぎない。

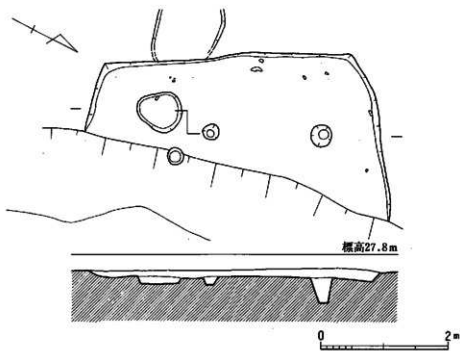
この遺構では支柱穴は判別できない。大きさは残存南北長2.45+m、残存東西長1.6+m、壁体高0.07mを測る。



第100圖 1号・2号井戸実測図(1/40)



第101图 1号竖穴住居实测图(1/60)



第102图 2号竖穴住居实测图(1/60)

4号竪穴住居(図版77-2・78、第104図、付図2) 4号竪穴住居はE地区中央に位置する。住居は周囲のピットや3号墳丘墓周溝のためほとんど削平され、壁体もわずかに残すにすぎない。

この遺構では主柱穴は判別できないが、ベット状遺構はもつ。大きさは残存南北長1.4+m、残存東西長3.3+m、ベット幅0.96m、壁体高0.15m、ベット高0.06mを測る。部分的に焼土が見られる。

5号竪穴住居(第105図、付図2) 5号竪穴住居はE地区北側1号墳丘墓3号棺下層に位置する。住居は3号棺のためほとんど削平され、壁体もわずかに南西隅角を残すにすぎない。

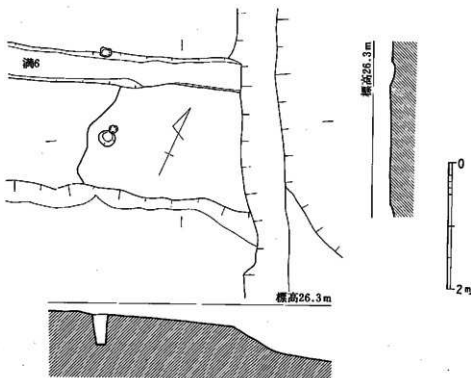
この遺構では主柱穴は判別できないが、大きさは残存南北長1.2+m、残存東西長1+m、壁体高0.1mを測る。若干の土器の出土を見た。(緒方)

E地区竪穴住居出土土器(第106図)

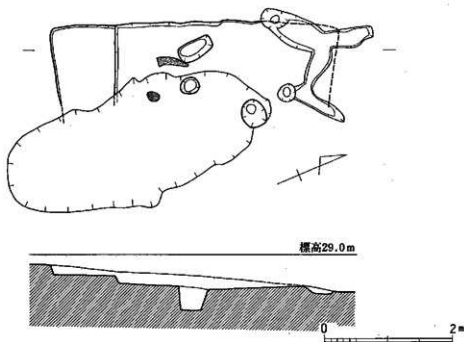
1号竪穴住居出土土器(第106図1-3) 1は壺、2・3が甕の口頸部と思われる細片。1-3共にハケ目調整が著しく、器内に厚味がある。胎土は、雲母・赤褐色粒・角閃石を含むが、3には角閃石が含まれない。弥生後期後半と思われる。

2号竪穴住居出土土器(第106図4) 4は、器種や時期不明の口縁部細片。

3号竪穴住居出土土器(第106図5-9) 5は、口径19cmの大きさの複合口縁壺の口頸部で、口



第103図 3号竪穴住居実測図(1/60)



第104図 4号竪穴住居実測図(1/60)

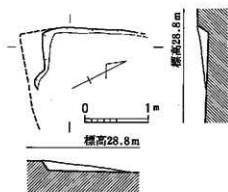
縁の直線的立上がりと短頸が特徴である。胎土は、雲母・角閃石・赤褐色粒など細砂を多量、粗砂を若干含む茶褐色。

6～9は甕細片であるが、8が中期以前の甕底部。6は直立口縁、7が外反口縁、9が胴部突帯にキザミ目がある。時期は、弥生後期後半と考えられる。

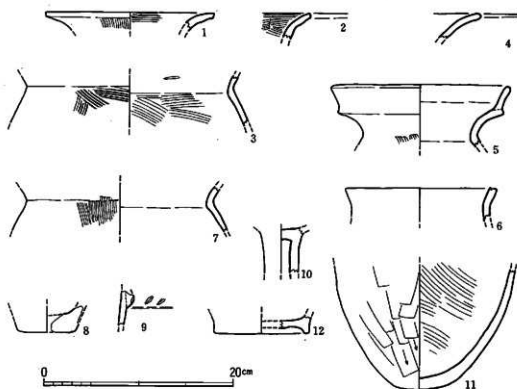
4号竪穴住居出土土器(第106図10～12) 10は、高杯脚部片で、胎土に雲母・赤褐色粒などの細砂を若干含む。色調は、外面が橙褐色から茶褐色で、内面が灰色をしている。

11は甕胴部下半で、外面ヘラケズリで丸底に近くしているが、器肉が厚い。胎土は、雲母・角閃石など細砂少量と粗砂若干を含む白黄褐色から黒色をし、外面上方に煤が付着し、下半が2次加熱で赤変している。12は、前期壺底部で混入品と思われる。4号竪穴住居は、弥生終末と思われる。

(柳田)



第105図 E地区5号竪穴住居実測図(1/60)



第106図 E地区竪穴住居出土土器実測図(1/4)

② 土製品 (第107図)

6、7は共に胴が張り出し、中央に孔が開く土鍾である。表探である。胎土が良く、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。大きさは長さ3.2~3.5cm、胴最大径1.1~1.2cm、孔径0.4cmを測る。なお、これらは編集者のミスで、報告書作成時に中世のものを混入させてしまった。

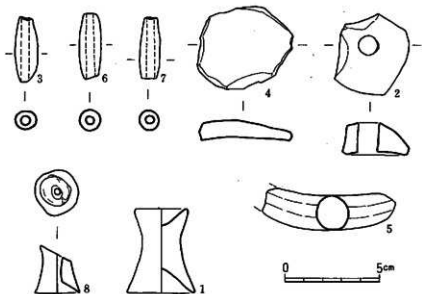
4はビット21出土。土製円板である。側面を打ち欠いている。断面が湾曲していることから土器を転用したと思われる。焼成は良好である。胎土は2mm程の砂粒を含む。色調は黄褐色を呈する。大きさはタテ5cm、ヨコ5.2cm、厚さ0.4~1cmを測る。

③ 石製品 (第108~111図)

105は北東銅鉄滓下層出土。叩き石で両端には敲打痕がある。長さ5.5cm、幅3.6cm、厚さ2cmを測る。蛇紋岩か?

88はビット12出土。仕上げ砥石である。両端は破面となり、断面は三角形であるが一面は破面となる。とてもきめの細かい砂岩である。

69はビット4出土。仕上げ砥石である。両端は破面で、断面四角形であるが一面のみ使用さ



第107図 徳永川ノ上遺跡各地区出土土製品実測図(1/2)

れている。とてもきめの細かい砂岩である。

51は表採でサヌカイト原石である。

67は玄武岩の打製片刃石斧である。67は1号溝下層出土。基部は折損している。

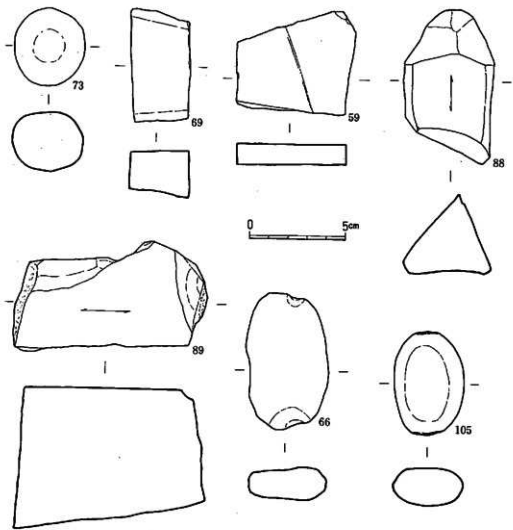
110は花崗岩の凹凸である。ピット30出土。表面は風化が著しくボロボロしている。両面に窪みがある。

81は北東側鉄滓層出土。玄武岩で球状を呈しているが、周縁には敲打痕などは見られない。

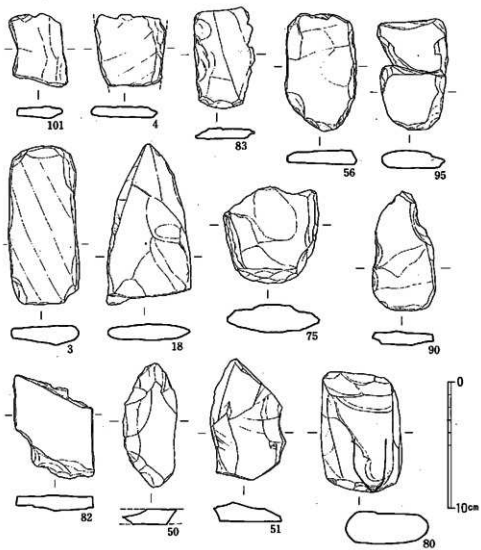
70は、調査区北東側最下段出土のサヌカイト製石鏃である。平面形は二等辺三角形で、小型で片面が突出する。基部に抉りが入る。

94は10号溝出土。鉅島産黒耀石の石鏃である。平面形は二等辺三角形で、片面が突出する。

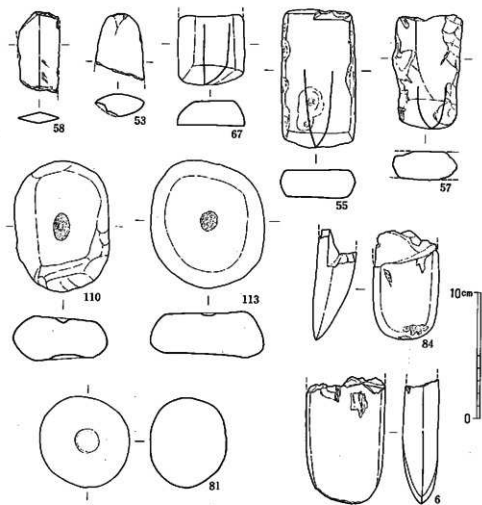
84は(神手遺跡出土)の磨製石斧である。石材は蛇紋岩で、片刃である。



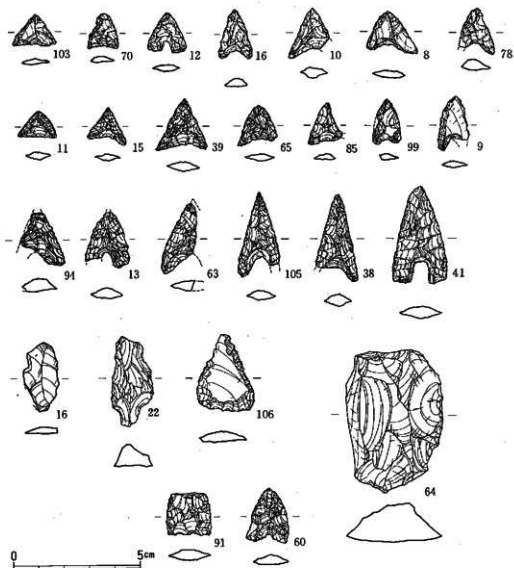
第108图 德永川ノ上遺跡各地区出土石器实测图①(1/2)



第109图 德永川ノ上遺跡各地区出土石器実測图②(1/3)



第110图 德永川ノ上遺跡各地区出土石器实测图③(S=1/3)



第111图 德永川ノ上遺跡各地出土石器実測图(2/3)

Ⅲ お わ り に

以上が、一般国道10号線椎田道路建設に伴う発掘調査で判明した福岡県京都郡豊津町所在徳永遺跡群中の「徳永川ノ上遺跡」の調査記録である。

「徳永川ノ上遺跡」では、遺構・遺物が多種多様で、時期的にもプレ縄文から近世に至るまで連続としたものであったため、大きく3時期に分けて報告することとなった。つまり、以下のように3分冊して刊行する計画である。

第1分冊：弥生時代終末期以前（平成6年度報告）

第2分冊：弥生時代終末から古墳時代初頭（平成7年度報告予定）

第3分冊：古墳時代後期から近世（平成7年度報告予定）

さて、今回の報告では、A、B、C、D、Eの5箇所に分けているが、全体を通じてプレ縄文から弥生時代までの遺構・遺物を取り上げている。以下、各調査区を総括して判明した事柄を箇条書きにまとめてみたい。

1. 検出した主な遺構は、落とし穴46基、井戸21基、貯蔵穴35基、土塚墓1基、竪穴住居19基、溝、ピット等があり、集落・墓地として、その内容はバラエティに富んでいる。
2. 出土した遺物は、縄文土器、弥生土器の他に、石鏃、打製石斧、磨製石斧、石戈、石包丁等の石製品、土鍾、ミニチュア土器等があった。
3. 縄文時代の落とし穴は、形態が楕円形、円形の2タイプがあり、穴の数は1つのものが主流であるが、中には2つのものもあった。また、土層観察ではピット内に杭を立てたと思われる痕跡も確認できた。分布形態は、主軸方向、配列とも一定の規則性を看取することはむずかしかった。しかし、部分部分で群を成すようなまとまり方をしていることは伺いしれた。
4. 縄文時代の井戸は、分散的に分布していて生活遺構との関連について想定することはできなかった。また、切り合い関係でみると、A地区で長方形土器、井戸、貯蔵穴、B地区で井戸、貯蔵穴の生後関係がある。さらに、C地区8号井戸から縄文時代後期後半の土器（第113図）が出土していることから、確実に縄文時代の井戸であることが認められた。
5. 弥生時代前期の貯蔵穴は、ほとんど上面が削平されていて、残存状態はきわめて悪かった。

出土する土器は弥生前期末から中期初頭・中期末にかけてのものであった。

6. 弥生時代の竪穴住居、時期的に弥生前期末から中期初頭のものの中期末のもの、後期後半から終末期にかけてのものであり、それぞれ先述の貯蔵穴や第2冊で報告予定の墳墓群と関係をもつものと考えられる。

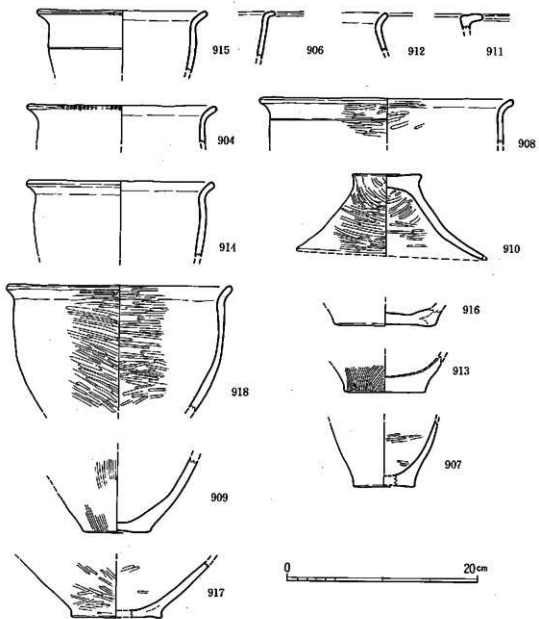
形態的には、弥生前期末から中期初頭のは円形で、中期末のものは方形で炭化米を出し、後期から終末期にかけてのものは長方形で、ベット状遺構、屋内土壌をもつものである。

また、墳墓群との関係は、住居を削ったり、埋め戻したりして構築していることがわかった。

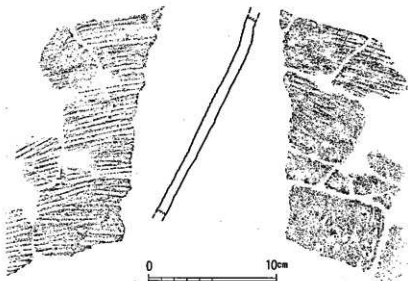
7. 弥生時代の土壇墓は1基しか検出できなかったが、この墓からは、石鏃等の石器がまとめて検出され、戦死者のものではないかと推測される。

8. 神手遺跡の弥生前期土器（第112図）との比較は、今後の課題とするが、第112図の神手遺跡3号貯蔵穴出土土器を見ても、両者はほとんど同時期に展開していた集落であったことがわかる。しかし今回の調査で神手遺跡で検出できた貯蔵穴を取り込むV字環濠は徳永川ノ上遺跡までは伸びないことがわかった。

9. 検出した石鏃の石材には、サヌカイト、腰岳産黒曜石、姫島産黒曜石があり、比率的には姫島産が最も多く、石核・刺片なども検出されているので、この場所での生産も十分に考えて良いものであろう。



第112圖 神手遺跡3号貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第113図 徳永川の上遺跡出土縄文土器実測図(1/3)
(C地区8号井戸)

图

版



1 駿川と徳永川ノ上遺跡A地区（南上空から）



2 A地区全景



1 A地区全景 (東上空から)



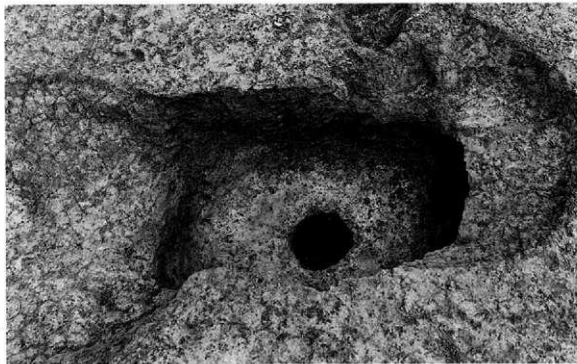
2 1号落とし穴



1 2号落とし穴



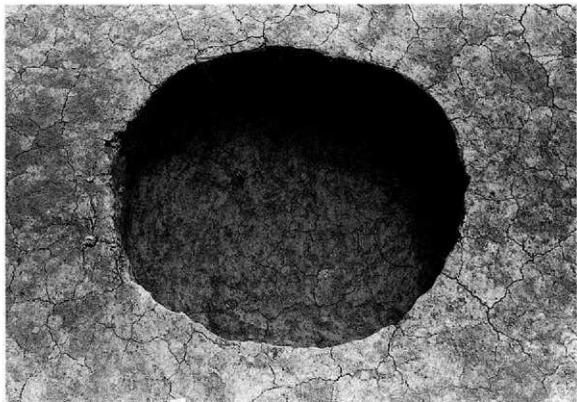
2 4号落とし穴



1 5号落とし穴



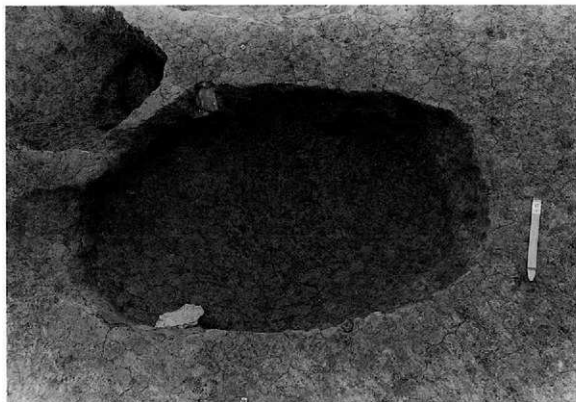
2 A地区井戸



1 1号贮藏穴



2 2号贮藏穴



1 3号贮藏穴



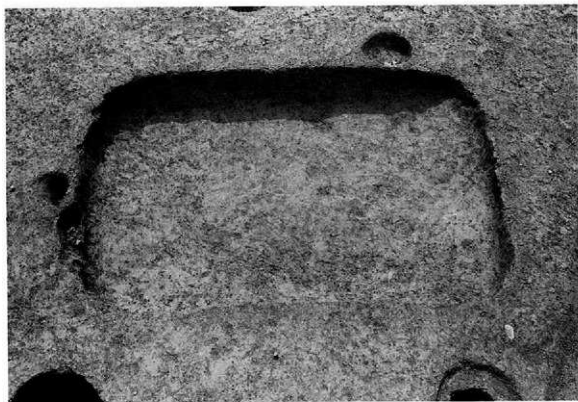
2 4号贮藏穴



1 5号贮藏穴



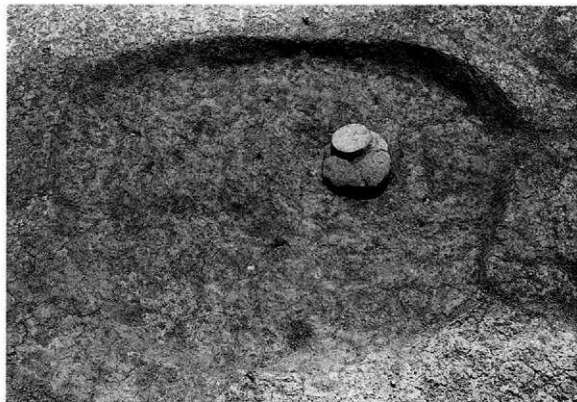
2 6号贮藏穴



1 9号貯藏穴



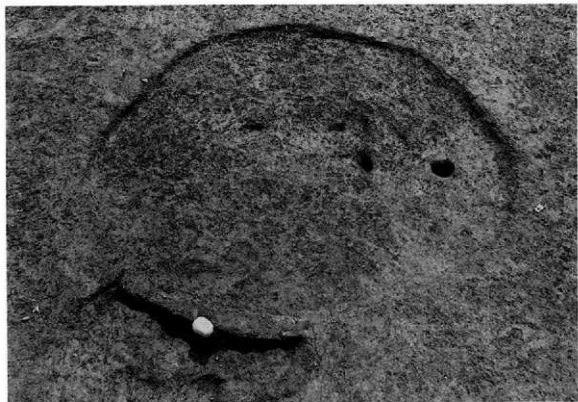
2 10号貯藏穴



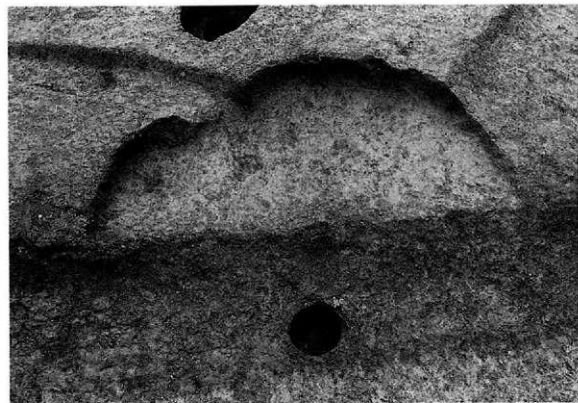
1 11号贮藏穴



2 12号贮藏穴



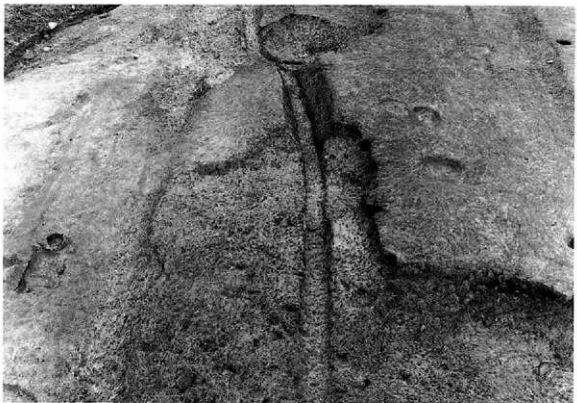
1 14号贮藏穴



2 15号贮藏穴



1 1号大型竖穴



2 3号大型竖穴



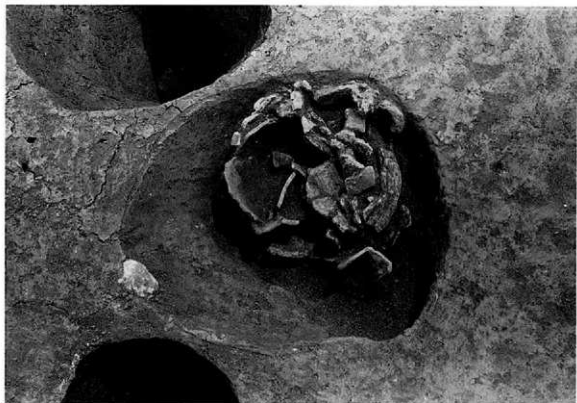
2 10号溝 (南から)



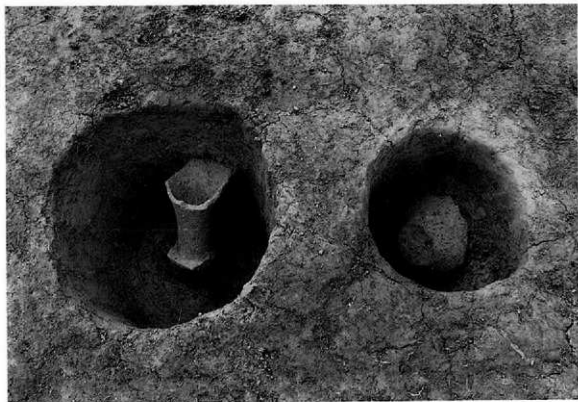
1 3号・4号溝 (西から)



1 4号落とし穴・9号貯蔵群とピット群



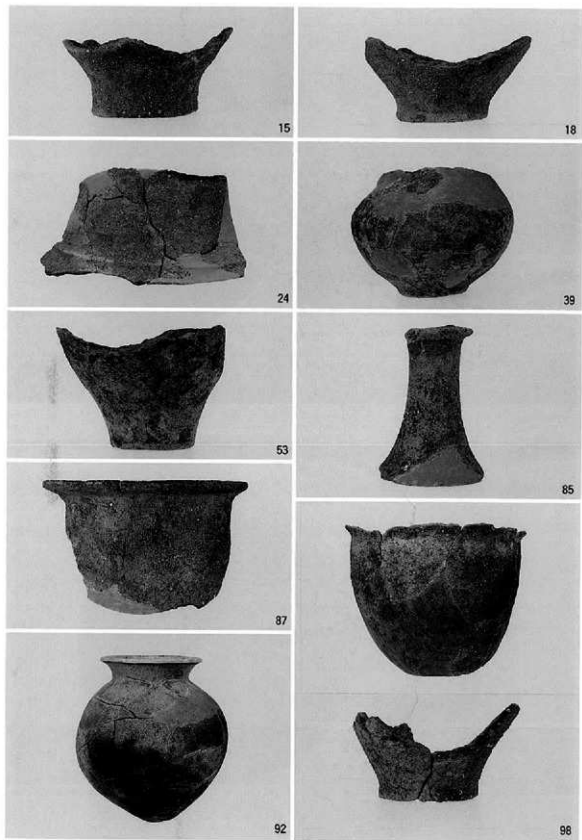
2 ピット19の土器



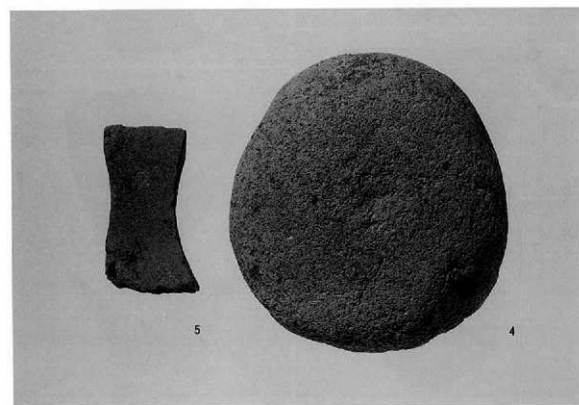
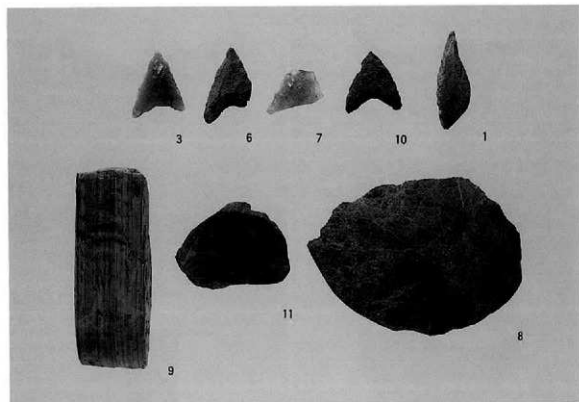
1 ビット15・16の土器



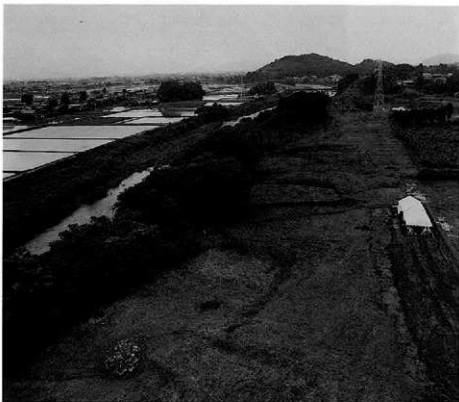
2 ビット17の土器



A地区出土土器



A地区出土石器



1 萩川とB地区全景 (調査前、南から)



2 萩川とB地区全景 (調査後、南から)



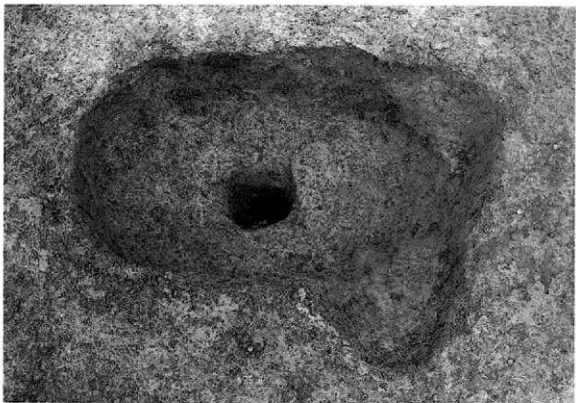
1 B地区全景（東から）



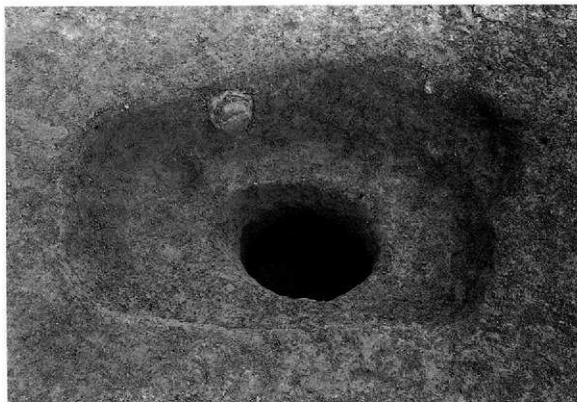
2 B地区1号壑穴住居と貯藏穴群（真上から）



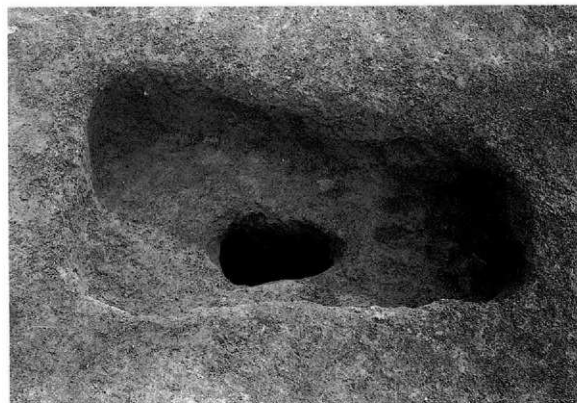
1 1号落とし穴



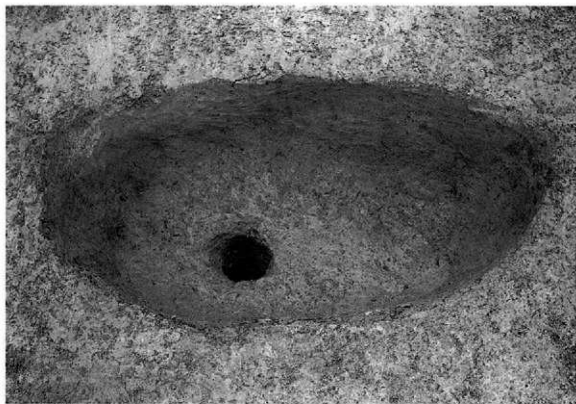
2 4号落とし穴



1 6号落とし穴



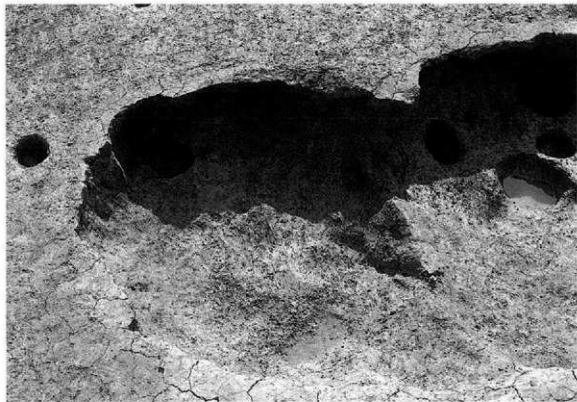
2 7号落とし穴



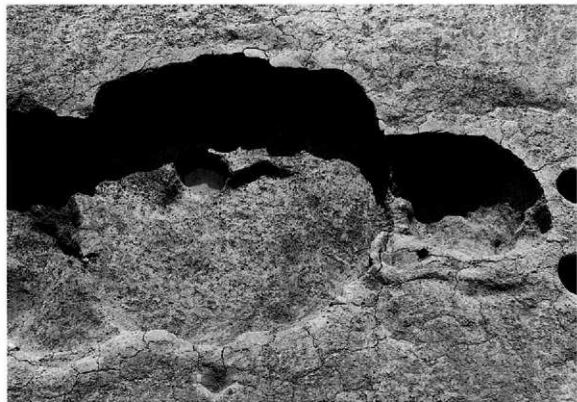
1 8号落とし穴



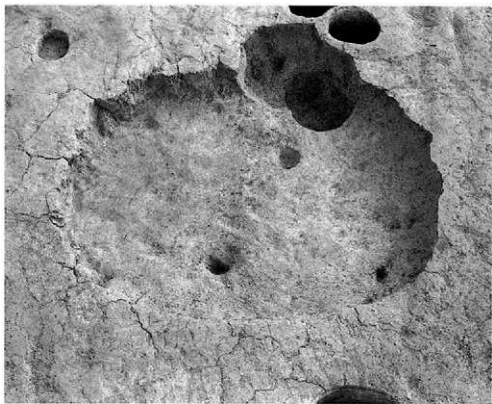
2 1号貯蔵穴



1 2号贮藏穴



2 3号贮藏穴



1 4号貯藏穴



2 6号貯藏穴



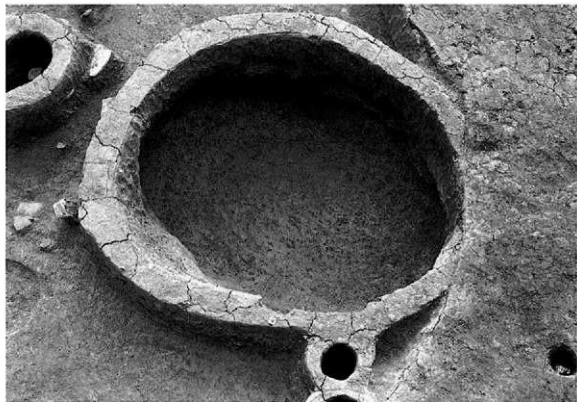
1 7号贮藏穴



2 8号贮藏穴



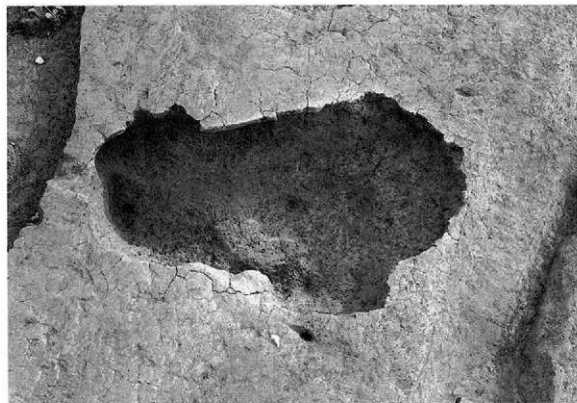
1 9·10号贮藏穴



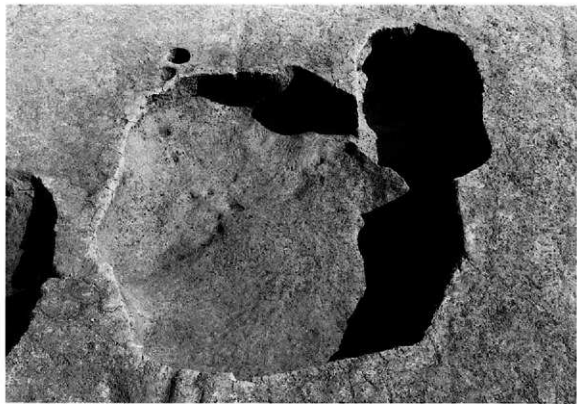
2 12号贮藏穴



1 11号貯藏穴土器出土狀況



2 11号貯藏穴



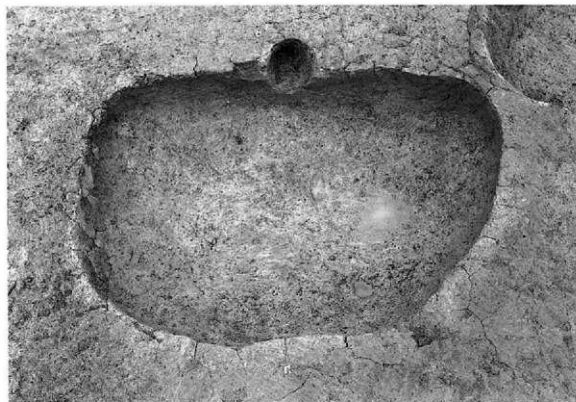
1 18号·19号貯藏穴



2 20号貯藏穴



1 21号贮藏穴



2 22号贮藏穴



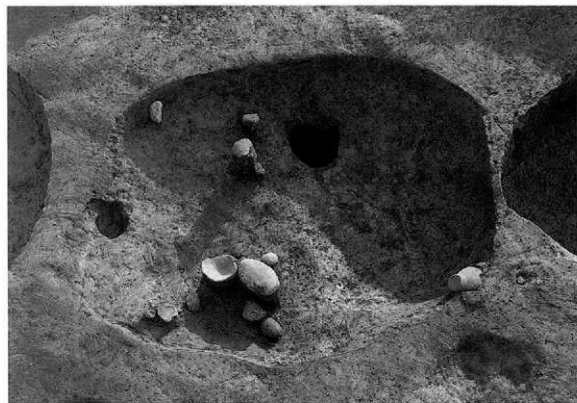
1 24号貯藏穴



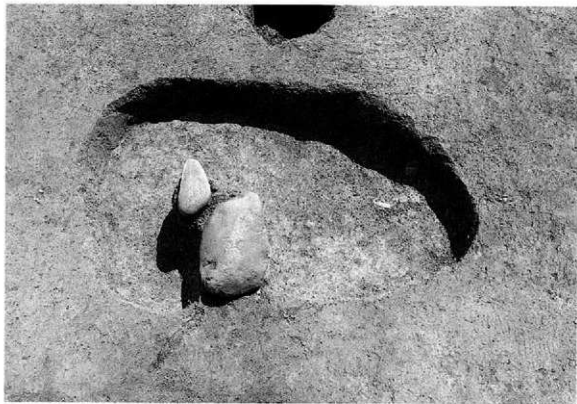
2 25号貯藏穴



1 27号贮藏穴



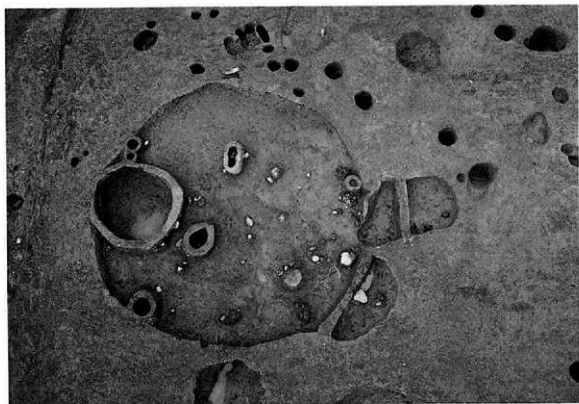
2 28号贮藏穴



1 1号土坑墓



2 1号土坑墓石器出土状况



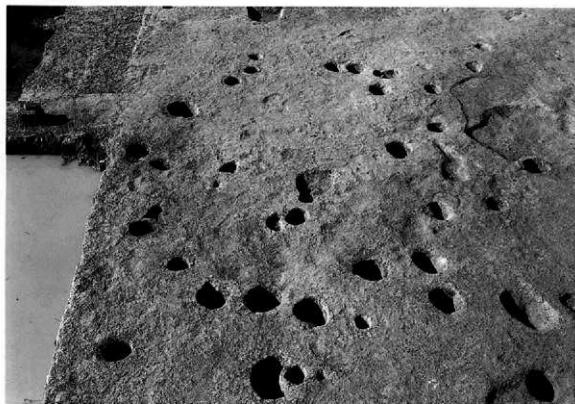
1 1号整穴住居



2 2号整穴住居



1 3号竖穴住居



2 4号竖穴住居



1 萩川とC地区全景（調査前、南から）



2 萩川とC地区全景（調査後、南から）



1 蔵川とC・D・E地区全景 (南から)



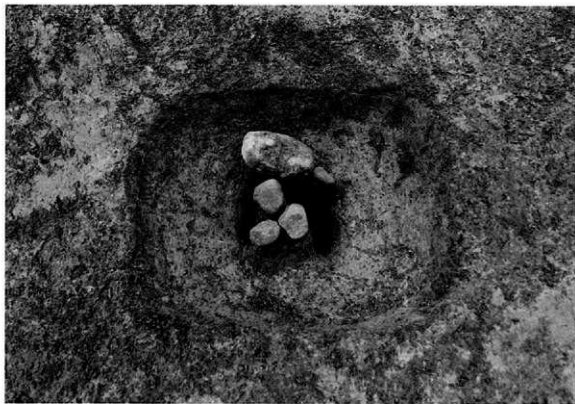
2 竪穴住居群と落とし穴群 (真上から)



1 1号・2号落とし穴



2 5号落とし穴



1 9号落とし穴



2 11号落とし穴



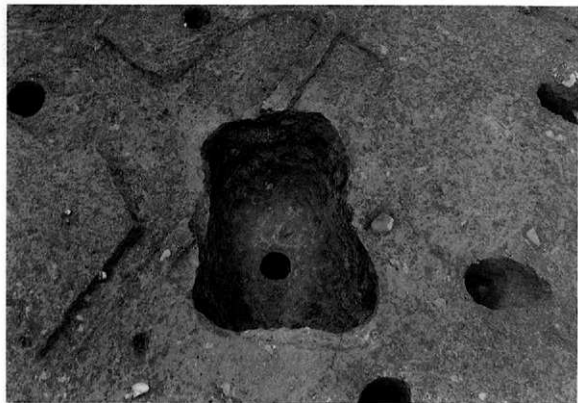
1 12号落とし穴



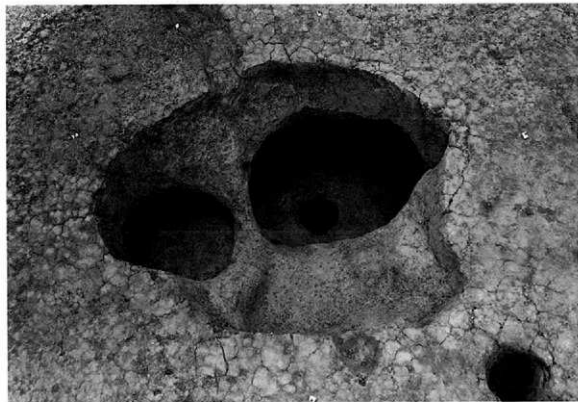
2 13号落とし穴



1 14号落とし穴



2 15号落とし穴



1 16号落とし穴



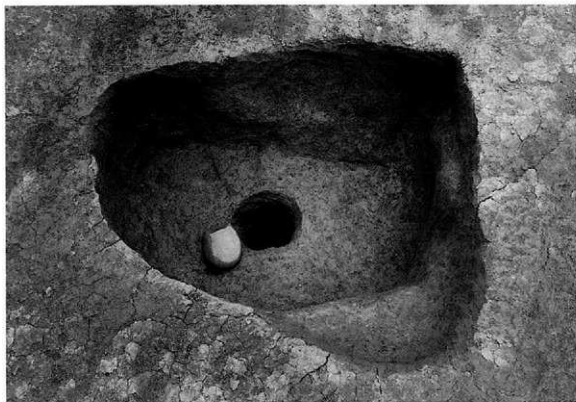
2 18号落とし穴



1 19号落とし穴



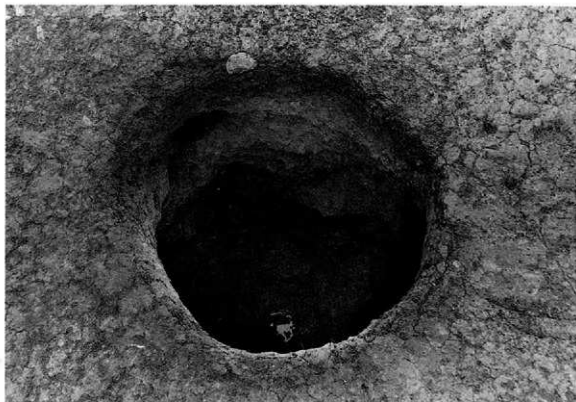
2 21号落とし穴



1 20号落とし穴



2 1号井戸



1 2号井戸



2 3号井戸



1 4号井口



2 6号井口



1 8号井戸（縄文時代後期後半の土器が出土した。）



2 2号竪穴



1 2号贮藏穴



2 3号贮藏穴



1 1号竪穴住居土器出土状況



2 1号竪穴住居（土器取り上げ後）



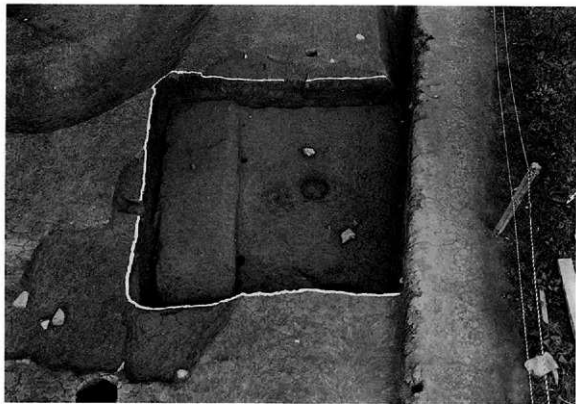
1 1号竖穴住居土器出土狀況 (A)



2 1号竖穴住居土器出土狀況 (B)



1 2号竖穴住居



2 3号竖穴住居



1 鞍川とD地区全景（調査前、南から）



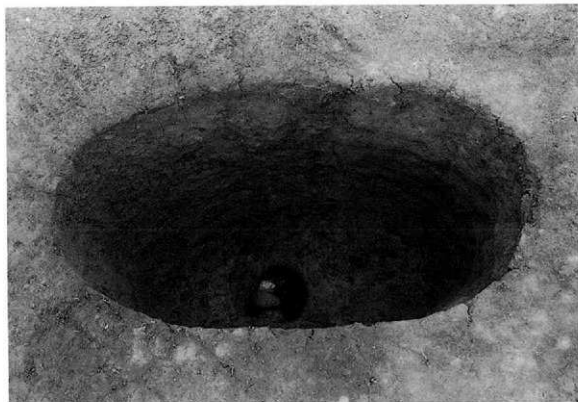
2 鞍川とD地区全景（調査後、南から）



1 壑穴住居群 (南西から)



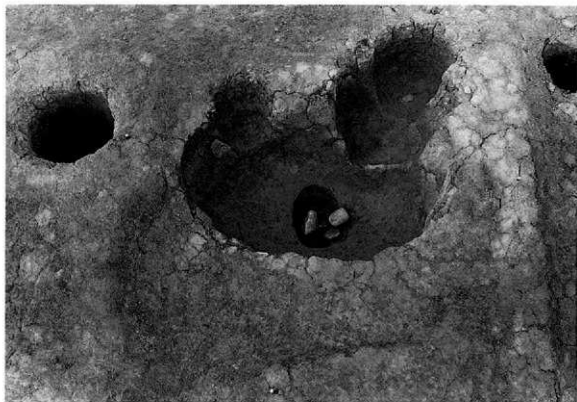
2 壑穴住居群 (真上から)



1 1号落とし穴



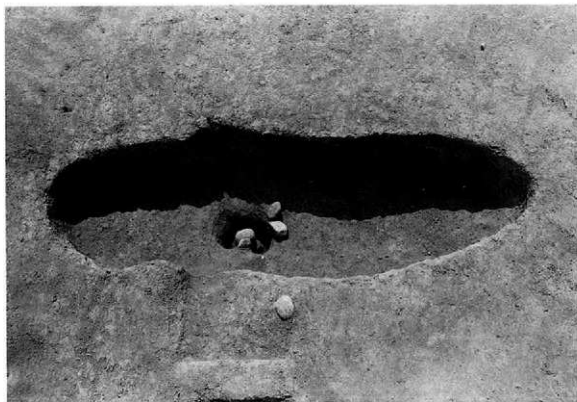
2 2号落とし穴



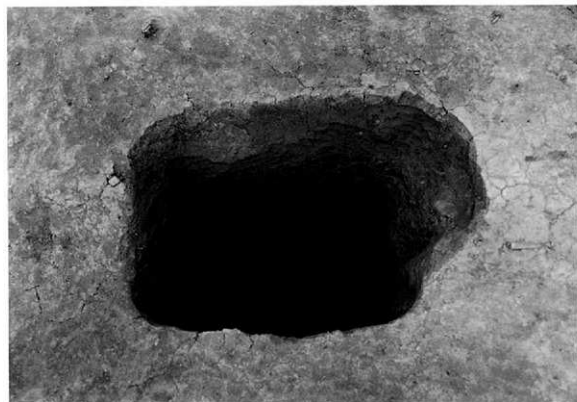
1 3号落とし穴



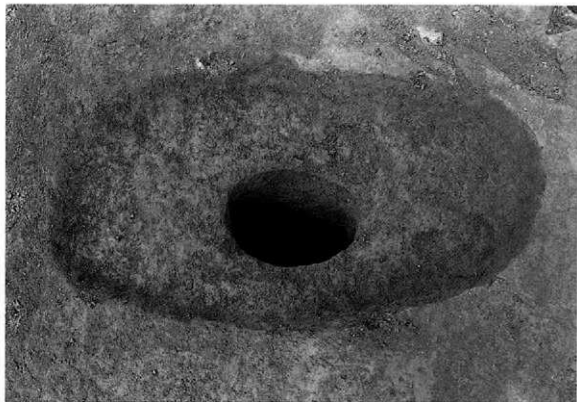
2 4号落とし穴



1 5号落とし穴



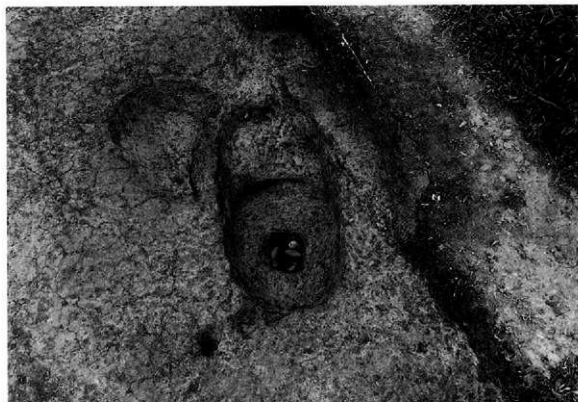
2 7号落とし穴



1 8号落とし穴



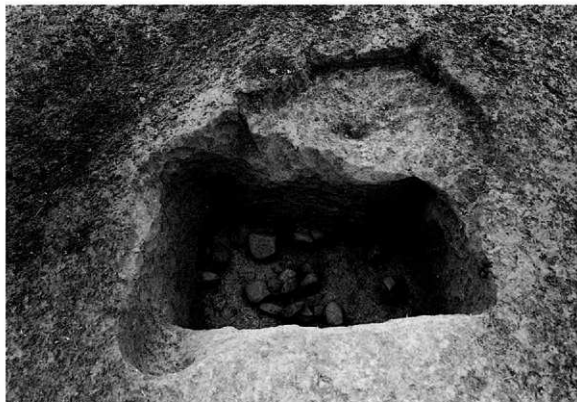
2 10号落とし穴



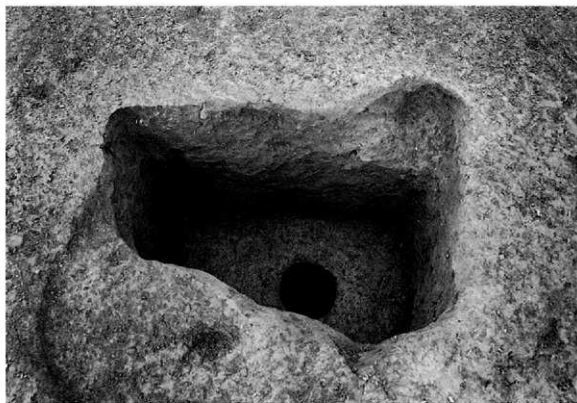
1 9号落とし穴 (ピット内礫石除去前)



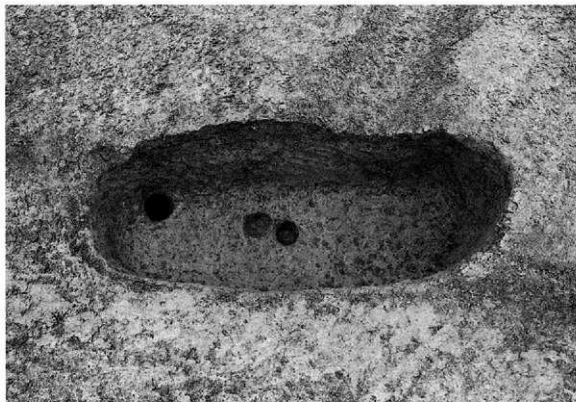
2 9号落とし穴 (ピット内礫石除去後)



1 11号落とし穴 (礫石除去前)



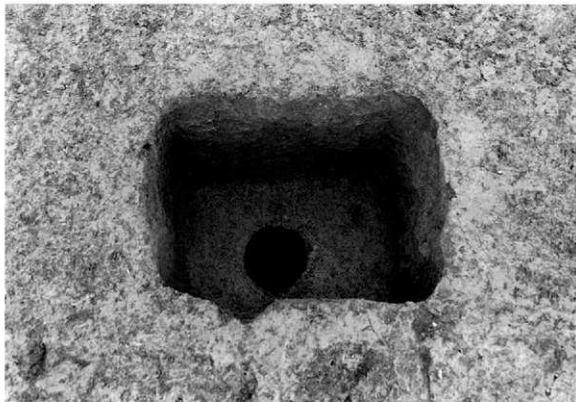
2 11号落とし穴 (礫石除去後)



1 12号落とし穴



2 13号落とし穴



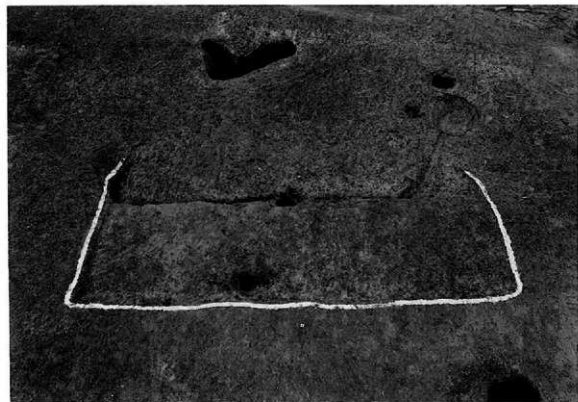
1 14号落とし穴



2 15号落とし穴



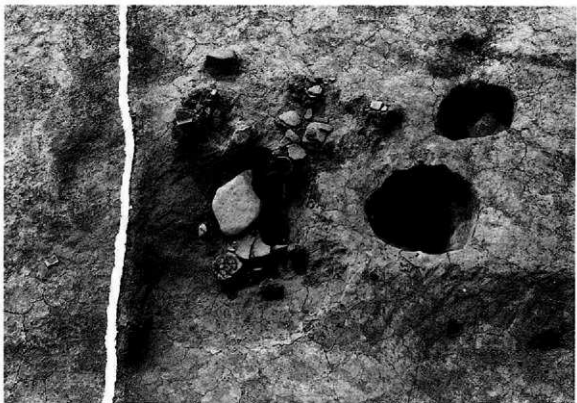
1 17号落とし穴



2 3号堅穴住居



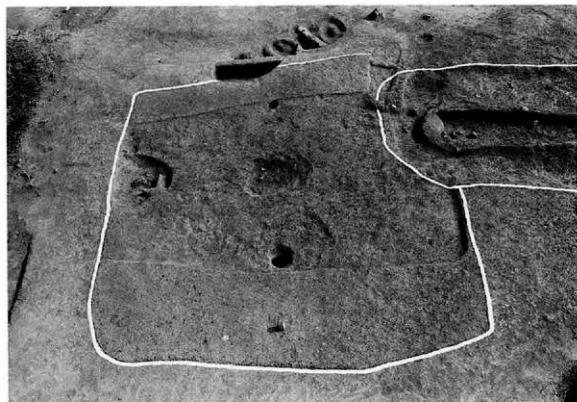
1 1号竖穴住居



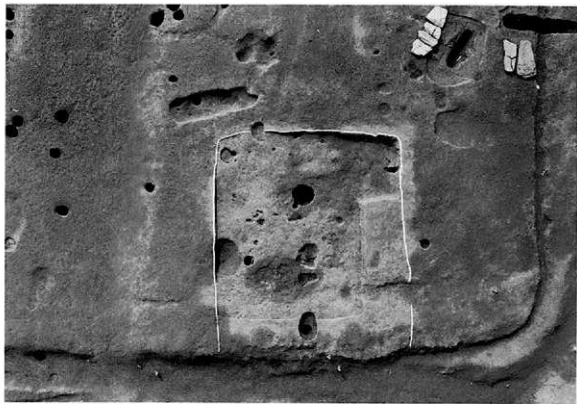
2 1号竖穴住居屋内土境



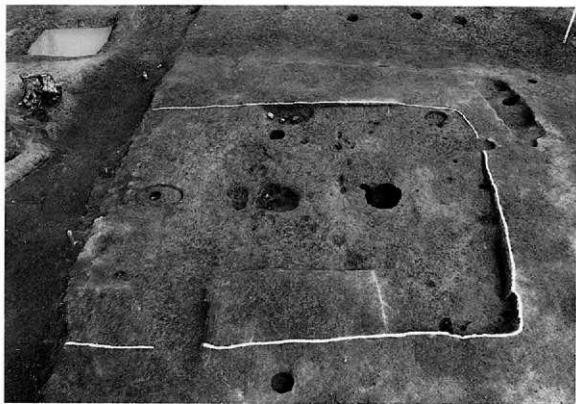
1 2号堅穴住居と割竹木棺（遠景）



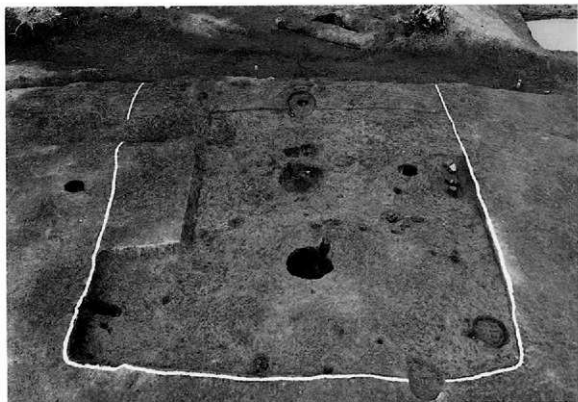
2 2号堅穴住居と割竹木棺（近景）



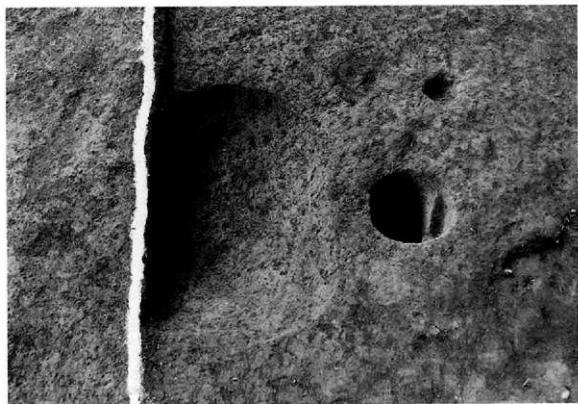
1 4号竪穴住居 (真上から)



2 4号竪穴住居 (南から)



1 4号竖穴住居



2 4号竖穴住居屋内土壁



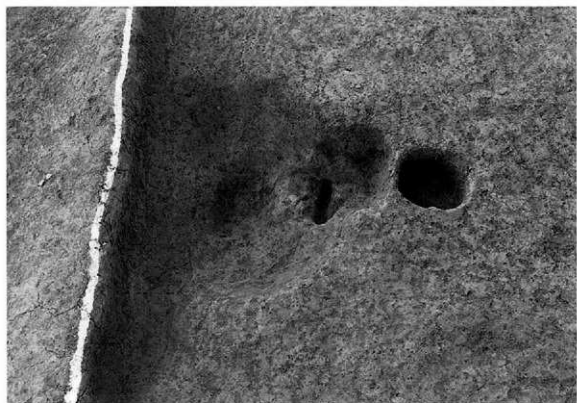
1 6号竪穴住居（真上から）



2 6号竪穴住居（西から）



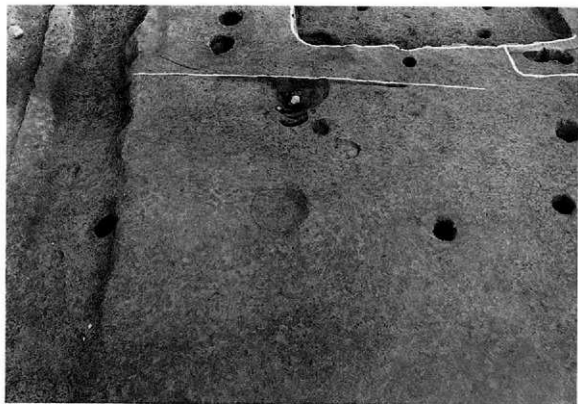
1 6号竪穴住居（東から）



2 6号竪穴住居屋内土壁



1 7号壑穴住居 (東から)



2 8号壑穴住居 (西から)



1 8号竪穴住居（北から）



2 8号竪穴住居屋内土壌



1 鞍川とE地区全景 (調査前、北から)



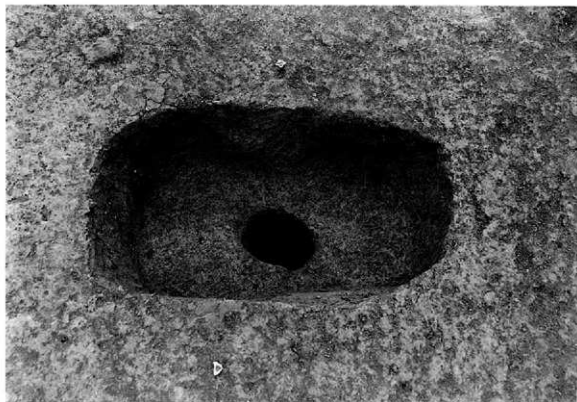
1 徳永川ノ上遺跡全景 (調査後、北から)



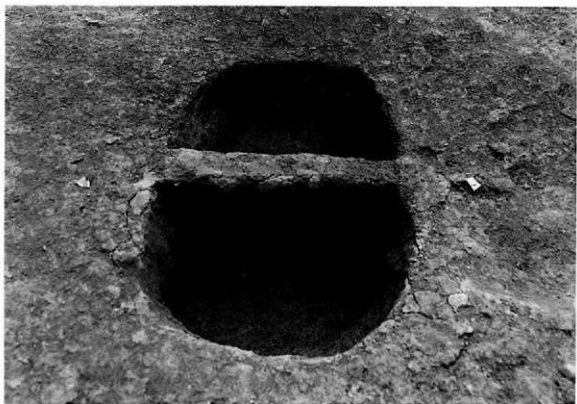
1 E地区全景（南から）



2 E地区全景（真上からから）



1 1号落とし穴



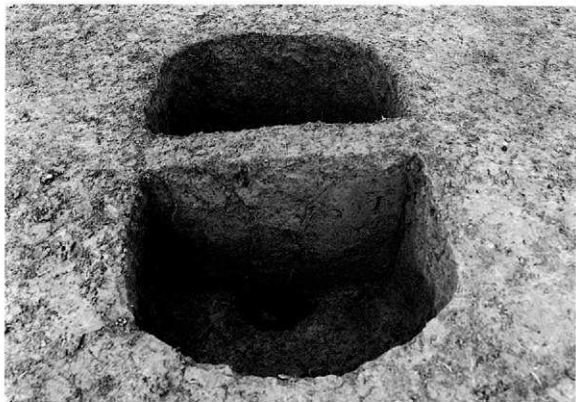
2 1号落とし穴土層断面



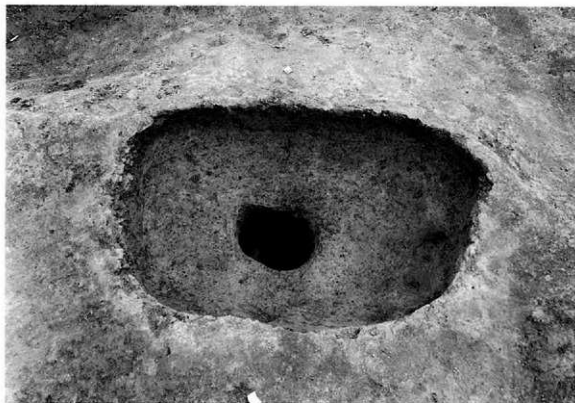
1 3号落とし穴



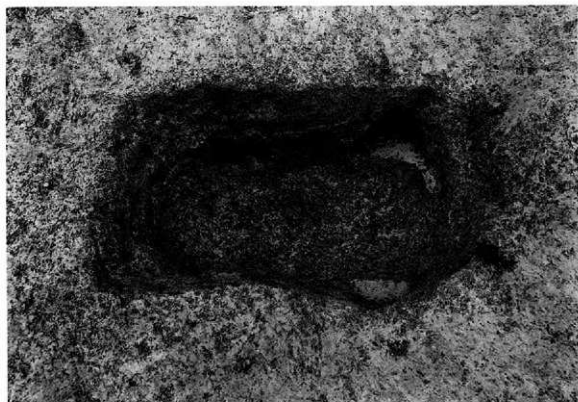
2 4号落とし穴



1 5号落とし穴土層断面



2 6号落とし穴



1 7号落とし穴



2 8号落とし穴



1 9号落とし穴



2 10号落とし穴



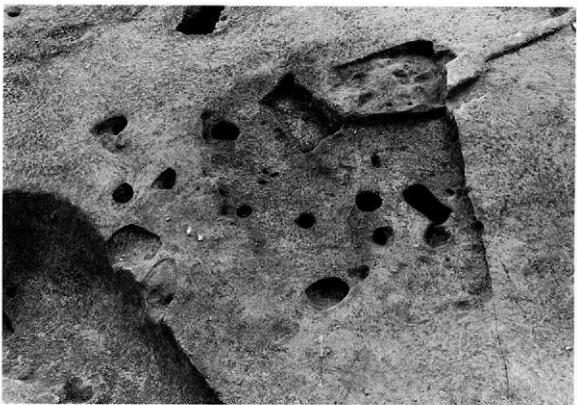
1 1号井戸



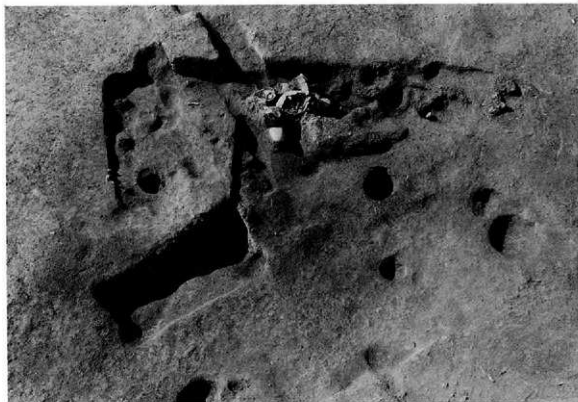
2 2号井戸



1 1号整穴住居



2 4号整穴住居



1 4号竖穴住居土器出土状况(远景)



2 4号竖穴住居土器出土状况(近景)



427



442



445



429



449



556



446



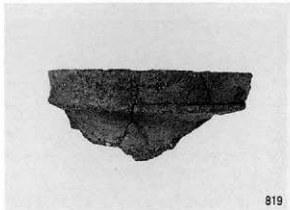
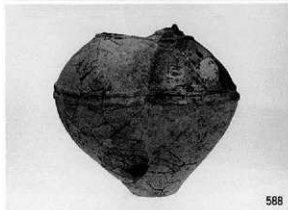
539

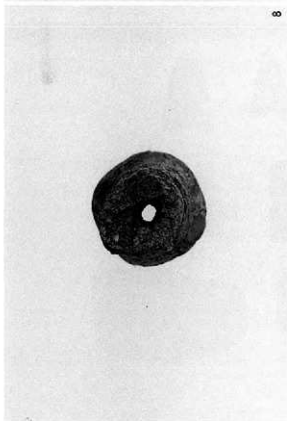
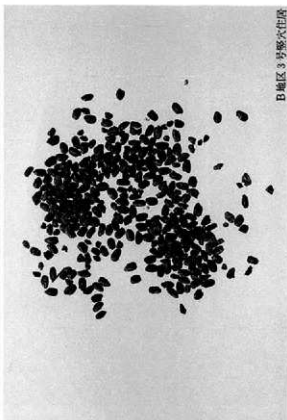
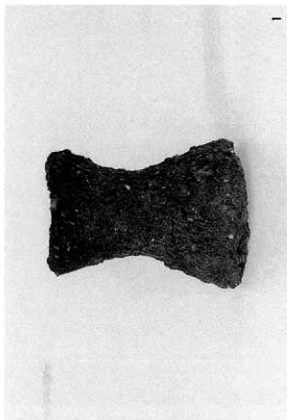
各地区出土土器 1

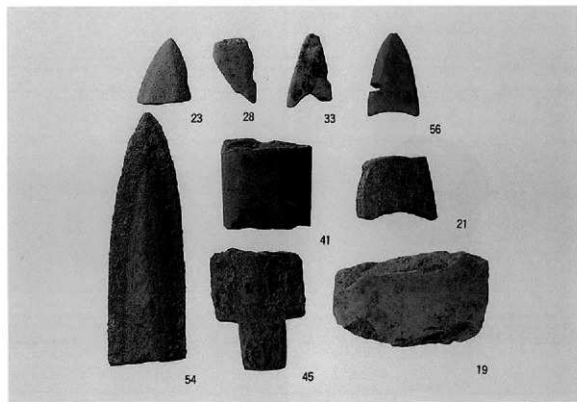
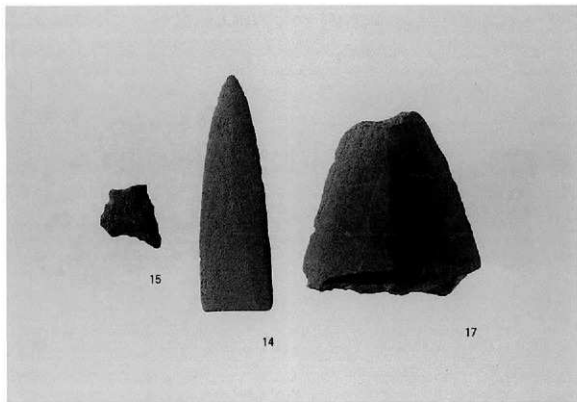




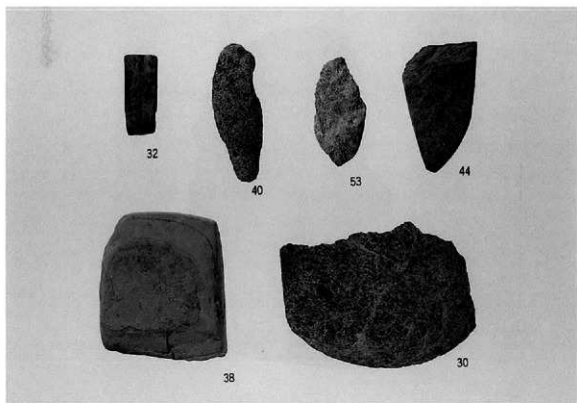
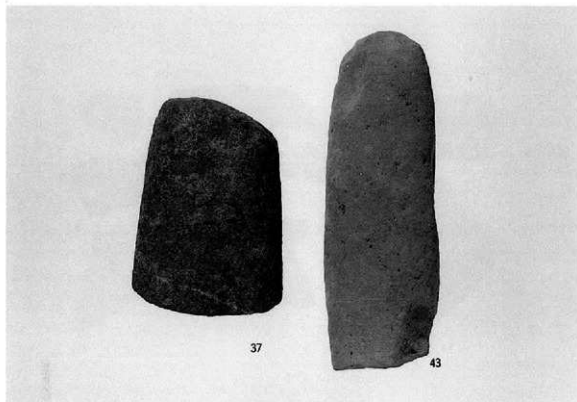
各地区出土土器 3



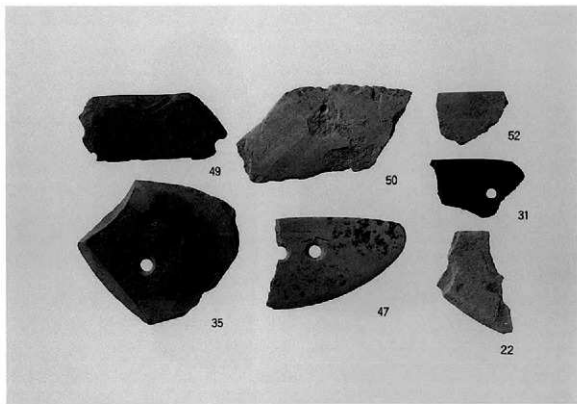




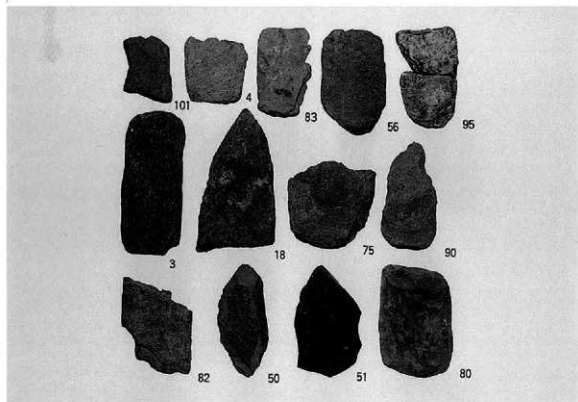
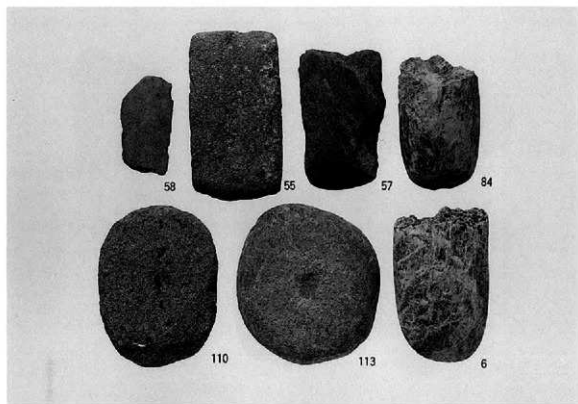
各地区出土石器 1



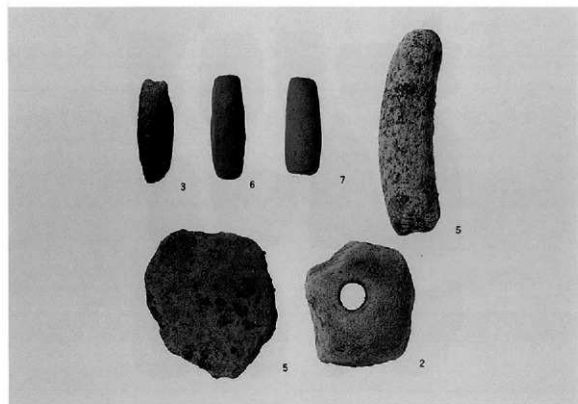
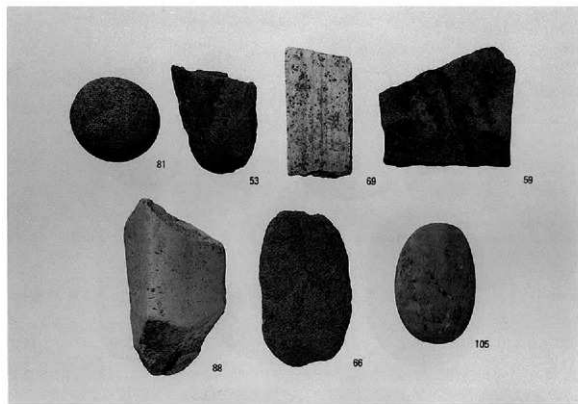
各地区出土石器 2



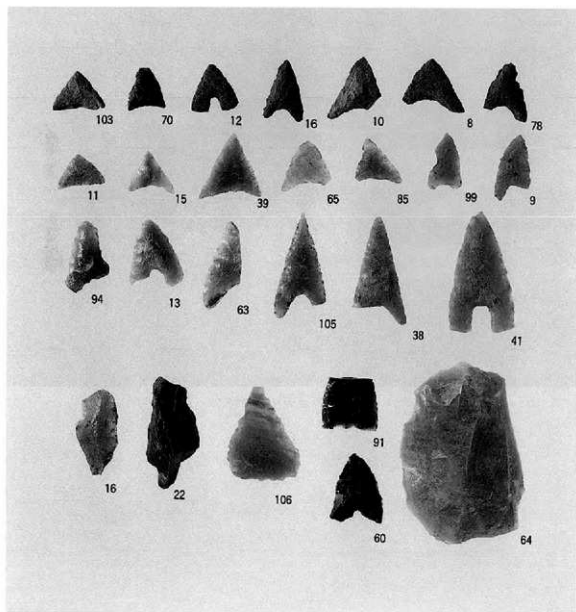
各地区出土石器 3



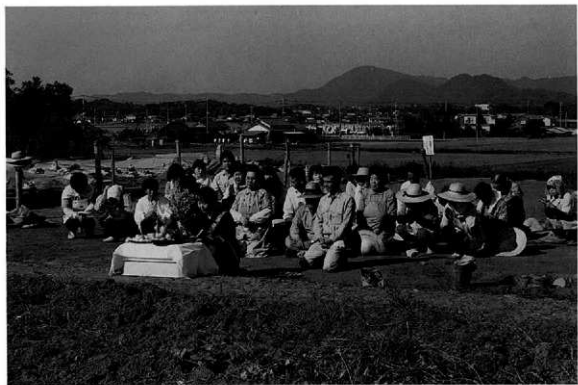
各地区出土石器 4



各地区出土石器 5



各地区出土石器 6



発掘調査に参加したみなさん

報告書抄録

ふりがな	とくながかわのうえいせき							
書名	徳永川ノ上遺跡I							
副書名	一般国道10号線推田道路関係埋蔵文化財調査報告							
巻次	第4集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柳田康雄・緒方 泉							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL 092-651-1111							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とくながかわのうえいせき 徳永川ノ上遺跡	フクオカケンシヤクノオン 福岡県京都市 トヨフサクニオアサトクナガ 豊津町大字徳永	406244	-			1988.6 1990.10	12,500	道路(国道10号線バイパス)建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
徳永川ノ上遺跡	集落	ブレ縄文 縄文 弥生	落とし穴 壱穴 井戸 土塙 貯蔵穴 土塙墓 壱穴住居 土塙	縄文土器 弥生土器 石器 土製品	南側の環濠集落の神 手遺跡と一体となる			

一般国道 10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第4集

徳永川ノ上遺跡Ⅰ

1995年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市埴多区東公園7番7号

印刷 瞬報社写真印刷(株)
福岡市中央区天神5-4-16城戸ビル3F
(092)712-2241

福岡行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 6	登録番号 9

一般国道
10号線

椎田道路関係埋蔵文化財調査報告

第4集

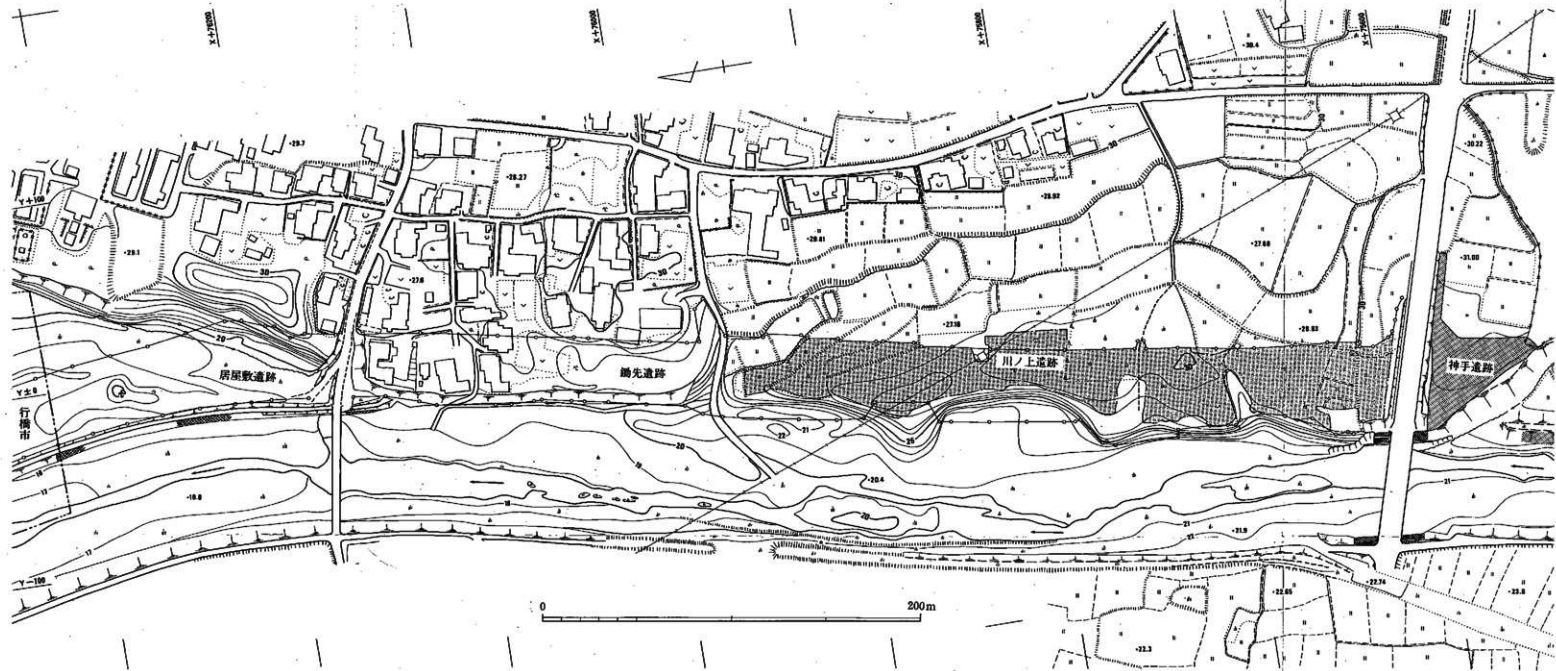
徳永川ノ上遺跡Ⅰ

福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡の調査

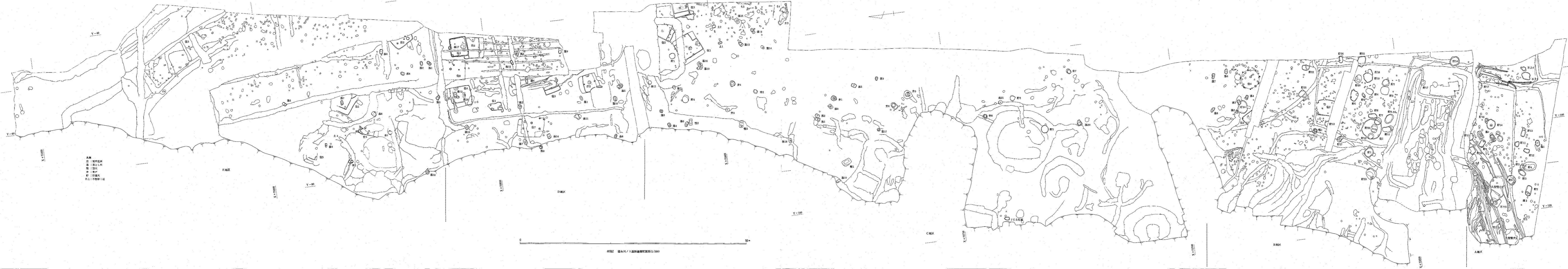
付 図

付図1 徳永川ノ上遺跡発掘区地形図 (1/2000)

付図2 徳永川ノ上遺跡遺構配置図 (1/200)



付図1 徳永川ノ上遺跡発掘区地形図 (1/2000)



付図2 徳永川ノ上遺跡発掘配置図(1/200)